

紀行文編（一）

メーカーに勤めるサラリーマンとしては、かなり外国へ行く機会が多かった方だと思う。世界中の船を相手にする修繕船と言う特殊な世界で働いたせいだろう。英語を避けてメーカーに入社した私としては、思ってもいなかった展開で、人の一生と言うのは面白いものだと思う。勿論、仕事上の出張や駐在目的が中心だが、本などで勉強して知識を蓄えておいて、あの国に行ったらあれを見て来たいな、という目的意識を持っていると、仕事をオロソ力にすることなく、目的を達成することが出来るケースも出て来て、世界中の色々なものに接することが出来るのは幸せだった。従って、紀行文といっても、仕事がからむことになる。外国での滞在日数については、退職の頃纏めた記録

を披露するが、その後の遊び旅行を含めると、現在の数値は、訪問した国が三十六カ国。それらの国に一九三回出入りし、一五八〇日を海外で過ごしたことになる。一番多かつたのが英国の六八六日、次ぎがオランダの二六九日、二番目が香港の二二二日、という結果になった。

私の海外旅行

これまでの私の海外滞在日数の記録を纏めてみました。もう五〇年近くつけて来ている日記が一番の資料ですが、これを引っくり返すのは大変です。ところが、手帳のストックも二〇年分以上蓄積されているし、パスポートも最初の一九六六年のものから七冊全部取っておりますから、時間さえかければ左程難しい作業ではないのです（パスポートの写真で、五年毎の自分の顔の変遷を見るのも面白いものです）。先日は合計の数字だけは出してみました。今日はもう少し詳しく振り返って見ようと思います（これは

二年程前の作業です。右線を付した国が最初に訪れた国です。

最初に外国の土を踏んだのは一九六六年のこと、香港に短期駐在した時のことでした。六〇年に新三菱重工に入社し、修繕船部門に配属されました。六四年に三重工が合併。当時、合併前の三菱系の三重工が三社とも、その頃海運業が盛んになりかけていた香港に修繕船関係の駐在員を出していましたが、駐在事務所を統合した後、旧三菱造船から、英語は勿論、中国語もペラペラの大ベテランが駐在されていたので、若いものに教育を兼ねて半年でも一年でも、ここで海外駐在の経験をさせよう、という制度が出来ました。この制度に乗っけて貰って、六六年四月に二代目のジュニア駐在員として出かけて行つた訳です。当時はまだ海外出張が珍しかった頃で、たかが香港に、それもたった半年行くだけなのに、大勢の会社関係者と、例によって、これまた大勢の一族郎党の見送りを受けて出かけたのでした。生れて間もなかった美貴は、ウコン色のスーツを着た母親の腕の中から見送ってくれました。飛行機の窓から見えた送迎デッキの黄色いスーツが思い出されます。往きと帰りに台湾に寄るのが通例になっていましたので、最初に踏んだ

外国の土地は台湾と言うことになります。香港には以前から可愛がってくれていた華僑のお客さまがいましたが、この人を始めとして大勢の人が出迎えてくれて、何だか外国に来たみたいではないな、と思ったのを思い出します。四月から十一月まで丁度二〇〇日間の駐在でしたが、この間にフィリピン、シンガポール、インドネシア、マレーシア、タイに行くチャンスがありました。マカオには友達と、博打をしに二度ほど夜行の日帰りで行ったと思います。インドネシアに行ったのは、この時一度切りですが、スカルノが退陣した直後で、まだ、政情不安定の頃でしたから、マピとかカピとか言われる若い人たちが、機関銃を持って街の中をウロウロしていて、ホテルに泊まるのは危険だから、と言うことで、三菱商事の支店長のお宅に泊めて貰ったりして、怖い思いをしました。香港は半年間の单身生活でしたが、割と充実していて、土曜・日曜を含めて、退屈だと感じたことは一度もなかったと思います。暑い時期半年間の駐在で、水も不自由でした。まだ、中国本土との水のパイプが繋がっていなかったのです。一日四時間給水なんてこともありました。暑いところですから、大変不自由したのですが、別に不満にも思わず、

少し涼しくなつて、上海蟹の美味しい季節になり、楽になつたな、と思つたら帰る日が来て、残念な思いがしたものでした。マカオ・レースに出場したと言つ三菱五〇〇が事務所に置いてあつたので、島の中は勿論のこと、九竜半島の奥の方まで走り回りました。若気の至りで、酷いヨツパライ運転もしました。今年は中国に返還の年。一寸した感慨があります。

私は重工の船舶関係者の間では、大体欧州派とされていたのですが、最初にヨーロッパの土を踏んだのは割りと遅くて、七一年のことでした。組合なんかをやらされて、寄り道をしていたせいもあります。日本（住友重工）出来の英国の船がスペインの沖で爆発事故を起こし、フランスのツーロンのドックに入ると言つので、修繕工事の入札のための下見に出かけたのでした。営業と言つ立場で、造船所の技術屋さん達を連れて行くという形でしたが、こちらも若造でしたから、どちらが連れられて行つたのやら。三十分以上掛けて南仏のマルセーユに着いたら、スルーにして預けた荷物が行方不明になつて届かず、大変に困つた記憶があります。暑い時期だったのに、冷房のないホテルに

泊められ、暑さで眠れなくて酷い目に遭いました。冷房がない上に、風も通らない酷い部屋をあてがわれ、不用心にもドアに靴を挟んで風を通したり、濡れタオルを胸や顔に当てると言う熱病病みのようなひと夜を過ごし、翌日、ほうほうの体でホテルを変わったのでした。英語が通じなくて苦勞をして、フランス人に対する最初の偏見が出来たのもここでのことでした。技師連中を帰した後、一人で英国に回って営業活動をし、あと、知り合いの客のいるオランダとデンマークに寄って二十一日間の出張でした。帰りの飛行機に乗って、ニクソン・シヨックの騒ぎを知ったのですが、円が固定相場を離れてしまい、円建てで入札しても、幾らのドルに換算されるか判らない、と言う不安定な状態になりました。ラグズとかリースとか言って、為替の投機と見られるものは禁止されて、通貨の予約は出来ないし、困ってしまったって通産省に行って救済方法がないか相談したら「そんな無理をして輸出を伸ばそうとするから、外貨が溜まって、こんなことになるんだ」と冷たくあしらわれて、結局この入札は負けでした。この出張については、別項で少し詳しく報告しました。

三度目が七四年一〇月から七六年十一月までのロンドン駐在です。昔から船のマーケットの中心はロンドンとニューヨークと言つことになっていて、ここには早くから新造船の關係の駐在員が出ていたのでしたが、私が担当していた修繕船部門からも出そうではないか、と言つことになり、修繕船關係二代目の駐在員として出かけて行つた訳です。部長と一緒に出発したのですが、羽田空港で、部長用にと言つことで特別室を取つて貰つたのに、例によつて、諸兄を始めとして、大勢の友人や一族郎党の見送りで、部長が霞んでしまつて、何だか居心地の悪い思いをしたのを思い出します（ウチの一族は何がことがあると、ワツと纏まるのは皆さんもご存知の通りです）。この間のことについては、二十四回の「ロンドン便り」で詳しく報告しているし、その後も「ロンドン便り」で続編もあるので、詳細は省略しますが、七三九日間の駐在期間の中で、オランダ十四回三十二泊、イタリア七回二十七泊、フランス十一回十七泊を始め、ノルウエー、スエーデン、スイス、ベルギー、ドイツ、モナコ、ギリシャ、スペイン、バチカンには始めて行きましたし、東欧もルーマニア、ポーランド、ブルガリア、オーストリア、東

ドイツと最初で最後の経験をしました。西欧はポルトガルとルクセンブルグを除いては総ての国に足を踏み入れたことになりません。

その後は、仕事上の要請に依えて出かけています。七七年が一回八日間、七八年が三回で三十二日間。アメリカに最初に行ったのはこれもずい分遅くて、この年の九月のことでした。シカゴで一寸した仕事があったので、これに引つ掛けて出かけて行って、二十四日間で東海岸のニューヨークからフィラデルフィア、デラウエア州のウイルミントン。オクラホマ州のタルサ、ミズリー州のセントルイスからテキサス州のヒューストン、8
西海岸のサンフランシスコとロサンゼルスまで一回りしました。その後、アメリカには五回しか行っていませんが、一回の滞在日数が長くて、延べの滞在日数は六十一日に及んでいます。

七九年は二回で二十三日。エジプトに行ったのがこの年です。スエズ運河の地中海側の入口のポートサイドに陣取って、砂漠の中を走り回ったのでした。イスマイリアと言ふところにある、運河の管理局が主な訪問先でしたが、近くのクレオパトラのアレクサ

ンドリアへ行く機会が作れなかったのが心残りです。ロゼッタ・ストーンを出土したロゼッタも近くだったのに、行く機会が出来ませんでした。中近東では、エジプトがこの年に八日間、イランに八三年に十四日間、クエートも八三年に三日間滞在しています。

八〇年が一回七日間。これは初めて中国へ行ったのでした。一月の寒い時期に、父に借りたアストラカンの帽子を被り、岡崎の遺品の皮コートを着て、北京から天津、上海、広東と、駆け足の技術交流旅行をしたのでした。交流とは言っても、海洋汚染防止条約の話を一方向的に講演して回る感じでしたから、一方通行で、技術直流みたいなものでした。お土産に仕事を貰って来るので、これがお返しと言うことだったのでしよう。最初、先方に予定表を作って貰ったら、観光親善を含めて、三週間ほどのものになったので、とんでもないと言う訳で、こちらで一週間に収める大変な強行軍の予定を作ってしまったのですから、当時流行っていた熱烈歓迎は受けたものの、親善旅行にはならず、週末の休みなし、観光一切なしと言う、今考えれば勿体ない旅でした。万里の長城、明の十三陵、北壇公園なんか見て来ればよかった、と今になって思います。やっと見たのが

故宮博物館だけでしたもの。訪中団団長の部長さんが体調を崩して途中で帰ってしまい、後半は事務長役だった筈の私が団長役をやらされたものですから、交流の宴会ではカンペイの餌食になり、連日マオタイ酒をシコタマ飲まされて苦しかったのを思い出します。

八一年は、先妻は亡くなる、父を亡くす、横浜の工場に転勤する、と私にとっては一番大変な年だったと言えると思うのですが、六十五日間世界一周を含めて、二回七十二日間の記録が残っています。当時あまり折り合いの良くなかった部長に命じられ、意地もあって、先妻の百か日と父の三十五日の法要を一緒に済ませた翌日出発した六十五日間世界一周旅行では、十三カ国を歩いていきます。「父親の初盆もさせて貰えない、なんて人道問題だ。反対運動を起こしてやろう」と言ってくれた先輩応援団も出てくる騒ぎになりました。でも、欧州では住み慣れたロンドンを中継点にしたし、行った先が何度か行ったことのある国ばかりだった上に、事情を知っている駐在員や商社の人たち、代理店の人たちには大事にしてもらいましたから、割と楽に回れた記憶があります。留守番の子供達には寂しい思いをさせたけれども、私にとっては、結果的には傷心を癒す旅

だったのかも知れませんが。初めて行く土地ではありませんから、休日に時間を惜しんでガサガサと観光旅行をする必要がなく、体調調整のためのゴルフと出張レポート作りに当てると言つ健康的な日程だったせいもあるのでしょう。お蔭で、出張レポートを帰りの飛行機の中でスツカリ完成させ、A4サイズで厚さ五センチほどのレポート二冊を、空港でその部長に、叩きつけるようにして提出して、せめてもの抵抗を示した積りになったのでした。若気の至り、の部分もあつたのでしょね。最近、悪い方で話題になっている、英国のチャールズ皇太子とダイアナ妃のロイヤルウエディングを見る機会に恵まれました。

八二年がゼロで、八三年は四回で六十五日間。戦乱のイランへ行つて、パサパサに乾いた空気のテヘランで、静電気に悩まされ、珍しくホームシックを患いながら、ターバンとチャドルを身に纏い、ライフルやピストルを持った怖い顔の髯面のオジサン達を相手に、机を叩いてハード・ネゴをしたのも懐かしい思い出です。

八四年は三回で二十七日間。オーストラリアに初めて行ったのがこの年でした。三菱

ミラージユの襟巻きトカゲのコマーシャルが流行っていた頃で、トカゲ・デザインのコインが良いお土産になりました。オーストラリアには、都合四回、十二日間と言う記録が残っています。八五年は一回のみ四日間。八六年が四回で三十一日間です。

八七年が三回で二十五日、この中にインドが含まれています。インドはボンベイに用事があったのですが、仕事もさることながら、無理やりに仕組んでニューデリーまで出かけ、憧れのタージ・マハールを見たのが良い思い出です。

と言うことで、重工時代はここまで。最後の八八年と八九年は海外出張はありませんでした。合計すると二十七回の海外出張で、三十四の国を訪問し、海外で過ごした日数が一二六四日でした。

ハウステンボスに来てからも結構な数になっています。九〇年はオランダ長期出張があったので、二回で百八十八日。九一年がオランダとイタリアへの買い物旅行の一回で十四日間。九二年は三回で二十一日ですが、欧州への買い物旅行と中国への招待旅行に加えて、初めての観光旅行のハワイが含まれています。遊びに出かけたのが、これまで

にこの一回切り、と言うのも寂しいですね。九三年がゼロで九四年が二回で六日間ですが、これが韓国のみ。韓国はどうしても好きになれず、これまでやや避けていた所為もあって、機会がなかったのですが、この年は仕事からみで韓国が続きました。こちらへ来てからの出張は八回で九ヶ国。合計二二九日です。

総合計してみますと、これまでに日本に出入りした回数が三十五回。三十五の国に行つて、一四九三日を海外で過ごしたことになります。四年と一ヶ月と言つことです。一番多いのがやはり英国で、六七五日（二年間の駐在期間中、出張や遊びで英国々外で過ごした日数は、出た先の国の滞在日数に入れました）、次にオランダが来て二四六日、三番目が香港の二二二日です。ここまでは、駐在とか長期出張でステイした分が含まれていますが、短期の出張で合計の滞在日数の多いところを上げてみますと、アメリカが五回で六十一日、イタリアが十一回で四十四日、フランスが二十一回で四十日と言つこととでこれが御三家。後はノルウエーが七回で十七日、ドイツも七回で十六日、シンガポールも七回で十五日です。滞在日数が十日を越えるところは、イランに一回で十四日、

ギリシャが二回で十三日、オーストラリアが四回で十二日、スペインが一回で十一日、スイスには五回で十一日。マレーシアが七回で十日、台湾が四回で、インドは一回で同じく十日滞在しています。

中々手間の掛かる集計作業でしたが、一つ一つ思い出しながらやって見ると面白い。これからの程度増えて行くのだろうか。これからは観光旅行的なものが増えて来て、あまりあくせくしないノンビリ旅行が出来るようになれば良いな、と思っています。

(平成九年五月一日)

ロンドンの休日(八月七日の日記より)

今日は休みだ。七月二十九日に日本を発つて以来、休む間がなかった。最初の一週間は一応造船所の人たちを引率していたし、南仏は暑くて大変だったが、ロンドンへ来て一人になったのと涼しいのとでホッとしている。

一日自由だ、と思うと張り切っていつもより早く起きる。何を見てやる。昨夜は三

菱商事の人達と大分晩くまで飲んだのだった。思い出してみると大分飲んでいる。まず、八時近くに事務所を出（こんな遅くまで仕事するのは日本人だけ。特に僕が行つてからは毎日遅いので、英国人のテレックス・オペレーターに評判が悪い）、近くのパブリック・バーでダブル三杯、次は中華料理店。ここでもウイスキー三杯位飲みながら食事。その後クリスティーヌ・キラー事件で有名なムーラー・キャバレー・クラブへ行つたのだった。いわゆるキャバレーというスタイルは日本だけかと思つていたが、酒飲んでシヨールを見て、シヨールの合間にダンスが隣に座つてサービスしてくれるスタイル。一度ダンスとダンスを踊つてみたが、相手の背が高く格好がつかないので早々に切り上げた。ここではジントニックに切り替えたが気持ち良く入つて行く。流石に最後は眠くなつた。一人がフォード・コルティナを運転している。一斉取締りがないので、事故さえ起こさなければ飲酒運転も大丈夫、と云つて平気でやつている。ホテルに送つて貰つたのが二時。

今日は十二時にビクトリア駅（ロンドンにはロンドン駅と云つ一つの纏まつた駅はな

くて、各方面行きの駅が三つ四つある）から汽車で訪問するところがあるので、それまでどうしようか、と考える。昨日は三菱商事の事務所へ行つたが、オープンが十時とのことなので、日本にいるときのようにな七時に起きると大分余裕がある。柄にもなく朝の散歩をしたのだった。ホテル・ベッドフォードと言つ私の泊まつた安ホテルはラッセル・スクエアの近くにある。ロンドンの街は街自身が素敵である。古いものがそのまま残っている。何の当てもなく歩き回つて少しも飽きない。緑の素晴らしい公園がある。今が一番良いシーズンとのことで、緑がきれいだし、背広着て歩いて暑くなく寒くない。英国人は行儀が良いと言つが、気候のせいもあると思う。建物が良い。特に名所に行かなくても普通の人が住んでいる建物で十七世紀に建つた、なんてのがザラにある。それがチットモ不思議でなく、自然に存在している。所々に古い形の教会がある。ふと四つ角に出ると一寸した緑の中にどこかで聞いてことのある人の銅像がある。通りに皆名前が付いていて、その名前がモームやディケンズやコナン・ドイル等英国の小説の中に出てきているのだろう、どこかで聞いたことのある名前が多くて親しみ易い。歴史や文学

をもう少し勉強してくればもつと面白いに違いない。昨日はそんなわけで朝から当てもなく一時間以上ブラブラ歩いてみたことだったが、今日はもう少し時間を有効に使つてやろう、と思う。

地下鉄でピカデリー・サーカスに行つてみることにする。噂には聞いていたが、ロンドンの地下鉄は判り易い。勿論地図が要る。地図で目的地を発見したら 印のついた地下鉄の駅を探せば良い。乗り換えは何度もあるが駅名さえシツカリさせておけば標識が親切なので間違えることがない。一度だけ逆方向に走つたことがあつたが、最初でも面食らうことがなかつた。市内の大抵のところは五ペンス⇐四十五円位である。相当深いところを走っているようだが、エスカレーターやエレベーターが完備しているので楽なもの。いずれも古いもの。今でこそ驚かないが、五十年前に来た人は驚いたに違いない。電車も古くて、もうあまりキレイとは言えないが、肘掛のついた椅子なので変に割り込まれて窮屈な思いをすることもなくユツタリしている。

ピカデリー・サーカスは所謂ロンドンの歓楽街。有名なソホーもこの近くである。四

辻にエロスの像がある。降りて当てもなく歩いていたらトラファルガー・スクエアに出た。ここはネルソン提督の像のあるところ。高い塔の上に提督の立像。これが四頭のライオンに守られている。一目で物凄く偉い人だったのだ、と言うことが判る。ここでは大昔から偉人、尊敬に値する人、がハッキリしているみtaiである。子供の頃からこう言う教育を受け、現実に長い年月尊敬されている事実を見て育てば、ああいう人になりたい、尊敬される人になりたい、少なくとも、人に後ろ指を指されるような人間になりにたくない、という意識が知らず知らずの内に強く出来るのではなかるうか。英国人は個人個人の人格を尊重すると言う。例えば税関でも、申告するものがあるか、と聞かれ、ない、と言えばフリーパス。ところが若しウソを言つてこれが露見した時は罪も重いし、第一恥が大きい。恥とか名誉とかを大事にする国民だ、とは前々から感じていたが、街の古さを見、街に古さが生きているのを見て、これが人格形成の大きな要素ではなかるうか、と感じた。少し無理なコジツケかも知れない。

英国人の人格のついでにもう一つ。古いものを残す、しきたりを守る、という国民性。

保守的という言葉がこれ程ピッタリする国民は少ないのではなからうか。古い建物を残す、街並みを、道路を残す、銅像を残す。これは良いとして、例えば、バッキンガム宮殿の衛兵の交代。普通考えれば何ともバカバカしい大袈裟なことを何百年となく大真面目でやっている。今では観光の客集めの意味があるのかも知れないが、それにしてもあれだけ大勢の若者を叩き上げて、あれだけ見事な式典の訓練をする、と言つのは観光のためばかりではあるまい。これで良いのだ、という自信、又は安心感がああいうしきたりを永く存続させているのではないだろうか。第一、公式の席に女王は今もって馬車に乗って現れる。これが観光だろうか。もう少し考えてみると、英国が今非常に苦しんでいる経済の問題に突き当たる。経済成長とか発展とか言つて騒いでいるこの時代に、英国の経済成長率は低い。元々高度な経済を持っているから暫くは良いのだろうか、黙つて待つていれば早晚、後進国に追い越されて行くことは目に見えている。ところがここではガツガツした先へ先への感じが無い。皆、自分なりに自分の置かれた境遇に相応して生活が維持できることに満足しているのではなからうか。教育にして然り。オックス

フォード、ケンブリッジは私立で金が掛かることは事実。しかし、運転手の息子、門番の息子は、決して無理をしてこれらの大学に行こうとは思わない。運転手や門番が低く見られているというのではない。それなりに仕事に自信を持ち、誇りを持っているようだ。立派なおジサンがキッチンとした門番の制服で、自分の持ち場を守っている、と言う感じで、堂々とチップを受け取っている。日本だったら、親が苦しい思いをしたら子供は何とかして楽にしてやるう、と考え、どんなに無理をしても大学にやるう、と考えるだろうし、誰だって少し優秀なら安い国立の学校に行けて、安い大学を出た方が尊重される。いわゆるエリート仲間入り出来る。英国と言うところはこうした階級と云うか、階層の意識がシッカリしているようで、詰まらないような仕事をしていても少しも卑下したところはない。その代わり、所謂エリートは日本のエリートとは桁違って比較が出来ない位。いつか坂本二郎の本で読んだが、こうした将来のことを考える度合いというのは日本人の方が強いのではないかと思う。

大分話が脱線した。今、ネルソン提督の立像の前にはいるのだった。辺りを一時間ほど

歩いて、又地下鉄。二つ目がハイドパークである。これはロンドンで一番大きな公園。英国の公園は何か深い、という感じがする。木が古いこともある。芝生が立派なこともある。キレイに手入れされていることもある。例えば、東京にも規模は違うが、日比谷公園や駒沢公園など似たような公園がある。木もある。芝生もある。キレイである。でも、外見は同じでも深みが違うような気がする。例えば、芝生一つを取ってみても、駒沢公園の芝生なら、一寸足を引つ掛けるとすぐ土が見える感じ。でも、英国の場合、いくら乱暴に歩いても平気。少しぐらい掘ってもまだ下に芝生があるのではないか、と言ふような深みと言ふか重みを感じられる。どちらが良いとかいうのではない。これはやはり、歴史が自然に作るものなのだろう。

流石に疲れて公園のベンチで絵葉書を書く。旅に出ると国内旅行でも、いつも何枚か絵葉書を持って歩くのが最近の習慣になっている。一寸した時間、例えば食堂で食事を待っている時間、汽車や飛行機を待っている時間、乗り物の中等、二枚や三枚の絵葉書はすぐ書ける。宿に帰って書くなんて時間がモツタイない。パークでは疲れ休めのため

座った時間を利用したのだが、三枚ほど書いたら夕立みたいなひどい雨になった。ロンドンではレインコートと傘を離すな、と言われるが成る程。木の下で雨宿り。風流なもの。二十分くらいで晴れたが大分濡れてしまった。

又、地下鉄でビクトリア・ステーションに出る。面白いのはこの一ヶ月、汽車がどの位時間通りに走ったか、を示す表がある。時間通り、が七〇%位。五分遅れ以内は九〇%まで行かない。こんなものを出す以上、割と遅れがあるということなのだろう、そこへ行くと日本の国鉄さんは大したもんだ、と思っていたら、アナウンス。どこかで22事故があり列車が遅れます、とのこと。どれくらい待てばよいのか何てことは教えてくれない。一時間以上待ったがラチがあかないので郊外の友人宅行きは止しにする。明日、日曜日は一日かけて市内観光をする積りだったが、これを半分にして郊外に行こう、と予定を変更する。とすると目ばしいものは今日の内に見ておけ、と言うことで又地下鉄東の果てまで行き、ロンドン塔に入る。十六世紀の建物、大変なものなのだろうが、街中でこれとあまり変わらない建物を、名所旧跡としてではなく見ているので、さして大

変なものとは思わない。中で見応えのあつたのは、王冠の類、金の食器。王冠はダイヤモンドをはじめ色々な色の大きな宝石で飾られていて、それ自身が後光を放っている感じ。それが幾つもある。杖だとか剣だとか、宝石をちりばめた宝物が沢山ある。威光、と言つ言葉はここから出たのではないか。これだけの宝物を見せられれば、どんな人でも、これを所有している人は大変な人なんだ、自分はとも敵わない、と思うのではないか。物で脅かそうと思つたら桁外れのものを持たなければならぬ。それと馬鹿でかい金の食器。あんな宝物を全部売つたら英国の国際収支なんて一辺で解決するのではないか、と思つたりする。貧乏性なんだね。あとは武器の類がドッサリ陳列してある。日本の刀、ヨロイもあつた。一時間ほどで切り上げ、又地下鉄で中央に戻り、大英博物館。看板まで時間がないので本当の駆け回り。マグナ・カルタ、有名作家の自筆、古い時代の写本、有名な小説の初刊本などがある。歴史もあるが古い時代が主（ロゼッタ・ストーンは見損なつた）。世界史や小説に出てくる近世の騎士、中世の王様と名宰相などについては探し方が悪かつたのか、見当たらなかつた。一部工事中だつたからそこにあつたのかも

知れない。五時に追い出されて来て、やっと昼食を食べる気になる。途中でなんて時間が惜しくて食べるどころではない。

博物館とロンドン大学はホテルの近くなので歩いて一旦戻り、三〇分ほど休憩。少し休んだら又元気が出てきた。まだまだ明るい。今の季節だと昼が長い。九時過ぎないと暗くならない。緯度のせい。早い話が白夜のハシクレである。ロイヤル・オペラかバレエの席の予約を頼んでみたが駄目。週末の席なんてずい分前から予約してあるのと。仕方がない。グツとグレードを落とし、夜の部は又ピカデリー・サーカスで過ごすことにする。バブリック・バーに入ってみる。ストリップ小屋に入る。丁度、温泉のストリップ小屋みたいなウラぶれた感じの小屋は沢山あったから、グレードは色々あるのかも知れない。小さなベンチに英国の紳士が座っている。ヒゲをやし、ネクタイをつけたリユウとした身なりの年配の紳士がチンマリ座って、ダンサーの出を待っているのが面白い。あとはウインドウ・ショッピング。大抵の店は夜は休みだが、本屋は開いている。このポルノも相当なものである。税関を心配しながら少し仕入れる。

十時になつても十一時になつても人が減らない。若い人ばかりではない。社用族なんて感じのグループはいない。老夫婦もいればヒッピーみたいなものもある。それぞれに週末の夜を楽しんでいる。歩き疲れたが、帰るのが惜しいので十一時からの深夜映画に入る。途中で地下鉄の終電の時間を調べるのを忘れたことに気が付いて出て来る。ピカデリー・サーカス〇時一〇分が終電で、運良く丁度これに間に合う。もう切符切りもない。降りた駅で乗車駅を申告して金を払うのみ。

良く歩いた。風呂で長々と足を伸ばし、書き物をして床に入ったら二時。良く眠れる25
だろう。

(昭和四十六年八月三十一日)

先稿は最初のロンドン行きで感じるが多かったので、長いものになつたが、次からは、滞在日数の長い順に、国ごとに纏めてみようと思う。古いものも新しいものもゴツチャになるが、感想を比較してみるのも面白いと思う。

英国

英国は二年間駐在していた間に書いた「ロンドン便り」が中心になる。「ロンドン便り」の中から、紀行文に類するもののみを引っ張り出して見よう。

サッカー見物（ロンドン便り 一）

ロンドンに着いて二日目の十月三十日、サッカー欧州リーグ戦のチェコ対イングランドの試合があるというので、五千円出して見に行くことにした。小生、サッカーにはあまり興味がなかった方だが、オリンピック後、日本でも凄く盛んになり、日本リーグなんか作って、当社が出たりするものだから段々見るようになつた。やってみると上手い奴に足でかき回され、ごまかされた感じで腹が立つし、苦手のランニングばかりなのでつらくて、自分でやるものではないと思つたが、見ている分には息も切れないし、スピ

ードがありきれいで面白い。ペレが来た時、二千元払って見に行ったことがある。

この地のサッカー熱は大変なものである。他にこれと言った娯楽のないせいだ、とも言う。毎週、都市対抗戦みたいなリーグ戦をやっているが、これにかける情熱たるや大変なもの。自分の出身地のチームが出る時なんか、応援隊が繰り出すし、そうでない連中は賭けに夢中、といった感じ。特に国際試合になると凄い。

当日は、ウエンブレイと言うところにある英国でも一番大きい方の競技場で試合があった。地下鉄で行くことになるが、まずこの辺からが大変である。どんなラッシュアワーでもユツタリしている地下鉄が、この時ばかりは超満員。東京のラッシュ時の酷電並である。若いグループが旗や鳴り物を持って乗り込み、ホームや電車の中で大声で応援歌を歌い出す。するとそれが段々に広がって行き、電車の中全体がうなり出す。いやもう大変な騒ぎである。これがあの大人しい紳士面をした同じ英国人かと思う。何処かに秘められたエネルギーがこんな時にほとばしっているみたいな感じである。英国は今、怠け者の国の代表みたいなことを言われ、経済的にも相当参っているが、やはりこれだ

けのエネルギーを一つにまとめれば、何かやるのではないかという気さえする。

競技場に着いた頃は、もう雰囲気がスツカリ出来上がっている感じで、寒い日だったが、十万人収容の大スタジアムに満員の観客の熱気で寒さなんか感じない。応援はやはりイングランド・チームに集中するが、相手の良いプレーには盛んな拍手があり、マナーは流石である。

地下鉄の中と同様、一方の隅で誰かが応援歌や掛声を出すとその周りが唱和し、遂には競技場全体の声になる。点なんか入れようものなら、全員立ち上がってワアワアやっている。結局三対ゼロでイングランドが勝ったが、帰りも、途中の立ち飲み場で乾杯する奴、良かった、良かった、と誰かれなく握手を求める奴。言ってみれば子供っぽくガキの集団である。

この雰囲気の中で、愛国心とか郷土愛というものについて考えさせられた。日本人と言うのは郷土愛を忘れかけているのではないだろうか。目先のこと、金目ばかりに目にくらんで自分の生れたところに誇りを持ち、心の故郷として大事にする気持に欠けてい

るのではないか。高校野球ではかなり郷土意識が盛り上がるが、都市対抗なんかはむしろ会社対抗になる。他には自分の故郷を表に出して、ヒーヒー、ギヤーギヤーやる感じはないようである。故郷を大事に思う心がやがては国を大切にし、人類全体を愛する気持になるのではないだろうか。あるサイドから見れば祖国愛なんてのは危険思想であり、帝国主義思想の根源と言うことになるかも知れない。でも、自分の生れたところを良くしよう。日本に誇りを持ち、少しでも良くしよう、という気持を日本人全部が持つていれば、自分のことばかり考えての買占めだとか、インフレだとか、爆弾騒ぎだとか、はなくなるのではないだろうか。外国へ行ってハイジャックまがいの事をしたり、テロをやったりする連中が他の日本人にどれほど迷惑をかけていることが。

とにかく日本人が日本のことを考えないで誰が心配してくれるのか、ということ。サッカー見物の中で自国チームの応援に夢中になり、自分の郷土出身の選手の活躍に大騒ぎしている英国の良い大人達の姿を見てこんなことを考えた。

(昭和四十九年十一月二十三日)

・ 十月二十八日、羽田発にて当地に来ました。出発に当っては、各地から色んな形での激励をどうもありがとございました。二年間あまり肩を張らず、背伸びせず、何ものかを見て帰る積りです。

ゴチャゴチャ（ロンドン便り 二）

今日は十月二十八日に日本を離れてからのゴタゴタをゴチャゴチャ書きたいと思います。したがって題は「ゴチャゴチャ」

一・着任のこと

部長と一緒に出て来ましたので、着いてすぐ重工・三菱商事の欧州各支店の人に集まって貰って会議をやり、その後、お客を一〇〇人ほど招いてカクテル・パーティ。二・三日ロンドン在の客廻りをした後、十一月五日から英国北部の客廻りをしました。ニュー・カッスル、グラスゴー、リバプールを廻り、その足でオスロ、ストックホルム、

コペンハーゲンを廻って、コペンハーゲンで部長と別れ、ホツとしました。カバン持ち旅行だ、と冗談を言っていました。部長が途中でぎっくり腰になったので、名実ともにカバン持ちでした。造語の好きな岡崎家の人々によれば、カバン持ちは「シャー」とのこと。麻雀に詳しい皆さんにはお判りいただけるでしょう。その後、ロッテルダム、アムステルダムを廻ってロンドンへ帰ったのが十一月五日。ゴタゴタしている内に十一月二十日、前任者が帰国して一人になりました。

二．家のこと

そんな訳で自分のことが何も出来ず、休日の空いた日になると時間を見つけて不動産屋を歩き、家探しを始めました。日本でいうマンションみたいな小さなアパートがあるの良いと思いましたが、あるのは一軒家か二軒長屋。レンガ造りの小奇麗な家ですが、ベッド・ルームが二つも三つもあるのばかりで中々小さいのがなく苦労しました。良いのがあっても遠かったり、通りに面していてうるさかったり。やっと見つけたのが少し

遠いけどレンガ造りの小さな家で二階と一階を分けて使うようになっていたのでこれに決めました。一〇畳位のベッド・ルーム一つ、六畳位の居間みたいなのも一つ、六畳位の食堂らしきもの一つ、後キッチンもキッチンとしているし、勿論バス・トイレつき。一寸した庭もあります。これで家賃月七万円。車が入った翌日、不案内な道と馴れぬ車に悩まされながら、自分の運転で引越しを完了せしめました。通勤は door to door で一時間というところ。

三・車のこと

車はどうしても要る、というので少し落ち着いた時点で申し込みました。品薄で中々手に入らぬ、とのことでしたので三つほど希望の車種を出し、色には文句をつけないことになっていましたら Ford Cortina 1600CC 4 door automatic 色は Green があると言いつので決めました。こちらのインフレーションも大変なもので、半年前に比較し、一五%位上がっている感じです。それでも税金なんか全部入れて一七〇〇ポンド、一二〇万円

というところですよ。銀行からの借金を一年で返済することにしたので大変です。「車のディーラーに首吊り用のロープをサービスして貰うことにした」というジョークが受けました。オートマティック車は初めてなので、まだ左手、左足が邪魔です。どうかすると左足がクラッチを求めて地団太を踏み、左手がギヤ・レバーを探してウロウロしますが、運転は簡単。段々自分のものになっています。保険は対人天井なし。自家保険も含めて全部カバーして年四万円ほど。これは安心料。英国の車は細かいトラブルが多いと聞いていましたが、今のところは気持ち良く走っています。

四・出張のこと

この一ヶ月でロッテルダムにはもう三度も行きました。オランダ・シエル所属の大型タンカーが、南米の南端、マゼラン海峡で座礁し、これを日本に持って来ようとしています。入札の結果は、まず良い線を行っているので何度も打ち合わせに足を運んでいるのです。オランダ人は中々駆け引きが上手くやり難いのですが、行けば行っただけのこ

とはあるし、今のところは良いアンテナ役が来ていたので、自分でも面白くやっています。商売柄とは言いながら底の抜けた船があると走り回っている自分が滑稽でもあり哀れでもあります。楽しんでやっている感じですよ。

五・ゴルフのこと

週二日の休みだし、一人ではゴルフでもやらないとやることもない。せめてゴルフ位上手くなって帰ろうと思い、まず道具を探しました。香港で買った McGregor のアイア 34 がどうにも馴染めないのです。道具は全部置いてきたのです。Scotland 製の Ben Sayres というのがありますが、あまり良いと言つ人がいないので、これはやめにして色々探しましたが、アメリカ製の有名な Lynx。街の店で聞いたら二四〇ポンドのところ、ゴルフ場のプロショップで一六六ポンドというので決めました。十二万円くらいですから悪くありません。忙しいとか言いながら、もう何度か行きました。このクラブは最初からあまり違和感がなく、気持ち良く打っています。これからはもうクラブには文句をつけ

られません。

こちらのゴルフはまず安い。キャディが付かず、セルフのカートが自分が担ぐのですが、ビジターでも四ポンド、三〇〇〇円足らず。パブリックだと一ポンド、七〇〇円くらいで出来ます。それが結構まともなコース。大体はすいているので、昼から行って四時頃までに楽にワン・ラウンド廻れます。ただ、ヤーディジの目印がないのでクラブの選択が大変。これに慣れるまで良いスコアは期待できません。面白いのはヤード・ポンド法の本拠のここのコースは長さがメートルで書いてあります。日本も無理しないでそろすれば良いのに。

(昭和四十九年十二月十日)

続「コチャコチャ」(ロンドン便り 四)

一・ロンドンの道

前にも書いたことがあります。ロンドンの道はどんな小さな通りにも名前がついていて、これが何百年も変わっていないので、地図は実にシッカリしています。ですから

地図を片手に歩くには判り易い街だと思います。ところが通りがグニヤグニヤしている上に、一つ角を過ぎると、すぐ通りの名前が変わるので、馬車程度のスピードで走る分にはよいのですが、車で走るには誠に厄介なのです。おまけに狭くなっているところは一方通行が多く、行きたい方向に突然行けなくなったり、ロータリーのお化けみたいなのがあって（こちらではround-aboutと言います）一旦、その中に入ってしまうとどこへ出たら良いのか方向がわからなくなったりします。勿論、右折禁止、左折禁止はそこら中にあります。この通行規則も何十年と変わっていないのでしょう。かなり広い範囲に亘り、詳しい一方通行地図があります。

今のところ、助手席に地図を広げて横目で地図を読み、目の隅で道路標識と道の名前を見、少しは信号や他の車も見て、出来ればぶつからないように、と大変に忙しい運転をしています。一度走ればどうにか見当がつくので、一寸したところは地図なしでも行けるようになりました。少し馴れればどうということはないようです。

二・ ロンドンのタクシー

ロンドンのタクシーはタクシー用に作られた車です。黒塗りで大きく、入り口も広いし中も天井が高く、すごく広くて、乗り降りしがし易くなっています。簡易ベンチを出すと後ろの座席に五人まで乗れるのです。助手席はなくて荷物が置けるようになっていて本当にタクシー用なのです。一般に人には売ってくれませんが、先般、日本の土地成金（？）が大変な苦勞をして一台買つて評判になりました。日本では一台きりでしょう。

運転手は大抵年を取つた人で、大体親切です。夜になると日本の雲助まがいの人が出て来たりしますが、大体において間違いないようです。運転も日本のカミカゼとは違つて穏やかで他の車にも親切。狭い通りから出られなくて困っていると、道を譲つてくれたりするし、無理な追い越しなんかしないし、運転マナーもお手本になります。また、道に詳しいのには驚くばかりで、どんな小さな通りでも、通りの名前を「正確に」言つて、番地を言えば大抵判つてピシヤリと連れて行つてくれます。ビルの名前も大体判ります。ビルや通りが古いせいもあるのですが、タクシーの運転手の免許を取るには

地図の試験があつて、これがかなり難しいとのこと。東京の運転手に爪の垢でも煎じて飲ませてやりたいくらいです。

三・爆弾のこと

アイルランド解放戦線の過激派が、盛んに爆弾を破裂させます。特にクリスマスみたいなときとか、何かの交渉の前とかになると回数も増えるようです。街の中心地のみならず、北の住宅地の方へも拡がって来て、地下鉄が止まったりします。アイルランドはもっぱら爆弾ですが、アラブ・ゲリラがイスラエル系のホテルに車の中から機関銃で銃弾をぶち込んだりします。先日には保守党党首だったヒース氏自宅前で、何者か知れぬ犯人の仕掛けた爆弾が爆発し、二階のベランダまで目茶苦茶にしました。ヒース氏は音楽会でタクトを振つた後、帰ってくる途中だったとのことで、家にいたら大怪我をするところだったそうです。紳士の国ロンドンも大して紳士ではありません。

しかし、こんなことがあつても、こちらの人はあまり騒ぎません。アイルランドの爆

弾は正確な予告があるのが普通です。新聞によると「アイルランドなまりの男の声で電話があつた」と言うことになります。退避する時間があるので、退避の報があると、紳士らしく整然と逃げるらしいのです。ですから、どんな繁華街やデパートで爆発しても人身事故は余りありません。爆弾の処理に来た警官が怪我したりします。爆弾は一つの意思表示、という考え方があつて、一般の人も心得ているので騒がないのかも知れませんが、ところが、予告しなかつたり、予告が遅れて怪我人が出たりすると、アンフェアだ、と言つて怒ります。爆弾にフェアもアンフェアもないものだと思ひますが、この辺は英人らしく面白く面白く思ひます。

(昭和五十年二月九日)

マギー旋風(ロンドン便り 五)

英国はこの一月から二月にかけ、保守党の党首選挙で一騒ぎでした。ご存知の通り英国は保守党と労働党の二大政党で政権を争つて来ていますが、一九七〇年から政権を握つていたヒース氏の率いる保守党が負け、その前に一九六四年から六年間政権の座にあ

ったウイルソン氏の率いる労働党が政権を奪い返しました。英国病に起因すると言われる経済の破綻から来る社会の混乱をどう解決するか、というのが昨秋の総選挙の焦点だったわけですが、ヒース氏は非常に強腰の人で、炭鉱だ、鉄道だ、とストライキを連発して政府に圧力をかける労働組合の非を国民に訴え、誰が英国を統治しているのか。政府か、労働組合か（Who governs Britain?）という対決姿勢を示し、国民の選択を求めました。これに対しウイルソン氏は労働組合から提唱された社会契約を前面に出し、労働組合とは話し合いで行こう。政府も約束したことは守るから組合も約束を守って協力してくれ、と訴えました。選挙の時期が丁度炭鉱ストのひどい時で（労働党側の選挙戦術だったのかも知れませんが）停電が続いたり、汽車が止まつたりしたときだったせいか、国民は僅差で労働党を選んだのでした。

労働党と言っても、ウイルソン氏は別に労働組合の出身者でも共産主義者でもありません。本当かどうか知りませんが、資本論なんか最初の二ページ読んだけど、あまりつまらないので読むのを止めた、と言ったことがあるのだそうです。英国で言うエリート

の一人で、何でもヒース氏ともオックスフォードの同級生とか言われます。政治家と云うか、国をリードする人たちの地盤が日本とは大分違うのではないかと思えます。大変な秀才だとのことですが、人によっては、あまりアチコチ気を配りすぎるので自分ななくて嫌いだ、と言う人がいます。これに反しヒース氏の方は頑固一徹と言うか、我一人と言う姿勢。正しいと思ったことは強引にでも貫くと言った人とのこと。ウイルソン氏との対決ではこれが裏目に出たのだ、と言われます。こつこつ風になつた国にはこつこつしたハッキリした強い姿勢のリーダーが必要なのではないかと思えますが、ヒース氏があまりにストレートなので、国民が怖がったのだ、という見方のようです。

その負けた保守党は野に下り、シャドウ・キャビネットを作つて、ヒース氏が陰の首相でした。ここでは野党にもチャンと内閣があり、夫々の大臣がいて与党に対抗する政策を持っています。本当の大臣と同様（全く同額かどうか判りませんが）手当ても貰っているのです。ですから、例えば政権交代があつてもそのまま立場を逆転すれば良い訳で、その代わり政府のやり方に対する批判も、どこかの国みたいに現実離れした批判のため

の批判なんか出来ません。いつ立場が変わって、自分が言ったことをやらされる羽目になるか判らないのですから。この辺は流石に民主主義の先輩だけのことがあり、大人の政治組織だと思います。

陰の首相には野党の党首なる訳ですが、先般その保守党の党首選挙があつたのです。何人かの候補者の中に四十九歳のマーガレット（マギー）・サッチャーという婦人候補がいました。二十歳台から政界に入っている相当な人とのことですが、代議士になつたのは五・六年前とのこと。保守党内閣でも内政の担当大臣をしていた程度だつたとの事です。何でもインフレが厳しくなつて来たとき、大臣の身でありながら「弱い主婦が出来ることは、安い間に買い溜めをするしかない」と公言して物議をかましたことがあるそうです。この人もオックスフォードの出身で、労働党の婦人政治家、シャリー・ウィリアムス女史とどちらが先に首相になるか、という話題の対象になつた人でもあります。この人が党首選挙に出てきたら、ドンドン人気が出て来ました。中々魅力ある女性で、テレビ写りが良くて得をした、とか、ヒース氏の強い姿勢を恐れるあまり軟らかい感じ

の女性が得をした、とか言われますが、選挙戦の終盤には、ヒース氏危うし、と言われるほどになりました。

日本同様、新聞は前日まで予想で持ちきりでしたが、大方の予想は、ヒース氏が第一回で過半数を取るとは難しいが、負けはしないだろう、ということでした。第一回で勝負がつかなければ二回、三回と候補者を絞って行き、過半数を取るまでやることになっていますが、結局はヒース氏が勝つだろう。でも、ヒース氏としては第一回で一位になっても過半数が取れなければ辞めるのではないか、ということでした。

ところが開けてみると、誰も過半数は取りませんでした。サッチャー夫人が一位、ヒース氏は僅差の二位でした。ヒース氏は即日、自分に対する批判票の大きさを認め、第二回には出馬しない、とアツサリ引き下がってしまいました。第二回をやれば他の候補者からの票がヒース氏に集まって、ヒース氏が勝つだろう、という見方が強かっただけに、中々格好の良い引き際でした。第二回は代わりに副党首の立場にあつたホワイトロー氏が立ち、五人の候補者で争いましたが、これはサッチャー夫人の圧勝で、過半数

も取り、とうとう前代未聞の女性の保守党党首が出来上がりました。

今度総選挙があつたら、労働党の婦人票を含め、大量の票がこの魅力あるオバサンに集まり、保守党が勝つだろう。そうすれば英国初の婦人首相が出来、女王と一緒に英国を動かすことになるのではないかと、言われます。現にアンケート調査によりますとサッチャー夫人の勝利で保守党の株がずつと上がつて、支持率三〇%が四五%まで上がつていのです。英国のインテリが読むザ・タイムス等はサッチャー夫人に対し相当辛辣なことを言っていますが、英国首相として誰が最も適当か、と言つアンケートに対し、44サッチャー夫人を上げる人が四三%もあり、ウイルソン氏よりも多いトップでした。私の客筋にはヒース氏を支持していたおじいさん連中が多く、この人たちは、世も末だ、と嘆いています。

(昭和五十年三月二十三日)

続々アレコレ(ロンドン便り 七)

これからも短い雑文を集めてご披露すると思ひます。これまでの「ゴチャゴチャ」

ではあまりにパツとしないので、「アレコレ」に改名することにしました。今回は三回目ですから、続々アレコレ。

一・出張のこと

景気が悪くなり、工場の仕事量が減つてくると、何時ものことながら営業の仕事が忙しくなります。何とかして仕事を見つけてきて工場を食わせねばならないからです。普通なら、見込みが少ないから、と言って最初から取り上げない仕事、仕事を貰つても後45のトラブルが大きいから敬遠して来た客相手の仕事、こうしたものに否応なしに取り組むことになるので、無駄骨が多いし、苦勞の多いこの頃です。客廻りをしたからといって、すぐに仕事が出て来るわけでもないのですが、あそこを廻れ、ここを廻れ、という指令が来て、このところスツカリ出張づいています。先日のギリシャもそれでしたが、今度はモナコとスイスを廻り、一休みして、又オランダへ行つて来ました。何処へ行つても良い話はなく、予定されていた仕事の繰り延べとか、船を走らせても損するばかり

なので長期に船を止めておく係船の話ばかりでした。ここ当分は海運業にとっても造船業にとっても大変な時期が続きそうです。特に造船業の方はここ二・三年の内に経営がおかしくなるところが出てくると思うし、系列化的なものが進むのではないかと思いません。

二・出張と観光

出張しても、昼間はあちらの客、こちらの客とアポイントを追って歩き廻るので中々ユックリ出来ませんが、最近日は日が長くなり八時ごろまでは充分明るいので、閉館時間のある博物館や催物会場は駄目ですが、外なら夕方、足で観光が出来ます。スイスは初めてで、ジュネーブとチューリッヒに行きましたが、オフィスアワーが終ってから暗くなるまでずい分歩きました。どちらも湖のある静かなきれいな街でした。スイスと言うとからりとした、天気の良いところという感じがしていましたが、山の中なので中々天気は良くない、とのこと。僕の行っていた三日間は少しモヤがかかりましたが、良

い天気で恵まれました。

オランダはもう六・七回目の出張ですが、特別の案件を持って行くので、何時も忙しく、報告書なんか書いてテレックスでの発信を済ませると、暗くなつてしまい、食事するのがヤット、と言うのがこれまででした。今回は金曜日に仕事が終わることになったので、帰りの飛行機を土曜の夕方にし、土曜日一日オランダ観光に当てることにしました。天気も良くてついていました。こんな時は早起きして早々とホテルをチェックアウトし、荷物はホテルに預け、カメラ一つを持って出かけます。まずチューリップで名高いキューケンホフと言う公園に行きました。チューリップも色んな種類があるのに驚かされましたが、チューリップだけでなく色とりどりの花があり、これが皆満開で見事でした。皆さんも五月頃オランダに来られる機会があったら是非一度来られることをお勧めします。次いでメデューロダムというおもちゃの街を見に行きました。オランダの中の有名な建物を二十五分の一のサイズで作つてあるミニチュア・タウンでそれは精巧なものです。港の模型ではタンカーが火事になり、消防艇が出動して水をかけるシーンを演

じたり、運河では水位の違う水路で、二つの門を開閉することにより船を通すところをやっていたり、モーター・ウェイでは事故現場までありました。いずれも観光客が多く、特にフランス人の団体が目立ちました。何時もこんな出張ばかりだと良いのだけれど。

三・ デイナー・ジャケットのこと

仕事で付き合っている保険会社の偉い人が一晩泊まりに来ないか、と言つので行くことにしました。最初はウイークエンド三晩泊まらないか、ということなので、一寸気が重かったのですが、こちらの出張の都合で一晩になりました。金曜日の晩、正式の晩餐会に招待することにしたから、デイナー・ジャケットを持って来い、と言つのです。そんなもの、勿論持っていないし、見たこともありません。英国にはモス・ブラザーズと言う貸衣装屋のチェーンがあります。行ってみたら肩幅と胸を一寸測つて、ピツタリの上下をすぐ持って来てくれました。僕の体型も満更捨てたものではない、と思いましたが、何でも六〇〇種類のサイズが揃っているんだそうで、これくらいあれば一つ位ピ

ツタリのがあつても良いと言つわけです。模様のきれいなシャツからボウと言つ大きな蝶ネクタイまで全部借りました。一〇〇人くらいの正餐でしたが、さして気も張らず、たつた一人の日本人だつた僕は中々持てて色んな人と話が出来ました。思つたほど固くならず、シエリーとワインをタップリ飲んで楽しく食事し、中々愉快でした。別に肩の張る集まりでもないようなのですから楽な格好で食事すれば良いのに、こちらの人はどうして食事のときに正装しようとするのかと思ひます。食事のときくらい一番楽な格好でくつろいで食べれば良いのに……。外での正餐でなくても一寸した家庭では、家でもキチンとした服装で食べるのだそうですが、日本人はやはり浴衣がけで大あくらをかいて一杯、と言つのが一番ピッタリだし、ご馳走のように思ひます。

最初の英国人家庭泊も楽しく過ごしました。朝はご主人自ら日本茶のモーニング・ティーを寢室まで持つてきて下さり、日中は立派なベンツでドライブに出、田園風景を見せてくれました。子供のない老夫婦で、ご主人が奥さんをいたわっている姿がとても美しく思ひましたが、やはり態度で示すことが必要らしく、六十も過ぎたと思われる二人

なのに、乾杯のときご主人が、シワクチャの婆さんに向かって「to your smiling eyes」なんてやっているのには閉口しました。

(昭和五十年五月十四日)

アレコレ 四(ロンドン便り 九)

一・ ルーブル博物館

六月から七月にかけ大変に忙しい毎日を送っています。当地での仕事もさることながら、来客・出張者の多いこと。自分自身の出張の多いこと。土曜・日曜を出張とか来客50のアテンドに取られると、前週の疲れが翌週に持ち越される感じであつらい思いをします。週休二日間の怠惰な生活に慣れてきているのかも知れませんが。出張は六月中旬から十日間、オランダとイタリアでしたが、七月に入ってから又オランダに三日、引き続きイタリアに三日、一旦帰って今度はパリに二日と出かけました。イタリアは南だけに流石に暑く、ロンドン製のボテボテの服ではどうにもならず、頭にきて、ロンドンに帰ったらどんなことがあっても夏服を作つてやるぞ、と誓いながら歩きました。帰つてすぐ翌

日、洋服屋を二・三軒廻り、早く着られるのを、とぶら下りを買いました。袖とズボン丈を直してすぐに着られるのは良いのですが、すごいラップスボンで、次のイタリア行きには着て行きましたが、ロンドンでは一寸着づらく、ましてや日本に帰ったらとても着られないのではないかと心配しています。

パリでは半日、時間が出来ましたので、ルーブルだけ行ってきました。流石に世界の美術館だけあって、一回りするだけで大変な時間が掛かります。二時間ほどで駆け歩きました。紀元前二〇〇年頃作られたと言つミロのビーナスやサモトラケの二ケの像が何気なくと言つ感じで置いてあります。変な細工がなく僕らにも美しいということが良く判ります。有名なモナ・リサは小さな絵で、流石にガラスのケースの中に入れてありました。ドラクロア、ミレーなど、中学の図工に時間に教科書で見たような絵がそこら中にあります。アングルなんてこれまで知らなかった人の軽いタッチの絵が好きになりました。絵が本当に好きで、ルーブルをどうしても見たい、という人は大勢いるんだろくに、こちらは興味本位。見ても大して判らず、文字通り猫に小判なので、申し訳ない

気がしました。

二・ ゴルフのこと

週末ロンドンにいれば、二日の休みのうち一日はゴルフに出かけます。忙しいとか言いながら結構やっています。気候が良いので大抵何かのコンペになりますが、このころ馬鹿に調子がよく、最近五回の成績は九九、一〇一、八九、九六、八八。二〇前後のハンディでやっているのです、これで優勝二回、三位二回です。出ると必ず何かの賞にありつき、会費を払っても充分ペイしています。

昨日は大正七年卒の帝人の大谷社長が来られ、如水会ゴルフの臨時大会をやりましたら、グロス八八、ネット六七で見事優勝でした。大谷さんは八十二歳とかですが誠に元気。毎週一回はゴルフに出かけるのが健康法とのこと。足腰もシツカリしていて速足でトットと歩かれ、当地の長老（昭和十六・七年卒）がフーフー言っていました。ゴルフ暦五十六年とかで一時はベストスコア八〇位出された由ですが、この日は九一とまずま

ず。年令と同じスコアで廻るエージ・シューターを狙っていられる様子でしたが、この分ならまだ大丈夫と言う感じでした。

小生のゴルフもようやく少し落ち着いてきたのではないかと思います。OBを出し、球を何個もなくしたり、パツとの感じが掴めず、スリーパツを幾つも続けたりしてませいぜい五〇近辺で収まっています。あまり気負いがなくなってきたのが良いのかも知れません。このままの調子が続けば、川口・玉川両名人（大野木名人は最近どうでしょうか）にも迷惑かけず一緒に廻って貰えそうです。

（昭和五十年七月二十日） 53

拝 啓（ロンドン便り 十一）

九月も半ば。日本の暑さもソロソロ和らいで来た頃と思います。皆さまにはお変わりもなく、又、先頃は人口の増加にご尽力・ご健闘頂いた同志もあり、益々ご発展の趣、遙かに地球の裏側からお慶び申し上げます。

ロンドンも四十年来と言われる暑い夏が終わり、一度に涼しくなって来ました。この

夏は欧州全土が異例の暑さだった由で、ロンドンでも好天が続き、街角の公園に昼間から日光浴する人がゴロゴロしたりしていましたが、この頃はウスラ寒くて、時々シヨボシヨボ雨の降る典型的なロンドンの空に戻っているようです。

この夏はずい分ユツクリしました。大体こちらの人は夏休みの習慣があり、二・三週間づつ交代で休むので、仕事の方はスローになりがちなのですが、こちらも一ヶ月間はサボらせて貰うことにし、日本から母と家族を招んでユツクリ過ごしました。この間は出張は止しにし、出来るだけ定時に退社することにしました。日が長いので、七時過ぎに帰っても明るく、子供と近くの公園に遊びに行ったり、ロイヤル・バレエを観に行ったりしました。週末には、市中・郊外の観光、買い物付き合いです。途中、十日間程休暇を取って欧州をバス旅行しました。ドーバー海峡を渡ってフランスに上陸し、ベルギー、ドイツからスイスへ行き、フランスを廻って帰るといふ駆け足旅行でした。滅多にない機会だし、こちらは二年分の家庭サービスを四週間に濃縮することになるので、どうし

ても無理な予定を組むことになりました。母もこの二年ほど、病院に入ったり出たりでブラブラしていたし、ワイフも勿論、病後初めてのの大旅行なので、飛んでくる間は子供が頼り、という誠に頼りない一行でしたが、皆思いの他元気で、母などは地図を片手に孫を連れて地下鉄を乗り回す元気で、皆大満足の大元気で帰国しました。心配が大きかっただけに、ホッとすると同時に決行して本当に良かったと思えました。

私のフラットの簡易ベッドや折りたたみ式ベッドを出すと五人は何とか寝られるので、滞在中はずっと皆でこのフラットに住むことにしました。一人で住んでいたところに五人住んだのですから、狭くはなりますがそれだけに賑やかでした。また食べる方はプロが来ている訳ですから安心して、事務所から帰って風呂に入っているあいだに食事の支度が出来ているなんて有り難いことだ、なんてつまらないことを考えていました。

皆が帰国するのを送って、空港から一人淋しく戻って来るのも気が進まなかったし、偶々、出来るだけ早く行くように、という出張があったので、一行をロンドン空港に送り出した後、その足でオランダからイタリアへ行って来ました。少し気を紛らした積り

でしたが、出張から帰ってみればフラットはガランとして誠に淋しく、味気ない思いでした。着任して九ヶ月は別に淋しさも感じず、これが当たり前、と言う感じで過ごして来たのですが、一旦、賑やかになつた後の孤独感は一入でした。

一人に戻つてもう一ヶ月。徐々に元に戻りつつあります。日本から持つて来たカセット・レコーダーが壊れてしまつて、音のない生活だったので、中古のステレオとソニーのテープ・レコーダーを買いました。音があると言うのは大切なことです。レコードは日本に比べると安いので少し買つて帰る積りです。最初は好きなバート・バラックを買いましたが、次にクラシックが聞きたくなつてチャイコフスキーのピアノ・コンチェルトを買いました。次はビートルズの全集を買おうか、なんて精神分裂症みたいなことを考えています。

夏の間はゴルフも断っていましたが、一人になつて早速始めました。前に、少し判りかけたみたいなのを書きましたが、まだ安定しません。先日もコンペで中々良い線ま

で行っていたのに、突然ショート・ホールで一も叩き、最後の二ホールで、ミドル八、ロング九を叩くと言う散々なスコアでしたが、これでもグロスは九九なので他のホールはマアマアだった訳で、これは一挙に八〇台突入の直前の苦しみではないか、と自分で慰めています。

仕事の方は相変わらずパツとしない時期が続いています。海運市況が全く上向きの兆しを見せず、タンカーなんか係船にするくらいでは追いつかないと言うことで大手の船会社が船の数を減らしにかかっています。使い頃だ、と言われた十二・三年目くらいのタンカーがスクラップとして売られる話を良く聞きます。こんな状態ですから造船業なんて、これから少なくとも五年位は大変な時期になるだろうと言われていています。新造船の受注もトンとないし、修繕船も少ない引き合いを奪い合う状態です。工事が前期の半分以下になっていて工場もあるほどですから、どこも生き残るために無理をします。ダンピングまがいの値段が飛び出してくるし、神経の磨り減る毎日です。誰かが潰れる

までやることになるのでしようが、この辺は経済構造の変化と受け止めて、長期的・根本的な手を打つ必要があると思います。こんなこと考えつつも、出先の尖兵は走るしかなく、西に東に走り回っている毎日です。

今日はどうも氣勢の上からぬ話ばかりになりましたが、身体の方はすこぶる元気です。ゴルフとチャイコフスキーでストレスを解消しながら、もう少しあがき続けて見ることにしましょう。

では、皆さまどうぞお元気で。

敬具

(昭和五十年九月十三日)

スコットランド人(ロンドン便り 一二)

ロンドンにはスコットランド人が沢山住んでいる。最初は変なことを言うものだ、と思つた。スコットランドとて英国の一部ではないか。英国人がロンドンに住んでいてお

かしい訳はない。ところがどうやら違つのである。いわゆる我々が英国と呼んでいるこの島（大きいのは二つ）は、イングランド、ウエールズ、スコットランド、北アイルランドの四つに完全に分かれ、人種も夫々イングリッシュ、ウエーリッシュ、スコティッシュ、アイリッシュと呼ばれており、お前はどこ人だ、と尋ねると、ブリティッシュ（英国人）だ、という答えが返つて来ることはまずなく、この四つの内の一つが返つて来る筈である。現在、政治経済の中心を握っているのはイングリッシュだが、歴史的には他の三つの人種の方がこの島の先住民族なのである。アイリッシュの生い立ちは一寸違つが、紀元前六世紀から四世紀にかけて大陸から渡つて来て住み付いたのがケルト人で、これがローマ人、後にはサクソン人の侵略を逃れて北へ行つたのがスコットランド人、西に追いやられたのがウエールズ人となつた。征服者は土地が肥え、平地の多い、島の南半分に住み付き、被征服者達は山の多い、やせた土地に住まざるを得なかつた。おまけに北の方は気候も悪い。こつした歴史を持つていたので何百年経つた今でも、征服民族に対する反感がどこかに残つてゐるのではないかと思う。南のイングランド地方に残

った先住民族は、征服民族と混血し融和して行つたが、山に籠つたスコットランド人やウエールズ人達は、何遍もの戦いにもかかわらず、最後まで屈服しなかつた、という誇りも持つているようだ。

この中でもスコットランド人と言うのは又一風変わった存在である。とにかくスコットランドに強烈な愛情を持ち、自分がスコットランド人であることに誇りを持つている。ロンドンに住んでいても、スコットランドが如何に良いところか、を口を極めて自慢し、夏の休暇にでもなると家族ぐるみで自分の故郷に帰つて北で過ごして来る。こちらのプロ・サッカーは都市対抗みたいなもので、応援に熱心のあまりファンが騒いで暴れ回ったり、果ては帰りの汽車に火をつけたりする気違いが出たりするが、こつした度を過ぎたファンもスコットランドのチームに多く、それだけ郷土愛が異常に強い、と言えるのではなからうか。

スコットランド人は一体に比較的小柄で赤毛か栗色の毛の人が多く、風采が上がらない人が多いが、常に自分達は優秀な人種なんだと言い、小さな肩を怒らしている感じが

してならない。スコットランド人に対して、お前はイングランド人か、と言うのは、日本人に対して、中国人か、言うのと同じ位失礼なことだ、とスコットランド人に言われたことがある。事実、少ない中に優秀な人が多い。第一親切。田舎の人の素朴な親切さがそのまま残っている。教育制度も夫々の地方で少しづつ異なるが、スコットランドは最も教育に熱心で特にエンジニアの世界では万人の認める地位を築いているようだ。

スコットランドには未だ二度しか行っていないが、確かにイングランドとは異なる何かを感じさせてくれる。土地は山がちで荒地が多く、決して豊かな土地とはいえない。エンジンバラは古いなりにきれいな街だが、グラスゴーなんかは産業革命当時そのままという感じの石炭の煤で汚れた暗い感じの街。こんな街のどこが良いのかと思う。住んでいる人もまことに地味で、平均して生活水準も高いとはいえないと思う。ところが粗末な服装ながら誠に人懐っこく、気持が温かで親切。(やたらと話し掛けられても、スコットランドなまりの英語は判り難くて苦勞するが・・)

これが一步郊外に出ると成る程と思う。湖あり山あり荒地あり。広い斜面はせいぜい

牧場になっていて畑は少なく、人の姿が見えず牛や羊や馬がいるだけ。自然がそのまま残っている感じでホッとす。案内を頼んだタクシーの運転手のお爺さんにこの印象を話したら、我が意を得たりとばかり大喜びに喜んで、郊外の観光が終わったら、パブで一杯オゴってくれ（勿論オゴり返したが）こんなことを話してくれた。即ち、

スコットランドは山や荒地ばかりだし、気候も厳しいので農地に適さず、大勢の人を養うことが出来ず、頭脳輸出という形の出稼ぎに頼らざるを得ない。その代わり残った者で自然を大切にし、故郷を美しく保つよう努力するのだそつだ。だからスコットランド人は外に出ていても心はいつも故郷にあり、いつも故郷に帰りたいと思っっているし、帰って来れば故郷の人や自然が昔のままの姿で歓迎してくれるのだ、という。愛国心とか郷土愛とか言うものが薄れているように感じられる昨今、何か清々しいものすらを感じ、羨ましく思う。

この夏、欧州バス旅行したとき一緒の団体の中にスコットランド人のお母さんと娘さんがいた。娘さんと家の美貴が同年輩だったので、言葉は全然判らなかつたが、手を繋

いで歩いたり、お菓子の交換をしたり、オミヤゲの見せっこをしたりしていた。一緒に撮った写真が出来たので、焼き増して送って上げたらお母さんから礼状が来た。曰く、この夏、色んなところへ行き、楽しかったし、きれいなところもあつたが、帰ってみてスコットランドが一番きれいで良いところだと言つことが良く判つた。是非一度遊びにいらっしやい、だつて。

(昭和五十年十月二十六日)

英国病(ロンドン便り 十六)

英国病と言つ、日本で出来た言葉だろうが、最近では British Disease 等と訳され逆輸出されて、こちらの新聞でも目にする事がある。定義を考えてみるが、どうもハッキリしない。不況とインフレ、国際収支の悪化、これらは英国特有のものではなくイタリアや日本でもかなり酷かつたがイタリア病なんてのはあまり聞かない。投資意欲が少なく、経済成長率が低いのは一つの特徴だろうが、これは現在の世界的不況でどこも成長率が落ちているから目立たない。産業の不活発さ、労働組合が強くて年中ストをして

いること等も現象としてあげられようか。これらを総称して英国病というのдарう。

ポンドの価値の急落なんかはこの辺を総括する一つの指標としてあげられるだろう。一〇〇〇円以上の価値があつたポンドが数年の内に下がり、今や六〇〇円近くである。これは英国病による英国の経済力の下落を示す指標だと思つ。

現象の一つとして企業の国有化が上げられると思つ。英国は昔から保守党と労働党が二大政党として交替で政権を取り合つて来ているが、労働党の基本的な経済政策は企業の国有化であるから、傾向として国有化の流れがあることは事実である。石炭、電力、ガス、運輸、航空、鉄鋼等は、従来の労働党政権の下で国有化されて来ているが、最近、コート・ラインと言つ有数の船会社、バーマ・オイルと言つ石油会社、ブリティッシュ・レイランドと言つ英国一の自動車会社、米系資本の自動車メーカー、クライスラー等が巨額の国の援助を受け入れて国有化された。これらは政策上のもではなく、経営が成り立たなくなつたためで、これら大企業が倒産することにより多くの失業者を出し、社会不安を増大せしめる事態を防ぐための措置とされている。労働党政権としても決して

喜んでやったものではなく、むしろ受身のもののようだ。企業が一旦国有化されると、今度は労働者の相手になる資本家はつぶれる恐れのない国になるから、組合も強くなる。要求することはかなり多くなり、ますます働かなくなる。生産性が落ちる。この辺は悪循環とも言えそうだ。

これらが何処から来るのか、偶々その社会に飛び込んできたものとして観察し、考えてみるが結論らしいものに到達できていない。又、結論なんて出せる性質のものではないのかもしれないが、感じていることの一二つを書いてみよう。

投資意欲の低いことによる産業の不活発さは英国国民の国民性によるものではないだろうか。いわゆる保守性。投資と言つものはいわゆる社内留保の範囲でするもので、借金してまですべきものではない、と言つ考え方が根強いようである。日本の場合はこれが逆に行過ぎて、借りられるだけ借りて投資をしよう、と言つ姿勢になっているから、自己資本率が極端に少なくなっているが、これが高度成長を生んだ一つの大きな原因であろう。英国の場合は考え方が非常に保守的なだけに冒険はせず、現状維持プラス若干

のアルファと言う経営政策が取られ勝ちで、経済成長なんか殆どなかった。百年前はそれで良かったのだろうが、戦後各国との経済成長率の競争に付いて行けなくなったのではあるまいか。

でも、一番の原因は労働者の勤労意欲にあるのではないかと思う。階級制度のことが良く言われる。何だかんだと言いながら、英国と言う国は上層階級と下層階級がハッキリ分かれていると言われる。人口の1%の人が英国の富の25%を所有していると言つ。これらの人々はいわゆるハイソサエティに住み、小さい時からチャンとした教育を受け、金を掛けても立派な大学に行く。オックス・ブリッジと称する少々難解で気取つた言葉をあやつり、いつも背広をキチンと着ている。腕まくりして働くなんてことは下品だからやらない。それ程でなくても、例えば酒場に行つても、いわゆるパブとサルーンに分かれているところが今でもある。パブの方が少し安いが、そんなところでは自然に入り口が分かれ、お互いに区分された形で夫々に場を得て楽しんでいるのだそつである。今、英国で一番幅を利かせているのは、このハイソサエティ側の人たちだとされる。銀行、

保険、不動産と言った金融関係に従事し、ロンドンの中心、シティで働いている。これらの産業は歴史もあるだけに知識とかつながりも深いのだろう。保険はご存知の通り世界で比肩できるところがない程だし、不動産だって大陸の方まで手を伸ばして大変なものだとのこと。産業革命以来の工業国が第三次産業に移行してきていると言う見方が出来るわけだが、これだけでは食えない。物を作る側の人もまだまだ大勢いるが、この労働者と言われる人々は、十八世紀頃からの労働者で、彼らは人というより一つの商品として扱われていたと言う。つまり、物を作るのに必要な時に雇い入れられ、要らなくなれば首を切られることが簡単に出来たそうである。今はそれ程ではないが、使う側と使われる側の感覚はハッキリしており、この階級の差と言うものはどうにもならない。

いつか書いたように労働党党首だって、別に組合幹部あたりではない。同じ上流階級の中で進歩的な考え方の持ち主というだけだし、労働組合の指導者にしても、多くはいわゆる労働者上がりではない。人の上に立って社会をリードして行く人たちは限られた階層の人だ、と言う意識が強いのは事実のようである。とすると労働者と言うのは一生

労働者で、その子供も孫も労働者と言うことになる。これまでは、そうしたものだ、と言つ諦めとも言えない一種の暗黙の了解があつて、靴屋の子は靴屋に、門番の子は門番にと言つかなり封鎖的な考え方が認められてきたが、最近の風潮ではそうは行かない。誰でも少しでも良い暮らしをしたいと思う。人を支配する立場に立てないのなら、せめて待遇を良くしよう、ということ、出来るだけ樂をして出来るだけ沢山の賃金を貰おうとする。待遇が悪いとすぐにストをする。組合が企業組合ではなく横断的組合だから、一部の組合だけがストに入つても、その職種が全部ストをすることになるので、工場全体が動かなくなる。一つのストが終ると今度は他の組合が、又つまらないことでストに入り工場が止まる。これでは仕事にならない。生産は落ちる。もっと大きな問題は、こつと言つストを通じて労働者の職場への愛着、自分の作るものに対する愛情と言つか情熱が薄れてくることではなからうか。物を作る時一番大切なのは作る人個々人の情熱ではないかと思う。古いようだが、いくら機械化し画一化したって根本はその辺にあるような気がしてならない。自分の作るものに愛情を持ち、少しでも良いものを作ろう、とす

る熱と努力がなければ良いものは出来ない。一日八時間、とにかく工場で首にならぬ程度に楽に働いて、食える賃金を貰えばそれで良い、と言う考えになればポルト一つの締め具合だって違って来ようというもの。だから今や英国製の製品はとても評判が悪い。品質管理なんて目茶苦茶と言う。自動車にしても船にしても電気製品にしても、故障ばかり多くて自国製品が信用出来ないと言う。こうなると外国にも売れなくなるのは当然のこと。逆に工業製品を輸入せねばならなくなる。産業革命以来、原料を輸入し工業製品を売ってきた英国でその製品が輸出できなくなったら経済が破綻するのは目に見えている。

英国病の原因は色々あるのだろうが、僕にはこの労働者の勤労意欲の減退が一番大きなものに見えてならない。

(昭和五十一年二月二十日)

ドロボウの話(ロンドン便り 十七)

英国は紳士の国なんていわれるが大したことはない。と言うことで今日はドロボウの

話をしよう。

まず有名なのは空港での抜き取り事故。ロンドンのヒースロー空港には、英国航空専用、欧州大陸行き用、アメリカ・アジアなど遠方用の三つの空港ビルがあるが、その内抜き取りの一番多いのが英国人の職員が中心になっていると思われる英国航空用の第一ターミナルである。特に日本人は、預ける荷物の中に大事なものをに入れておく人が多いと思われるのか、日本人のカバンと見ると大抵開けられて、金目のものが盗られている。開けられて中をかき回され、盗るものがなくてそのまま閉じられている、なんてケースは数えられないほど。鍵なんか掛けておいても、合鍵なんかで上手く開けられている。大分前から苦情が出ているが、ここ何年来解決しない。先日、新式の鍵をかけた人がいて、抜き取り屋さんが開け方が分からないままこじ開けようとして諦めたらしいのだが、鍵が壊れてしまって、持ち主が開けようとしても開かなくなって大騒ぎになったことがあった。デパートへ持って行ったら、又やられましたか、とか言っ、こんな時の専門家が現れ、チヨイチヨイとやってすぐに開けてくれたが、その新式の鍵

は駄目になった。出張の多い僕なんか、カバンを壊されるだけ損だから、預けるカバンには鍵なんかかけないことにしている。その代わり大事なものを、盗られて困るものは持って歩く。

空き巣も多い。アメリカのように人を殺めてまで盗ろうとする悪質なのは極く少ないようである。その辺が紳士の国なのかもしれないが、人のスキを狙って入って来て持つて行く。こちらの人は小切手を利用することが多いが、日本人はどうしても現金を使うので、空き巣もこの辺を心得ていて、日本人の被害が多いようである。それも日本人が71何処に現金を隠すか、なんて心理まで研究していて、帰ってみたら米櫃がひっくり返されていたり、お茶の缶がぶちまけられていたりすると言う。一番の傑作は次の事件でウソみたいな本当の話。

ある二人暮らしのご夫婦が、家の前に置いておいた車を盗られたのだそうである。散々捜したら三・四日後、家から程遠くないところに乗り捨ててあるのが見つかり、ヤレヤレと思って乗ってみたら、車の中に置手紙があり、曰く、「一寸無断借用して申し訳な

かった。お詫びの印に音楽会へでも行って下さい、とのこと、音楽会の上等の席の切符が二枚置いてあったとのこと。そのご夫婦は、流石に英国の泥棒は礼儀正しい、とスツカリ感心して、その日、家を空けて二人で音楽会へ行き、良かったね、泥棒さんに感謝しなくっちゃ、なんて言いながら帰って見たら家の中はスツカラカン。家具も何もかも全部盗られていたと言う。とにかく引越し屋みたいな顔をしてトラックを持って来て、数人がかりで根こそぎ運び出すのだからたまったものではない。

最後は自分の経験。

十一月末、家を移ろうと言うので、スツカリ荷造りした。細々としたものは箱に詰め、衣類はまとめ、全部整えて寝入ったのが十二時過ぎだったか。一時過ぎにフと目が覚めた。スタンドを点けてみたが、何故そんな時間に目が覚めたのか分からない。一番良く寝ている頃の筈なのに……。折角だから、と行きたくもないのにトイレへ行って電気を消して又寝てしまった。翌朝、最後の掃除をしながら引き渡し準備をしていたら、居間に泥の固まりが落ちている。オカシイな、と思って調べてみたら、空気取りの窓ガラス

がきれいに外されている。やられたか、と思って見ると庭に書類入れのカバンが一つ放り出してあった。あとは何も盗られた形跡はないようである。一番金目のありそうなカバンだけ持ち出したらしいが、このカバンには手紙とか珊瑚とかゴルフのスコアカードとかゴチャゴチャしたものしか入っていなかった。開けてみてそのまま放り出して行ったものらしい。カメラとか大事なものを入れたカバンは幸い寝室に置いてあった。この持ち出されたサムソナイトのカバンが一寸開け難いカバンだったので、背中がナイフで切り開けられており、カバンが一つ駄目になったのが唯一の被害だった。どうやら夜中に目が覚めた時に寝室の近くまで来ていたものと思われる。その気配で目が覚めたのではなからうか。電気が点いたので慌てて逃げたのではないかと思う。事務所の皆に話したら、起きた時オカシイと思って、居間や台所の方へ行っていたら、泥棒がその辺に隠れていたかもしれないし、声でも上げたら、カバンを切り裂くほどの鋭利なナイフでグサリとやられていたかも知れないし、良かった、良かったと言われた。それにしても泥棒が入るのを知らないで寝ていたなんて、全くドジな話で、柔道三段もヤキが回っ

たものだ、と大笑いしたことだった。

尚、翌朝、警察に来て貰い、件のカバンは保険会社にクレームしたら申告額全額を払ってくれた。盗難保険なんて便利な制度とは思うが、本当に盗られたんだか、無くしたんだか、自分で壊したんだか、ウソを言っているんだか判らないのに、確認もせず払うなんて、よほどの信用がベースになっていないと成立しない商売だな、と思ったことだった。

(昭和五十一年三月二十一日)

カップ・ファイナル(ロンドン便り 十九)

カップ・ファイナルを見る機会を得た。カップ・ファイナルと言っても何のことか判らないかも知れないが、こちらでは大変なものである。こちらではサッカー気違いが多いのにも紹介したが、このサッカー・シーズンの最後を飾るお祭で、言わば日本シリーズみたいなもの。英国にはプロのサッカー・チームが四十位あってリーグが三部に分かれ、毎年シーズンの始まる十一月頃から翌年の四月一杯、夫々のリーグで総当りの

リーグ戦をやるが、これとは別にプロ・アマを問わずトーナメント戦をやる。とにかく百年以上も前からの記録が残っている。今年辺りは、決勝に進出するまでに七試合も勝ち抜いてきているのだから、一〇〇以上のチームが参加しているということになる。

Football Association Challenge Cup Competition と言つのが正式のトーナメントの名前で、通称 FACUP、又は単に CUP と言つ。これの決勝、即ち final game だから CUP FINAL と言ふ訳。

例年五月一日にウエンブレイ・スタジアムと言つ英国でも最も大きいサッカー場で行われるが、一〇万人も入るこの競技場の切符は、試合をするチームが決まる前から売切れてしまふ。それも普通に申し込むのでは駄目で、何か特別のコネでもなければとても手に入らない。何十年もロンドンに住んでいるサッカー・ファンで一度は見たいと思つていても、切符が手に入らないと言つ人が大勢いると言つ。良い席でも一〇ポンド位だが、当日はプレミアムがついて一〇〇ポンドにもなると言つ。

この試合の前日、さる友人から電話あり、切符が一枚あるがどうか、と言つ。こんな

時には二つ返事でOKすべきところらしいが、その日は丁度、仲間とセント・アンドリユースでゴルフをやるアレンジをしていたところだったので、一寸考えさせて貰うことにした。皆に聞くと、これは一生の内、これからチャンスがあるかどうか判らない大変なものだ、こんなチャンスを逃す馬鹿がいるものか、と言うのでゴルフの仲間には訳を話してサッカーの方に行くことにした。

誘ってくれたのはテイラーさんという人で、旅行業者だが英国のサッカー協会と関係が深く、英国のプロチームが日本へ行ったりするときに世話をしたりする人。前に一度、約束していた切符が取れなかったことがあり、その代わり、と言う積りだったようだ。

まず、テイラーさんの家で軽食してから出かけることにする。テレビを見ていると、この関係の催し物ばかり。ある番組では婦人サッカーの決勝をこの日に合わせてやっている。こちらの番組ではこの日対戦するチームの名前を借りて、底抜け脱線ゲームみたいな目茶苦茶なゲームをやって、勝った負けたと大騒ぎしている。その間にスタジアムに集まる人の波が写ったり、チームが宿舎を出るところが実況中継されたり。

スタジアム入りしたが、それはもう大変な人。地下鉄の中、駅のホームで応援歌の応酬が始まる。ゲート前の雑踏の中にはもう既に出来上がった酔っ払いがいる。切符のない人がヤミの切符を求めて何万人も来ているという。スコットランドのチームが来たりすると、切符もないファンが大挙してやって来て、スタジアムの周りにあるパブで飲みながらテレビを見ているという。こう言う連中が帰りに街中へ出て騒いだり、物を壊したりする。そのためこの日はロンドンのお巡りさんは全員休み返上になる。スタジアムの中、周りはおるか、途中の道、街中までお巡りさんがウロウロしている。

スタジアムの中に入る。正にお祭である。待っている間に体操競技の演技があったり、例の黒い帽子に赤い服を着たブラスバンドの行進があったりする。選手が出てくると大騒ぎの中でエンジンバラ公が出て来られ、選手一人一人と握手される。

今年の決勝はマンチェスター対サザンプトンだった。マンチェスターの方がリーグ戦でも一部で上位にいるのに対し、サザンプトンの方は二部の中位と言うことで、下馬評は圧倒的にマンチェスターだったが、実際はサザンプトンが終了一〇分位前に一点入れ

て逃げ切り、意外な結果となった。

スポーツと言うのは、どんなものでも、どこの国でも感動させられるものがある。勝つて抱き合つて喜んでいる選手があれば、負けて時間切れの笛と同時にその場に座り込み、口惜しさをこらえている選手もある。女王から貰ったカップを捧げて場内を一周する晴れがましい姿がある一方、これに背を向けて淋しく競技場を去って行く姿がある。涙で顔をクシャクシャにしながら大声で負けたチームを慰めているファンの姿。いつ見ても胸にジーンと来る。それでいて気持の良い感動を憶える。

その後、英国人に会つてこの話をする、良く切符が取れたね、オメデトウと言われる。たった二年の駐在期間の間に、良くこんな好運に恵まれたものだど有り難さが段々判つて来ているこの頃である。

(昭和五十一年五月二十一日)

無免許運転(ロンドン便り 二十)

日本の運転免許を国際免許に書き換えると、大抵の国で一年間は使えることになるの

ですが、英国の場合、住んでいることになる、これが三ヶ月しか有効でないと言うことで、こちらの免許を取り直さねばなりません。英国の免許証は、そんなことをしなくても日本ではそのまま通用するそうですから、これは日本が自動車の後進国だった時代に出来た不平等条約と言うことになるのでしよう。

こちらへ来てすぐ車だけは手に入れ、試験の申し込みをしたら、半年先と言う通知が来ました。これではどうにもならないのですが、お巡りさんに聞かれたら、「試験を受けたくても順番で受けられないのだ」と説明すれば良い、この国はそう言うネゴが効くんだ。」と言われ、成る程英国らしいと思いました。免許証を忘れて運転していて捕まっても、何日か後に指定された警察に届ければ良く、日本みたいに免許証不携帯なんて固いことを言われないのも常識的なこの国のシステムだと思えます。第一、一斉検査なんて怖い非人道的なことはやりません。余程オカシナ運転をしたり、スピードを出し過ぎたり、夜無灯火運転をしたりしていると、止められて、免許証を拝見、と言われる程度です。と言うことで、こちらへ来て半年の間（差し引き三ヶ月が正味と言うことにな

りますが）は当然のこととして無免許運転をしていました。

こちらの試験は技術的には難しくないのですが、特別なルールがあり、特に安全に厳しいのです。ハンドル操作は送りハンドル、バック・ミラーを度々見るとか、シグナルの出し方をどうしろとか、中々うるさいので、暫くこちらのやり方と言うより、試験技術を習わないとパスしない、と言うので、試験が近くなつた頃、何時間か教習所に行つて習いました。少し慣れれば別に何てことなく、先生にも、上手いものだ、なんて褒められ、自信満々で試験日を待つていたら、前々日になつて、その日にオランダで大きな入札があるので行つてくれ、と言う電報が入つて泣く泣くこれはキャンセルしました。その後、似た様な行き違いでもう一度受け損なつてヤツと一年目の昨年十一月に受けることになりました。この時も、直前に教習所に行つて悪い癖を直して貰つて、と思つていましたら、今度はポーランドへ出張することになり、試験日に合わせてヤツト帰つてきたものの、習う暇がなく、前の勉強を覚えているだろう、と思ひ受けに行きました。何てことなく走らせ、大したミスもなかつたな、と思つて止まつたら、試験官が、ダメ

だ、と言つのです。とても信じられず、理由を聞くと、バック・ミラーの見方が足りない、とか、ブレーキの踏み方がどうか言われて結局落第。

これは一寸したシヨックでした。一度落第したら、天下晴れての無免許運転と言つことになります。警官とネゴの余地ありません。最初は出来るだけ車を使わないようにしていましたが、あるものを使わない、と言つのは中々出来ないことで、便利なものですから、段々に前と同じくらいの頻度で乗っていました。そんなある日のこと。

会社から客の待つているレストランへ行く途中、それ程急いでいた訳ではないのです。81
がある四つ角で信号機が壊れているのに気付かず飛び出したところ、右からフォルクス・ワーゲンが突っ込んで来ました。「いけないっ！」と思つたけど全然間に合わず、右側前部にイヤツというほどぶつけられました。僕の車は角を突っ切つて歩道に乗り上げ、前の家の鉄柵を壊して止まりました。幸い自分は何ともなく、歩道に人がいなくつたのも幸いでしたし、相手も若い男が乗っていて、これも怪我はなく不幸中の幸いでした。人は集まつて来るし、誰かが警察を呼ぼう、なんて言っているし、車がこのままで

動くかどうか判らないし、逃げるわけにも行かず、覚悟して警察の来るのを待つことにしました。パトカーが飛んできましたが、叱られるというより事務処理という感じ。車を修理屋に持って行く手配も警官がやってくれたり、で親切でした。相手の男とも保険証書の番号を確認し合ったりしてこの方も事務的に片付けました。昂ぶり勝ちの気持を、落ち着け、落ち着けと自分に言い聞かせ、処理は平静にやれたと思います。その場はそのままにして帰ったものの、事故のシヨックというのは大変なものです。やったことのある人でないと判らないかも知れませんが、アッ、いけない！と思った瞬間、ドカンとぶつかった時のシヨックがいつまでも忘れられず、その夜は興奮で眠れないし、暫くは夜中に脂汗をジツトリかいて目が覚めたり、事故のことが頭から離れず、このままノイローゼにでもなるのではないかとすら思ったほどでした。おまけに外地でのこと。どういふ罰になるのか見当がつかず、暗いところへ入れられたり、国外退去にでもなったらどうにもならないし、この辺も心配でした。

こちらには自動車協会という会社があり、この会員になっていると旅行の途中で車が

壊れたりした時、助けに来てくれたりすると言うので、この会員になっていましたが、ここでそんな時の相談に乗ってくれる、と言うので行ってみました。最悪のケースでどんな罰だろうか、聞いてみると、無免許運転の最高が六〇ポンドの罰金に悪くすると免許一時停止。不注意運転と見なされると最高五〇ポンドの罰金と免許一時停止、と言うことでした。とにかく金で解決すること、悪くても一〇〇ポンドの罰金で済むことがわかりホツとしました。その後、警察から手紙が来て、無免許運転についてはその内裁判所から召喚があるだろうが、不注意運転については不問に付す、と言う連絡がありました。信号機が壊れていたのは警察側の責任でもあるので、そういうことになったのでしようが、この辺は中々親切と言うかフェアだと思いました。

事故の直後は、車の運転なんてとてもする気にならず、このままもう止そうか、と思ったのですが、少し時間が経つと、このまま止すのでは何だか負けたまま引き下がるみたいで癪だし、事故のすぐ後で次の試験日が来たので、とにかく受けるだけ受けて、車の運転を辞めるかどうかはそれから考えることにしました。自分の車が修理屋に入って

しまっているのです、試験前の練習は教習所の車。こちらのテストは自分の車でやるので、本当ならオートマティックで受けられるところでしたが、教習所の車はギアつき。最初は一寸戸惑いましたが、すぐに日本での運転を思い出し、慣れたところでテスト。今度はパス。それもギアつきでパスしたので、一寸グレードの高い「A」と言う免許が取れました。少し金を払ったら、七十七才まで有効です。

二ヶ月ほどして裁判所から呼び出し状が来ました。若し、有罪を認めるのなら別に出て来なくても良い、と書いてあるので、そうしようか、とも思いましたが、例の協会の相談所に行きましたら、弁護士無料サービスがあるからそこへ送ってみたらどうか、とのこと。この辺になると少し余裕も出て来て、経験だからやってみよう、と手紙を書くことにしました。曰く「充分、有罪であることは認めるが、自分はあと半年しか英国にいないし、免許停止になるのは避けたい。一度試験に落ちてはいるが日本では何年もやっていて無事故だし、事故のすぐ後でパスしてはいないか。それもAクラスで。なんて主張してくれ」。弁護士から、当日一緒に行かないか、と言う提案もありました

が、裁判官の前でゴタゴタするのも気が進まなかつたので、弁護士に任せることにしました。結局、罰金二七ポンド、免許停止なし、ということでした。思ったよりズット軽く済みました。事故を起こしたのが二月、裁判が六月というノンビリした話で、その間は判決が下りていないので運転自由、と言つのも変なものでした。運転の方はやり出すと便利なものですから車が直つた後は、又前の通りやっています。これまでも割りと怖がり運転の方でしたが、これまで以上に慎重になつています。特に、四つ角では信号がついていても右から来る車がないか、やや神経質になつています。

てなこと、良い経験をしたともいえますが、自慢できる話ではなく、恥多き人生に、又一つ大きな恥を重ねたということになるのでしょう。皆さんもどうぞ気をつけて。

(昭和五十一年六月二十日)

アレコレ 五(ロンドン便り 二十二)

今年は六月末から七月にかけ、ヨーロッパ全域に亘って異常な暑さでした。ロンドンも大変な暑さで、連日三〇度を越す暑さ。最初は十九年振りの暑さとか言っていました。その内一九四〇年以來ということになりました。聞いてみると一九四〇年が、気象台で記録を取り始めた年とのことです。フランスに行ったら何百年来の暑さというのですが、そういえば何百年前には気象台もなかった筈、英国も変なところで正直なんだな、と思いました。

こちらでは普通は、夏でもこんな暑さにはなりませんから、環境が暑さ向きに出来ていません。余程の大会社でないと事務所所に冷房なんか無いし、扇風機すらありません。せいぜい窓を開ける位ですが、風のない日なんかうだる暑さ。ホテルも古くて格式のあるところほど暑くて苦情が出たり、地下鉄が途中で止まって、閉じ込められた中で気分が悪くなった人が続出したとか、戸外でテニス見物をしていて日射病で卒倒する人が大勢出たとか。日本の暑さに比べれば何と言つことはないと思うのに、私自身も疲れを覚えたり、夜眠れなかったりしたのは、こちらへ来てたった二年しか経っていないのに、

もう暑さに対する抵抗力が弱くなったせいか、と思いました。日本を出るとき、料理屋で送別会をして貰い、仲居さんを含めた全員に寄せ書きをして貰ってきた大きなウチワを持って出勤し、これが唯一の文明の利器で事務所の皆を羨ましがらせました。

雨が降らないので水不足の心配が出ています。庭の水撒きや洗車は自粛しよう、とか、風呂は出来るだけシャワーにしよう、なんて言っています。下手をすると工場の操業日数を減らさねばならぬ、とか、この暑さの影響が暫く続きそうです。

二・ゴルフのこと

生れて初めてハーフ三〇台を出しビックリしました。自分でやっつけていてビックリなものですけど、ビックリしたと言うのが正直なところ。大袈裟な言い方をすれば、我ながら神がかってしまいました。六月二十七日、ヘンドンと言つ近くのコースでの社内コンペのときのこと。こちらのコースは途中にヤー・デイジの目印なんかありませんから、ミドル・ホールの子カンドを打つ位置に來ると目測が大変で、クラブの選択に迷ったり、

間違えたりするのですが、この日はそれが全然迷わず、ピタツと判るのです。ユツクリ振り上げて打つと球は気持ちよい弾道で殆ど乗って来るし、バンカーに入っても、この辺の砂に打ち込めばピンソバだろうと思って打つとワンパツとの圏内に止まるのです。圧巻はバンカー越えの短いアプローチでした。ピンの位置が近くて、転がしではとても寄らないと思い、サンドウエッジを短く持って思いっきり叩いたら三〇センチ位に寄り、と言った具合。思い通りと言つか希望通りのところに球が行ってくれる感じでした。結局、パー六つ、ボギー二つ、ダブルボギー一つ。パーが三五なのでインチキ三九と言う訳。三〇台が夢でないと思い始めてから緊張の連続で疲れました。いつもこんなスコアで回ることを自分でも期待し、人にも期待されている人はさぞつらいことだろう。失敗が許されない立場より、偶に上手く行って喜ぶ立場の方が楽だ、と言うのが正直な感想でした。

三・ ウィンブルドン・テニスのこと

ウィンブルドンと言うと、テニスに興味の薄い人でも、昔小学校の教科書が何かで読んだ、チルデン選手と試合をした日本の清水選手の話の思い出して懐かしく感じるのではないだろうか。このウィンブルドンはロンドンの中心からテムズ河を渡って一寸南西に行ったところにあります。一度位行かないと話にならないと思つて、六月の暑い土曜日、夕方から出かけて行ってきました。良い席は予約席で五ポンド、一〇ポンドするのですが、立見席だと一日中見て歩いて一ポンド。これが夕方からなら六〇ペンスですから三〇〇円と言うこと。

今年が九十九年目と言う伝統を誇るだけあつて、会場はウィンブルドン公園の中、緑に囲まれ建物も古くて壁一面ツタに覆われています。スタジアムがあるのはセンター・コートだけで、あとは即席のスタンドがあるところもあり、周りにベンチが置いてあるだけのところもあります。コートは何面もあつて世界各国の代表が思い思いに試合しています。コート面は皆芝生。これが又尋常な芝ではなく、ビッシリと目が細かいのです。これが四重にも五重にも重なっている感じ。乱暴に扱って一枚くらいはげても、すぐに

下からもう一枚出て来るような感じですよ。

有名な選手のやっているコートは満員で、夕方から立見席を買って入った僕らは見られませんでした。その辺のコートで、少ない観客の中で淋しくやっている人たちも一流選手の筈。現に日本がデビス・カップ杯アジア予選で散々苦しめられているインドのメノンなんかも淋しくやっている方で、これはユックリ見ることが出来ました。今年は猛暑の中の大会で、暑さとの戦いと言われました。昨年、男子シングルスで優勝し、今年第一シードのアメリカのアーサー・アッシュも早々に負けましたし、これもアメリカのの人気選手で第二シードのコナーズも準決勝で負けました。第三シードにボルグと言う二十才のスエーデンの選手がいて、偶々僕らが行った時やっていました。比較的ユックリ見られたのは、左程注目されていなかったのだと思います。フォームはきれいとは言えないけど力強く、いざと言つ時の迫力が凄いので、これは、と思つていたのでしたが、結局この選手が優勝しました。

ウインブルドンと言つたら、イチゴ・クリームが名物とのことで、これを食べないと

始まらない、とのことでしたが、一寸遅すぎて食べ損なつたのが残念でした。その代わり、歩き疲れて夕風の中で飲んだビール一杯が何とも言えず、日本だったら人込みの中で、見るだけが精一杯なのだろうに、こうして夕涼みがてら出て来てユツクリした気分を味わうのが本当のテニス見物なのか、と思つたことでした。

(昭和五十一年八月三十日)

スコットランド・ドライブ旅行(ロンドン便り 二十三)

ロンドン駐在、最後の夏休みは、仲間と二人でスコットランドをドライブ旅行することになりました。国外の色んなところへ行って最後に国内が残つたと言つこともありますが、金がなくなつて国外へ出る余裕がなくなつたのも一つの理由。ガソリン代と安ホテルなら何とかあります。七泊八日なんて長期のドライブは初めてで、流石にいい加減疲れ、運転に食傷気味になりました。

一・お城と湖

スコットランドで何を見る、と言って、いわゆる景色が良いのです。だからと言って、どこの景色をどこから見るのが良いのか、なんて判らないし、景色を見るだけのために車を走らせるのも目標が漠然としているし、と言うことで、湖と城を目標にすることにしました。この途中に景色が良いと言われる道を入れて行程を組んで行くのです。

湖はスコットランドの言葉でロツホ(Loch)と言います。ゲールック語の名残りでしょうが、何かドイツ語系の感じがします。有名な湖としては、怪物ネツシーで知られるロツホ・ネス、歌になったロツホ・ローモンド等がありますが、大きささままの湖があって、夫々にきれいで良い目標になります。

ロツホ・ネスは流石にウツソウとした森に囲まれ、神秘的な静かな感じの湖。昼なお暗い、と言う感じで、大きくはありませんが、怪物の一匹や二匹いてもオカシクない雰囲気でした。ロツホ・ローモンドはスコットランド最大の湖ですが、これは明るくて陽

気な感じで、外輪船の遊覧船が走っていました。

城と言っても城らしい城はあまりなく、いわゆる荘園のお館が多いのですが、これは立派なものです。広い庭、と言つより森と言つた方が良い木々の中に古い館があります。中は当時のものを展示した博物館になっていることが多いのですが、それより外観が素敵です。一つ一つに特徴と趣があつて何とも言えずきれいでロマンティックな感じですが、今もつて皇室が使つていると言つブレアー城は女王が使用中と言つことで中に入つて見られませんでした。

二・山と谷

同じ島国でも、日本に比べて英国はずつと広いな、と思います。大体、島の南の方には山が全くなく（そのため大陸からの侵略が容易だったとも言われますが）、西のウエールズと北のスコットランドに山が集中しています。スコットランドも北西部の方に高くて男性的な山があるのでハイランドと呼ばれ、東南部はなだらかで低い女性的な山ば

かりでロウランドと呼ばれます。山はスコットランド語でベン、谷がグレンと言います。このベンの合間を縫っているグレンの近くに道があり、ウネウネと走って行くのですが、これが又中々良いのです。北の方へ行くほど、木はあまりありません。ゴツゴツした山肌一面のヒース。僕が行ったときはこれが一面濃い紫の小さな花を持っていました。北の方へ行くと人家も見えず、羊や牛を囲い込むための石の柵が道の両側に続き、ところどころに牛や羊がいるだけ。こんな生き方もあるのかな、と思う一方、日本人だったらこんななだらかな丘陵は皆耕してしまったのではないかと思えます。土地が肥えていない、農業に適さない、なんて言いますが、日本のお百姓だったら化学肥料なんかで何とかするでしょう。何だかんだと言っても、英国と言つ国にはまだ余裕がある。イザとなれば、充分食料を自給できる国だという感じをますます強くしたことでした。

三． 湖水地方

スコットランドに入る少し手前、イギリス島の中西部に湖水地方と呼ばれるところが

あります。ロンドンから五〇〇キロほどのところで、今度の旅行の第一日はここで泊まったのですが、湖と山が調和して明るくてきれいなところでした。手頃な観光地、避暑地なのですが、だからと言ってそれらしい宿が並んでいるわけではなく、土産屋が並んでいるわけでもありません。自然の景色をユックリ楽しむだけの余裕があります。アクセク走り回るのでなく、こんなところへ来て何日もユックリし、ヨット遊びをしたり釣りをしたりしたら本当の休養が出来るだろうに、と思いました。

湖水地方から一寸北に行くと、イングランドとスコットランドの境になっているハドリアン・ウォールがあります。ローマのハドリアヌス大帝が（この人はずい分旅行好きだったらしく、ギリシャのアテネにはハドリアンの門と言う凱旋門がありました）英国島の原住民を征服しつつここまで来て、原住民を山岳地方に閉じ込めるため、紀元二世紀から四世紀にかけて作った万里の長城みたいなもの。高さは五メートルほどあつたそう、西はカーライル辺りから東はニューカッスル辺りまで野を超え山を超え延々七三マイルと言いますから一二〇キロほど続いています。今はところどころに遺跡があるの

みですが、フオートと言われる砦には兵舎の跡、隊長の住まい、ローマ人の好きなスチームバスの跡などが見られます。

四・ホテルと食事

日本だと、どこへ行ったら何を食べよう、と言う楽しみがありますが、こちらの食生活というのはどこへ行っても質素と言うより粗末に出来ているらしく、そう言う名物らしいものはありません。浜松でウナギ、信州でソバ、下関でフグと言う訳には行かないのです。旅行中、朝はキツパと言うニシンの燻製や塩サバに卵なんかを好んで食べました。昼は簡単なもので、こちらの人が好んで食べるステーキ・アンド・キドニー・パイなんてものとか、魚のフライにフレンチ・ポテトのついでにフィッシュ・アンド・チップスを中心。カップ・ヌードルとインスタント味噌汁を持って行つたので、山の中で小川を探して湯を沸かし、自炊もしました。夜は大抵疲れて着きますから、まずビターとスコッチで喉を潤しておいて風呂に入り、着換えて食事。二人でワインの一本も取っ

て出来るだけ土地のものらしいものを選んで食べました。本当かどうかわからないけど、ネス湖の鮭なんてのはハッキリした名物のようでした。

ホテルは大体予約して行き、良いところが多かったのですが、一度だけ予約なしをやってみました。こちらには B・B・B と言うシステムがあります。朝食つき泊まりの民宿で Bed and Breakfast というので、田舎の方へ行くともなくてもよいような民家にこの看板が出ていて、そこへ飛び込んで一夜の宿を求めるのですが、旅行シーズンは夕方遅くなるものが皆ふさがってしまいます。午後一時か三時、早い時間に宿を確保しておいて、日のある間、又近くを一回りして来るというのが利口なやり方のようです。

五・北の果て

行程はロンドンから北に向かい、西寄りに出て湖水地方 Keswick というところへ泊る。そこから Carlisle から Glasgow を通って北西の方へ行き Inveraray というところへ泊る。そこから Glencoe を回って Fort William 経由 Loch Ness へ出て東北に

進み Inverness 泊。四日月は進路を北に取り、スコットランド東海岸を北上し、北東の端の John O Groats まで行きました。近くの Wick というところ古いお城の跡があり、灯台があり、いかにも地の果てと言つ感じでした。北に突き出した John O Groats の半島の先は、すぐ近くまで晴れているのに、そこだけ霧がかかっている、海も見るこゝとが出来ませんでした。同名のホテルに泊まりましたが、一晩中霧笛が聞こえ、はるけくも来つるものかな、という感傷一入でした。五日月は北の端を海岸沿いに西に走り、少し南下して Ullapool というところ泊。六日月はもう少し下がつて Isle of Skye という島に渡り、島を一周しました。十八世紀の中頃、英国の王位継承者として七人の家来と一緒に大陸から渡ってきたチャールズ王子（きれいな王子という意味で Bonnie Prince Charlie の愛称で呼ばれます）が上陸後兵を集め、短期間の内に連戦連勝、ロンドン近くのダービーと言つところまで攻め進みましたが、最後は負けて追われる身となりました。多くの人の助けで追つ手を逃れ、上陸の一年二ヵ月後、単身ローマへ帰って行ったのですが、このスカイ島は王子が最後に船に乗って大陸に向かったところとして

有名です。この日は又ネス湖まで戻つて来て Inverness 泊。七日目はロンドン南下して Forth Bridge という一九六四年に出来たという素晴らしい橋を渡つて Edinburgh へ入り、そのまま New Castle 近くの Jedburgh というところまで行つて一泊。最終日は途中、中世の遺跡が町中に残り、街並みもオトギの国みたいな York に寄つただけで夕方 London に帰つてきました。合計二一〇〇マイル、約三五〇〇キロという行程でした。

(昭和五十一年九月二十三日) 99

ロンドンを去るに当たつて(ロンドン便り 一二十四)

とうとうロンドン便り最終回を書く日が来ました。この二年間、皆さんには陰になり日向になりご支援いただき、どうもありがとうございました。一人で生活していて、この珊瑚での会話がどんなに楽しみだったことか。編集子を勤めて下さつた馬場兄、玉川兄、茂木兄には改めてお礼を申します。岡崎がないのが言葉では言い表せないほど残

念だけど、十一月五日発のBA便で帰国します。諸兄との再会を楽しみにしています。ロンドンを離れるに当り、まとめたいなものを書いてみます。

一・センス・オブ・ユーモア

客相手の商売だから付き合いの範囲はどうしても偏りがちにはなったが、ずい分色々な人に可愛がつて貰った。何度か家にも招ばれたし（こちらの人は、人を自宅に招ぶことを最高の歓待としている）、泊りにも行った。仕事の上でも助けて貰うことが多かった。何が良かったと言つて、言葉のハンディを超えて心を通じ合えたのは、ユーモアのセンスではなかったかと思う。英国人はセンス・オブ・ユーモアを大変大事にする。笑話、ジョークを知っていると云つてではなく、時に応じて会話の中にスパツとジョークを入れる。又、一寸どぎついブラック・ジョークも好きである。あまり高等なのは判らないが、段々にジョークが判つて、偶にはトツサにひと言・二言やり返すことが出来るようになればしめたもの。ユーモアの判る男、一緒に笑える男、と言われるようになる

れば一応認められた、と言つか、ある程度心を許してくれることになる。仕事の話の中に少しずつでもこうしたものが混じるようになると、ギスギスした話も軟らかくなるし、笑いながら商売が出来る。皆が皆上手く行ったわけではないが、こうした話の出来る間柄になった人達とは実にスムーズな良い仕事が出来たことが多かった。

二・ テレビのない生活

英国には勿論カラー・テレビがあるが、チャンネルは三つ。でも、日本みたいに番組が豊富でない。教育番組的なものがかなりあり、子供を一日中テレビの前に釘付けにするような漫画番組は少ない。夜は映画とかスポーツ番組が多い。貸しテレビの制度が発達していて、借りている人が少なくない。修理などが面倒でないから借りている方が良く、と言う。どういう訳か、ウチの会社ではテレビの借り賃に会社の補助が出るので、借りないと損、という面もあったが、二年間テレビのない生活をすることにした。言葉に慣れるという意味では見る方が良いのだろうが、あるとつまらないものも見るし、こ

れで時間がつぶされるので決心した次第。テレビのない生活は日本にいたときから夢見ていたもの。と言うと少々大袈裟だが、テレビを見なければ本も読めるし、何かためになることも出来るだろうし、寝不足にもならないで済むし、と思っていたので、一つの実験だった。さして不便は感じなかったが、やはりニュースが少し遅れる。オリンピックやサッカー、ボクシングの良い試合のあるときは他の駐在員のお宅に押しかけることにした。でも、こちらの人の生活の一部にもテレビが定着していて、昨日のあの番組を見たか、というような話題に加わることは出来ず、その面ではマイナスだった。逆に何かたためになることをしたか、というところははなはだ疑問で、結局意地を張って実験をただけ、と言うことになるのかも知れない。

三・ゴルフ

ゴルフは二年間で丁度九〇回。一人でいるし、週末は何もやることがないはずだから週一回平均出来るかと思っただが、少し足りなかった。ウチの駐在員で、年五〇回と言う

記録を持っている人がいたが、これは大変なもの。週末の出張もあれば、客の相手、休暇で不在の時もある。僕の場合、週末の一日は洗濯と買い物、あとツクリしながら手紙書きなどをすることにしていたので、ダブルヘッダーはあまり出来なかった。圧巻はいつか書いたハーフ三九。これは優勝には結びつかなかったが、優勝は大小とりませ八回。最終ハンディは社内会が一三、商事との会が一七、造船会が一七、如水会が一九、三菱会は縁がなくて二四のまま変わらず、日本クラブでは二〇だった。最初の頃はコンペがあると入賞出来るので、賞品泥棒呼ばわりされるほど。出場するのが楽しみだったが、最後の頃はハンディもきつくなるし、それに比例して上手くはならないので入賞は縁遠くなり、チットモ勝てる気がしなくなっていた。回数やっても、ジックリ練習していないから腕は上がらない。平均がやっと九五近辺になっており、偶には八〇台が出ると言ったところ。日本に帰り、回数が減れば、又すぐに元に戻るのではないかと思う。川口兄、玉川兄、大野木兄の域には中々及ばないようである。

四・諸記録

テレビのないお蔭と言つても良いかと思うが、休みなんか一人でいると会話の相手は手紙になる。手紙はぜひ分書いた方だと思う。旅行先でも一寸した時間（飛行機の中、空港待合室、一人で昼食に入り注文が来るまでの間など）に寸信を書いたりするのも好きな方なので、これらの絵葉書も数に入れると二年間の発信総数は八―三通になった。親子の断絶を少しでもなくそうと、チビどもとも毎週ヤリトリをしていたので、この内留守宅向けが二五四通。受信は夫々五四九通と二―四通だった。サンゴの同人諸兄には毎月のサンゴが何よりの便りなので、個々には殆んど便りをせず失礼した。新しい切手が出る度に買って置いて出来るだけきれいな切手を貼るよう心掛けたが、切手代も馬鹿にならなかつた。

海外出張、旅行は延三五回、百四十七泊。内訳はオランダ十三回二十九泊、フランス十三回二十七泊、イタリア六回二十四泊、スイス四回九泊、ドイツ二回五泊、スペイン一回十一泊、ギリシャ一回六泊、ポーランド一回五泊、オーストリアとノルウエー

一回三泊ずつ、ベルギー一回一泊、ルーマニア一回二泊、スエーデンとデンマーク一回一泊ずつ。国内出張は日帰りを除き九回二十泊。一つの国で人形を一つ買うことにした。新しい都市に行ったら安物の記念スプーンを買うことにしていたが、これが八十一本になった。暇が出来たらきれいに飾ってみたいと思っている。

(昭和五十一年十月三十日)

・これでロンドン便りを終ります。ご愛読ありがとうございました。幸い身体の方は保ちましたが、やはり二年間の単身生活は異常な生活。身体の心棒のどこかが磨り減っている感じです。帰国次第、人間ドックとやらに入ることになっています。

思いやり(ロンドンボケ便り 三)

帰って来てもう二ヶ月。ア、日本と英国はここが違うな、と思うところを忘れない内に書いておこう。印象と言うものはすぐに薄れるものだから。

一番異様な感じがしているのはチップ。タクシーに乗ってもガソリンスタンドで何か

ものを頼んだりしても、チップ、と考える。日本ではこんな習慣はないのだ、と思つて抑えるが、どうも不自然な気がしてならない。タクシーに乗つて降りるとき、メーター通りの金を渡し一〇円単位の釣銭をもらうとき、何だか悪いな、と言つ気がする。夜遅くハイヤーで家まで送つて貰つたときなんか、少しぐらい出しても良いのではないか、と思つが、自分だけ良い子になつても他の人の迷惑になるだろう、と思つて止す。たった二年で何か感覚が変わつたのか。向こつの人、決して強要めいたことをする訳ではないが、それがとても自然に習慣として生活に染み込んでいる。何かしてもらつたら何かで返す。それも貰う人と上げる人がハッキリ分かれていて、上げてはいけない人には上げない。何か不文律みたいなものが確立されている感じだった。日本では逆に貰う人と上げる人の区別なんてないから、上げるのが失礼になるのではないか、と思つし、額にも基準がないから、多すぎるとか少なすぎるとか、余計な心配をせねばならない。岡崎が前にこのことを書いたことがあつた。それはアメリカ人が何でも、金・金と割り切ることに對する反発だつたが、その習慣の中で生活してみると、むしろその方が自然で居

心地が良くなっていた自分に気がつく。

日本人はビルの入り口なんかの反動式ドアを勢いよく押し入り、後も見ないが、あれは大変危ない。英国では必ず後ろを見て、後から来る人がいるとドアを押さえて待っていてくれる。ずっと手前の階段の下にいるのにドアを押さえて待っていてくれたりするるので、申し訳なくなつて駆け出したりせねばならず、かえつて迷惑に感じるときすらあるほど。でも、これは良い習慣だからこちらでも流行らせてやるうか、と、この間からやっているが、朝なんか、後を代わつて押さえてくれる人がいなくて、次から次へ入つて来るので、こちらはドアボーイにされてしまった。こう言つ思いやりと言つのは良い。少しくらい損をしても続けようと思つ。

エレベーターに乗り降りするとき、女性を先にする。こちらはドアを押さえている。これも自然と癖になつていて会社でやつたら、逆に女性の方がマゴツついて中々降りない。「お先へ」、「お先へ」で先に進まないのあまり無理をしないことにした。女性にコートを着せ掛けてあげるのは割と自然にやれるし、他人にも迷惑にならないから良いが、

エレベーターの方は変に拘っていると他の人に迷惑をかけることになるし、いかにもキザだったらしいので程々にしようと思っっている。

思いやりと言えば、車の運転が然り。日本の車に比べ、譲り合いの気持がとても行き届いていると思う。横の小道から出て来て、大きい通りの車の流れに乗れない、なんてことはまずない。それもタクシーが、譲って前に入れてくれることが多いのに感心する。日本式に無理に割り込みをしようとする、いとも簡単に譲って貰えて楽だが、とても悪いことをしたように思え、次からは決してこんな恥ずかしいことはすまい、と思う。こちらでこの調子で、譲るために停まったり、逆に譲ってくれるまで待つていたりすると全然駄目。少々凶々しく出て行かないと、何時まで経っても出られないし、後ろからブーブーやられる羽目になる。英国の運転免許取得試験のポイントは、安全運転の精神にある。大体、ミラー、シグナル、マヌーバリングと言って、例えば右折しようとするときは、まずバック・ミラーを見て、後方の安全を確かめてからシグナルを出し、それから車を右へ寄せて右折する。とにかく他の車、この場合は、後ろから来る車の迷惑に

ならぬようにするのが第一なのである。僕にはどうもこのやり方が理屈に合っていないように思えてならない。まず、シグナルを出して自分の意思をハッキリさせ、その後、安全を確かめてから車を操作すれば良いと思うのだが、後ろに車がいて迷惑をかけそうなら右折はするな、と言う。少なくともそれくらいの気持ちでないと試験はパス出来ない。ブレーキを踏むときもこの順序でやれ、と言う。それならバック・ミラーを見て後ろから車が来ていて危なかったらブレーキを踏まずに前にぶつかれ、と言うことか、と教習所の教官に聞いてみたが、答えてくれなかった。深田祐介が「西洋交際始末」に何度もテストに失敗していた人が、あるテストのとき、横断歩道を渡ろうとしている子供を遠くから認め、手信号で後ろの車に合図して停まつたら、それだけで試験官の態度が変わりパスしたと言う話があるが、全くその通り。テストではそれが極端に出るが、日常でも多かれ少なかれこの精神が生かされているようである。ギスギス先を争うのではなく、もう少しゆとりを持って相手のことを考えて上げられるようになりたい。

いつかも書いたが、英国の炭鉱ストで停電が続いた頃、日本だったら自分さえ良けれ

ば、とローソクの買占めでも起こり、又、馬鹿みたいな値上げになりかねないところだが、ローソクを買うのに大人しく行列を作り、一本とか二本とか必要最小限のものを買って、買占め騒ぎを起こさなかつた英国人の大人の気持は学びたいと思う。この辺は流石に先進国、先輩と思う。少しぐらい自分が損をしても努力してみようと思うが、小人の悲しさで、一寸損が大きくなり出すと、そうキレイ事も言っていられない、とエゴを出し、後で恥ずかしい思いをしているこの頃である。でも、譲り合いと言うか、他人のことを考える余裕と言うか、その気持ちは決して忘れたくないと思う。一人でもこう言うことを感じる人が出て来れば、日本ももっともつと住みやすい国になるのではなからうか。

(昭和五十二年一月八日)

セント・アンドリュース(ロンドンポケ便り 四)

ゴルフ発祥の国に来た以上、ゴルフ発祥の地セント・アンドリュースには行きたい、という念願は、行った当初から持っていたが、最初の頃の腕ではどうにもならないので、

後半になって少し上手くなってから行こう、と考えていた。セント・アンドリュースはスコットランドのエディンバラの北にあるので、かなりの準備が要る。パーティの編成、コースの予約、ホテルと交通の手配等。二年目に入った頃から計画を立て始めた。最初は丁度一年目の十一月だった。全部予約も済ませ、楽しみにしていたところが、直前になってポーランドへ出張することになり、逆に苦勞して他の人に権利を譲らねばならぬ羽目になった。後で聞くと、天氣に恵まれ素晴らしかつたとのことで、大いに感謝された。それから何回計画しただろうか。冬の間はゴルフ場が閉鎖しているし、春になってはこちらが行けそうなきときはコースの方が一杯だったり、折角手配したのにパーティの誰かが仕事で駄目になったり。一度はいつか書いたように、サッカーのカップ・ファイナルの切符が手に入って駄目にしたり、縁がなかった。これだけ縁がなくてはもう駄目か、と思っていたが、帰る間際になって、もう一度だけ、と思い手配して強引に実現させた。

土曜日朝七時発なので大分早起きをする。日本のゴルフ場並くらいか。仲間二人(と

言っても一人は一年先輩の榎本さん）を拾って空港へ行く。空港には Long Term Car Park（長期間用駐車場）というのがあつた。何日も置いておくときは割安になる。広い駐車場だが中を小さなバスが走つていて、自分の車を駐車すると、このバスがそこまで迎えに来てくれて荷物ごと拾つてくれる。親切なシステムである。出張なんかのときはぜひ分利用した。ここに車を置いて飛行機でエンジンバラまで小一時間。空港ですぐレンタカーを借りる。これは初めての経験だったが、いきなり行つても免許証と若干のデポジットのみで車を貸してくれる。使い易い七六年型フォードだった。約五〇マイル北へ走るとセント・アンドリュースである。天気が良くて気持ちの良いドライブだった。

有名なオールド・コースを申し込んでいたが、このコースはパブリックなので予約状況が前日にならないと結果がわからない。前日に確かめたら、生憎コンペがあるとかで駄目との事だった。着いてから念のためと思つて交渉してみたがやはり駄目で、隣のジュービリーと言つたコースを廻つた。ここは新しいコースで大したことはなく、セント・アンドリュースの名が泣く。十一時に始め、二時半にはワン・ラウンド廻つて上がつては

来たものの、このまま引き揚げるのは如何にも残念なので、又オールド・コースの事務所へ行き、交渉を再開する。かの有名なオールド・コースでやりたい、と日本から遙々やって来たのだ、と言う泣きが効いて、三時半からやれることになった。三〇分足らずでパンを齧ってお茶の食事。英国まで来て馬鹿なことをするもんだ、と大笑いしながら腹ごしらえをした。

風格と言つのは言葉では表し難い代物だが、このオールド・コース、風格と言つ言葉がピッタリと言つ感じ。重みと言つか大袈裟に言えば威厳さえ感じられる。コースそのものは海岸に沿つて、行つて帰つてくるだけの何てことないコースだが、緑が深くて実にきれい。バンカーは本物だし、フェアウエイもフラットに見えてアンジュレーションがある。ゆつたりしていて且つ変化があり難い。スコアはやつと五〇を切る四八。ハーフを廻つたところで暗くなり、これ以上は廻れぬ、ということになり隣のコースを廻つて暗くなつて戻つて来た。一日二九ホールやったが、キャディつきなので楽だったし、ハーフだけでもオールド・コースが廻れて良かった。

六時半頃から今度は車を西へ向ける。四〇マイルほどでグレン・イーグルというところへ行き、立派なホテルに泊まる。田舎の山の中なのに立派なホテル。七〇〇年も昔からあるとのことで、最高級の五つ星である。このホテルが持っているこれまた立派なゴルフコースがあり、次の日はここでやるう、と言う訳。翌日曜日はユックリ起きて十一時半頃からやった。ここは前日と打って変わって山岳コース。ピンが見えないようなところが多い。でも、日本のコースみたいに無理に作った感じがなく、山の中でもゆつたりしている。こちらはつらかった。お化けみたいなグリーンがあり、パットの調子が悪かったせいもあって、四パットも何度かあった。スコアは五一・五〇。パット数が二五・二三というのだから大変なもの。内容は悪くないが結果は悪い。気分は穏やかでない、というゴルフだった。でも、二日間たっぷり楽しんだ。

帰りはまた四〇マイルほどでエンジンバラに戻り、車を持ち捨てて最終便に乗り、九時にはロンドン着。相模原の自宅から茨城県のゴルフ場に行くより楽な感じだった。

流石にセント・アンドリュース。二〇〇年の歴史を持つと言う。歴史の重みと言うの

は大きい。どこが、と言うわけではないが、いわゆる風格を感じさせてくれるコースだった。木の一本一本、芝生の深みがなんととも言えず、ゴルフをやっているんだな、という感じを一步一步踏みしめながら歩いたことだった。 (昭和五十二年三月二十一日)

スカンピン物語(ロンドンぼけ便り 一)

百号記念なんて言つと、少しは改まって何かまとまった一文でもものすべきなのかも知れないが、そう言うのは得意でないし、長続きすることだけが取り得のいつものスタイルで気楽に書くことにしよう。帰つて来て、回りの皆に話し、大笑いしているケチで締まらない話。帰国後ロンドンぼけ便り第一号。

先号の川口兄の一文にもあったが、今の海外駐在員の生活は楽ではない。一番大きい問題は子女の教育で、この件は出来たら改めて書いてみたいが、経済的にもかなり苦しい生活を強いられている。駐在員の手当てと言つのは現地の給与レベルよりは高いところであり、いわゆる現地レベルの生活、英国式のつましい生活をすれば、どうにでもな

るのだろうが、ヨソ者としてはそう上手くも行かないし、食事にしたって日本式のものにしようと思えば、日本食料品店へ行つて、高い材料を仕入れて来なければならぬ。ロンドンなんて、いろんな面で駐在員としては最も暮らし易いところではないかと思うが、それでも大変なのだから、他のところはもっと大変ではないかと思う。恥を話すよ。うだがウチの駐在員連中も相当苦しい思いをしているようだ。ウチの場合、現地では駐在員手当てで暮らすと、本国には給料の一部とボーナスが残ることになっているから、昔は、帰ったら一財産が待っている、と言うことになったらしいが、今はそうは行かない。本国に残るべきものの殆んど全部を送金して貰わないと、追いつかないのが現状である。もっとも海外駐在をすると夏冬には比較的長期の休暇を取つて、外国旅行をしたりするから赤字が出て仕方がない、と言う見方もあるが。

ところで小生の場合、一人の生活だったわけだから、まず家賃が全部、一人に掛かつて来る。家族手当が出て大勢で負担するのでは大違いである。車の月賦も同じこと、一人で払わねばならない上に二年という短期間だったので月々の負担は大きい。だから

と言つて本国の分を送つて貰うわけには行かない。留守宅が日干しになつてしまふ。海外一人暮らしなんて優雅に聞こえるが、内情は大変に苦しいものだった。そんな生活を二年続けて、さて、帰る時になつて。

帰るとなると、みやげの一つも買わねばならないが、数え上げてみるとこれが大変。車でも売らないと買ひ物も出来ないのです、早めに車を売つてそれで、と思つていたが、交代で来る人が車を譲り受けたい、と言つ。英国もインフレが酷く、相当借金しても新車を買うのが難しくなつてゐるから、これは仕方がない。交代の着任まで待つことにした。交代の着任後すぐに車を引き渡して金を手にし、引継ぎの合間を見て殆んど一日で買ひ物を済ませた。一応計算どおり買ひ物を済ませ、会社への借金の精算に掛かつたが、一つ計算漏れの大きいのが出て来て一瞬ギクリ。結局、精算したら銀行の僕の口座にはただの六ポンド（三〇〇〇円）が残るのみとなつた。アパートを引き払つた後、三日ほどはホテルに泊まらねばならないし、文無しではどうにもならないので、所長に一〇万円ほど借金することにした。金が入ると気が大きくなるのは人の常。送別会の流れの飲

み屋で「イイヨ、イイヨ。俺が払うよ」なんてやつたりした後、三日分のホテル代を払ったらフトコロが何だか淋しくなった。ロンドン空港で免税のウイスキー、タバコ、香水なんかを買ったら、愈々心細い。アンカレッジで食べた立食のウドンが九五〇円で大変に高いものに感じた。で、羽田着の時点で手持ち金はたったの八〇ドル。税関で申告した分だけ税金を払わされるとても足らず、大勢の出迎えの面前で金がないことを白状せねばならず、弱ったことになった、と思っていいたら、税関吏が色々控除してくれて税金は二万円。八〇ドルが二万四千円足らずになったので、ギリギリで払いを済ませることが出来、赤恥をかかずに済んだ。荷物を運んでくれたポーターに余裕を見せて一五〇〇円渡したら残りが二〇〇〇円一寸になった。三つ揃いの背広なんか着て、自分では颯爽とした積りで出てきたのですが、内情はこんなもの。出て来たときはヤレヤレとは言うものの、全くのスキャンピンだったのです。

(昭和五十一年十一月二十三日)

オランダ

オランダには、ロンドンに駐在している頃、ずい分行ったし、その後、出張でも何回も出かけているが、紀行文として紹介できるものはなかった。ハウステンボスに来たから、長期の出張があったので、この分を紹介する。

オランダに来ています

年明け早々、一月十三日発でオランダは首都デン・ハーグに来ています。オランダはロンドンにいた頃をはじめ、出張でも何度も来ていますが、船の関係はもっぱらロッテルダムだったので、ハーグは殆んど初めてです。一応、一ヶ月と言う約束で出て来ているのですが、全く出来上がっていない状態の組織の中で、こんな約束が果たして守られるかどうか、はなはだ不安に思いつつ仕事をしているところです。

で、今日はいくつか思いつくままに。

一・天候のこと

ノンストップ便だったので、凄く楽。丁度十二時間で十三日の夕方着いたのですが、アムステルダム・スキポール空港からデン・ハーグのホテルに向かう途中、西日がキラキラと眩しいほどでした。一ヶ月前に来ていた前任者が、「自分が来てから太陽の顔を見たのはこれで二回目だ。やはり来る人が来ると太陽までが歓迎してくれるんだ」、なんてやつかみ半分で喜ばせてくれたのですが、それからはずいぶんでもありません。大体、朝が遅く、明るくなるのは九時前。夕方が早くて日が実に短いのです。ビシヨビシヨと雨が降ったり、重く曇って北海からの強い風が吹いています。(何せ風車の国ですから)ですから、こちらの人はあまり傘を差す習慣がないみたい。少しくらいの雨なら平気で濡れて歩いています。風が強いから傘を差さない癖がついてしまったのでしょうか。先日は、今世紀始まって以来、という記録的大暴風。これは全欧州を襲ったもので、英国で

は三〇人以上、ここオランダでも二〇人近くの死者が出たとか。大変な歓迎です。こんな風の中を雨に叩かれながら歩いているので、心細くなっている大切な髪の毛が吹き飛ばされてしまいソー。

二・ 仕事のこと

長崎に来てから、ゴルフ場の仕事に加えて、グループの商社部門を担当する長崎オランダ村商事という会社の専務という肩書きを貰っていたのですが、ゴルフ場の方が忙しくて、商社関係の仕事は実はあまりしていませんでした。今回、急にオランダに出てくる羽目になったのは、商事の専務と言つ立場で行つてくれ、ということだったので。ゴルフ場の方は大事な時期なんだけど一時休業。

ハウステンボスという大きなプロジェクトは、大村湾に面してオランダの街を一つ作るう、というのですから、建設に当たっても沢山のをオランダから買うことになりま

す。舗装用のレンガ、建物用のレンガ、街灯のランタンとかお館の門やフェンス、果て

は街を飾る彫刻、インテリア、家具等々。これらの買い付けが主な仕事ということ、オッカナ・ビックリ出て来たのですが、来て見たら、今度ここにオランダ村グループの支社を作ることになったと言うことで、この設立をやってくれ、ということ。支店ではなくて現地独立法人の会社を作るのです。オランダ村は設立当時からオランダ本国との関係が深く、オランダの博物館とは仲が良く、展示品を借りたりしているし、ハウステンボス計画ではオランダの古い美術品を沢山買おうとしています。十六世紀に出来たという、オランダではトップクラスのライデン大学からは毎年留学生を受け入れていて、学生交流の手伝いをしています。加えて、村で売るオランダ商品の買い付け。これまで出先がなかったのがオカシイ位なのです。支社を作るのは良いけれど、前任者は一週間の引継ぎが終ると「じゃ、ひとつよろしくお願いしますよ」とか言って帰っちゃって一人ぼっち。

資材買い付け先の工場をあちこち廻る傍ら（こちらの方は代理店が幾つかあって、今日はアチラ、明日はコチラと引っ張り回されます）、政府の役人に会ったり、ハーグ市

の役人と打合せしたり、(ハーグ市は、ここに支社を作ってくれらるなら補助金を出そう、と受け入れに積極的なのです) 独立法人の会社を作るために弁護士や会計事務所と相談したり、何か訳の判らないことをやっている、と言う訳。こちらでの仕事は何とかなるとして、本国の方でやっている仕事の中味を未だ充分に掴み切っていないので、こちらの方が難しい。外地に出るときには、本国の何処を押しせばどんな答えが出てくるか、熟知していないと仕事にならないんだが、と思い、出るには未だ早過ぎる、と思いながら出て来たのですが、案の定。思うように本国からの反応がないことに若干イライラしながら何とかやっています。

レンタカーを借りて、アチコチ走り回っています。左ハンドル右側通行で、最初は怖かったけれど、ずい分慣れて楽になって来ました。先日は、往復五五〇キロ運転して、北のフローニンゲンというところまで行って来ました。高速道路が整備されているので街中を走るよりずっと楽。最初は一〇〇キロくらいでオズオズ走っていたのに、最近ではすぐに生意気になって、一四〇キロも出してブンブン走っています。

下手すると島流しにされて、こちら勤めをさせられる恐れあり。折角始めたゴルフ場のこともあるし、今すぐこちらに来るのにも抵抗がある、と抵抗を試みていますが、どうなりますか。

三・一寸気になること

オランダ語の新聞は勿論読めないので、毎朝、ニューヨーク発行のヘラルド・トリビューンを読みます。気になるのは日本に関する記事がおよそ好意的でない論調で書かれていること。

例えば、一月三十一日付のヘラルドには「日本とアメリカの摩擦は今始つたばかりなんだ」と言うタイトルで、東欧ばかりが騒がれているけど、日本のことを忘れてはならない、という銀行家の文が出ているし、そのすぐ下に「欧州人にとって日本は謎だ」として、日本人は欧州人と異なるルールの下にゲームをしているんだ、と言うことで海部総理大臣の欧州訪問を皮肉っぽく書いています。経済欄では「海外企業の浮かれ買いに

注意しろ」という日銀の記事が取り上げられているし、「日本ロビーがワシントンで暴れている」と言う記事もあります。今日二月二日付にも日本の与野党党首公開討論会を取り上げ、ジバン・カンバン・カバンを解説して、日本の政治の後進性を皮肉っぽく話題にしているし、三面記事では川島紀子さんを取り上げて、新人類、ボディコン・ギャルとお嬢さまママとを結びつけ、下らない記事に仕立てています。

私が少々国粹主義化して被害妄想になっているのかも知れないし、アメリカの新聞の中でもヘラルドが特に反日的、排日的なのかも知れませんが、どうも記事が悪意をベアスに書かれている感じ。読者をアジっている気がしてならないのです。ロンドンで印刷した朝日新聞もあるので、高いけど時々読みますが、こんな話題には全然触れていない。総選挙は仕方がないとして、相も変わらず、日本の政治家どもも派閥だ何だって、極楽トンボみたいなきことをやっていて良いのだろうか、と思います。

(平成二年二月二日)

オランダに来ています(二)

三月五日発で再度オランダに来ていますが、今号は前回の続きということにします。

四・ 商売

ゴルフ場の仕事は、発注の仕事ですから、もっぱら買う仕事になります。これまでズツと売る仕事でしたから、一度は買う側に回って見たいものだ、と思っていました。ヤット買う側に回った訳ですが、買う方も楽ではありません。三〇億円のクラブハウスを発注しようと言うのですから、やはりチェックが大変。相場と言うものが頭に入っていませんから、何が高いのか何が安いのか見当がつきません。高い買い物はせぬように注意せねばなりませんし、叩き過ぎて悪いものを買う羽目になつては、これ又大変です。値切る立場に立つわけですが、値切つて相手に辛い思いをさせるよりも、値切られて自分が辛い思いをする方が気が楽かな、と思つたりします。日本人相手だとこれがジクジクとウツトオシイし、ゴルフ場の仕事の場合は内部にも外野席やコーチや監督が沢山いるので気を使ってやり難いという面はあるのですが……。

こちらで事務所設立の傍らやっている仕事も、やはり買う仕事です。ハウステンボスと言うオランダの町を一つ作ろうとしている訳ですから、オランダの製品を大量に買い付けます。今回は、舗道や建物の外壁に使うレンガが主で、せいぜい一・五億円程度の買い物。それでも業者を三社ほど選んで、それぞれとネゴして行きます。こちらは一人ですから、かなり自由にやり取りが出来ます。駆け引きと言って良いのでしょうか。オランダ人も名うての商人ですから一筋縄では行きません。中々シブトイのです。でも、相手をしていて、自分の製品の良さを売り込み、出来るだけ高く買わせようとする努力、もうこれ以上は値引きできません、と言いながら、何とかこれ切りにしないで可能性を残そうとする努力など、これまで自分が散々やって来たことだけに、相手のやっていることが良く判るし、むしろ可愛いと言つか、健気と言っ感じすらするのです。どうしてもこれ以上は付いて行けない、ダメだ、という段階に立ち至った瞬間。これは一つのドラマです。これまで売り込みに掛けてきた努力、金、時間がこの瞬間に無になるのですから。これで諦めます、引き下がります、と言わざるを得ぬときの辛さ、情けなさが身

に沁みて判っているだけに、良くここまで頑張ってくれたね、と肩でも叩いてやりたい気持ちになります。少なくとも大変な別れ方はしないように、また機会があれば気持ち良く仕事が出来るとな別れ方にしたいと思っておりますが、判ってくれるかどうか。

他にも沢山買い物があるのですが、具体的にまだ買い付けのタイミングにないものについては、市場調査で工場を見て回ったりします。最初飛び込んで行くと、又バイヤーか、と一寸胡散臭そうな対応をすることがありますが、このプロジェクトを説明して行き、買い付けの可能性を話して行くと、相手の目の色が変わって来るのが判ります。先方の説明にも熱が入って来て、サンプルが出て来て、カタログの山が出来てきます。工場を見せて貰うのも面白い。何を見ても初めてですから、どうして作られるのか技術的な面にも興味があり、色々と詳しく聞いて行くと、工場の人も張り切って、あれも見てくれ、これも見てくれと言うことになります。買い付ける製品が、古い街並に使うものですか、近代的大企業は相手になりません。レンガ屋を始めとして、鋳物屋とか、木製品工場とか、彫刻の職人とか、歴史的建造物の修復専門業者とかが相手。これらの

人たちは辺鄙な田舎に散らばっているのです。ですから、レンタカーを借りて東はドイツとの国境、西はベルギーとの国境、南はルクセンブルグとの国境近くとオランダ中を走り回っている感じです。

五・余暇

他に駐在員がいるわけではなく、一人ぼっちなので、夜が暇になります。昼間の動きをレポートにしてホテルのテレファックスに発信を頼み、その間を利用して食事に出かけるのがパターンになりましたが、それから後は暇。映画も久し振りに見ました。インディ・ジョーンズ、バック・トゥ・ザ・フューチャー、ブラック・レイン。インディはいつものハリソン・フォードに私の好きなシヨン・コネリーが絡んで、これは面白かった。バックは、が凄く面白くて（出張途中の機内ムービーで見たのですが）感激したほどだったので期待して見たのだけど、今回の、は何かやたらとガチャガチャと騒ぎ立てて走り回っている感じで、あまり感心しませんでした。ブラックは、アメリカの警官

が大阪のヤクザと戦う話。高倉健とか、先日死んだ松田優作なんかが出て来ます。大阪のヤクザがあまりに酷いので、明るくなって出るとき、周りの人がニヤニヤ笑って私を見るのが恥ずかしかった。

ホテルの隣にアントン・フィリップ・ホールと言う劇場があります。例の電気製品のフィリップスが寄贈した音楽とバレエの劇場。都合三度行きました。バレエは「ダンス学校」と言う題名のモダン・バレエ。コミカルで面白くはあつたけど、やはりバレエはクラシックか、ずっと現代調の方が良い。一寸半端な感じであまり感心しませんでした。コンサートが二回、いずれもハーグ市の市立オーケストラ。ご存知のとおりハーグはオランダの首都で皇室が住んでいる町ですから、同じ市立でも他の市とは格が違うのだそうです。これにゲストが加わると入場料が少し高くなりますが、それでも特別席で三五千ギルダーですから三千円足らず、安いものです。一度目はゲストがベラ・ダビドビッチというソ連生れの女性ピアニスト。隣に座ったバアサンが「スゴイんだから」と紹介してくれます。大変なファンらしい。サンサーンスのピアノ・コンチェルトでしたが、確

かに凄かった。速さと言い、迫力と言い。クラシックのコンサートなんて本当に久し振りにだったので、眠くなると思うな、と思っていましたが、全くその心配はなく、聞きほれていました。終った瞬間、そのバアサンが真つ先にピヨーンと踊り上がるように立ち上がって、熱烈なスタンディング・オベーション。皆も立ち上がって気持ち良く拍手を送りました。バアサンが眼をキラキラさせながら「凄かったでしょう」と言うので「VERY NICE」と言ったら、大変にご不満。そんな月並みの言葉で片付けて欲しくない、という雰囲気のアリアリでした。少ないボキャブラリーの中からでも、せめて「MARVELOUS」とか「SPLENDID」とか「SUPER」とか、言ってあげれば良かったと思います。二度目はチェロが参加、二晩で五曲聞いたけど、どれも知らない曲だったのが残念。もっと勉強しておくのだった。大野木兄辺りに軽蔑されそうですね。

一度はアムステルダムまで足を伸ばして、ミュージック・シアターで国立バレエの「白鳥の湖」を見ました。やはり「白鳥」は良いなと思ったけど、ロンドンで観たボリシヨイ・バレエの印象があまりに強烈なので感激も今一つでした。比較するのがいけないの

でしょう。ポリシヨイのプリマ、エヴァ・エウドキモアの白鳥。きれいな肘の動きなんかが目につかびます。悪いけどオランダ人はお百姓さんの出。足が違いますね。健康でドツシリした足です。四羽の白鳥の踊り、覚えていますか。あれは足だけの踊り。私の好きな場面なのですが、何かドタドタと言う感じが残って気の毒でした。これでも日本に行ったら大変なんですから、警沢と言うものなのでしょうね。(我が身も顧みず、生意気なことが言えるものですね)

(平成二年三月三十一日)

132

・三月六日当地着。もうかれこれ一ヶ月になります。事務所の設立は完了し、大きな事務所の立派な社長のデスクに座っています。オランダ人を一人雇い、一緒にやっています。ですが、まだ秘書がないので不便。コーヒーマーカーを買ったものの、自分で入れているような有様です。

もう早速、ハウステンボスの関係者、設計会社や建設会社の人たちが大勢来たりして、いきなりフル回転しています。駐在員の要領は心得ているので、忙しいながらも

まずまずの仕事は出来ているのですが・・・

問題はこの先どうなるか判らないこと。私の出張期間は代わりの社長が見つかるまで、ということになっています。事務局やオランダ政府の関係者、今度来た関係会社の人達は、是非初代社長になって残ってくれ、と言っているのですが、日本ではワシマンの社長殿が、オランダなんかで遊ばせておく訳には行かない、と頑張っていること。どうやら盛んに外でヘッドハンティングをやっているらしいのです。私は、どちらでも良いから早く決めてくれ、という態度。

少なくともあと一・二ヶ月は帰れそうにないので、暫くワイフを呼び寄せることにしました。二度目に出る前に、社長殿が盛んに「連れて行ったらどうだ」と言っているので、「ウツカリ連れて行くと、社長が安心してしまって、何時帰してもらえるのかハッキリしなくなるからイヤだ」と言っていたのですが、「そんなことにはしない」と約束してくれたので呼ぶことにしたものです。四月六日着の予定。何か世の中が騒々しくて落ち着きませんが、元気にしています。

デン・ハーグにて

(平成二年三月三十一日)

物騒な話

かなり沢山海外を歩き回っている方だと思えますが、いわゆる怖い目に遭ったことがあります。危ないと言われる町にも行つたし、危ないと言われるような場所にも、知つていて歩いたこともあるし、知らないで歩いて、後で脅かされたこともあります。強盗やスリは愚か、怖いオニサン方にお目に掛かったこともないのです。

集団スリにやられた、とか、剛放院みたいに、観光地のタカリにやられた、とか、置き引きにパスポートからトラベラス・チェックまで盗られて青くなったり、飛行機で預けた荷物の中味を抜かれたり、こんな話はドッサリ聞くのですが。

それでもロンドンで空き巣というか、夜、忍び込んだ泥棒に遭ったことがあります。これは、ロンドン物語でご紹介しましたが、別に怖い思いは全くしなかつたし、盗難保険でヤケブトリした位でしたから、被害もなかつたのです。ロンドンで一番怖い思いを

したのが、車の事故でしたが、これもご報告しましたね。エジプトのピラミッドの奥で、大きな汚いアラブ人にチップを要求されて、腕に下を潜って逃げ出したことがあります。たが、これもご愛嬌。

自分はこんな目に遭ったことがないんだ、とは自慢しないことにしています。自慢してしまつと、その翌日にこんな目に遭うような気がしますから。

それなりの注意は、勿論しているのです。持ち物は必ずシツカリ身につけるとか、カバンを置いてチェックインなんかする時には、足で押さえておくとか、ホテルに着いたら、貴重品は金庫に預けるとか、夜、暗い道を歩く時には、暗くなつた端の影の部分は歩かず、明るい真ん中を歩くようにするとか。いずれにしても、スキを見せないようにするのが大切なことだと心掛けています。「この男は出来る」と思わせておけば、変な目には遭わずに済む、ということかも知れません。ですから、海外にいると、どこかで緊張しているのでしょうか。やはり、正直言つて日本に帰るとホツとしますもの。

ロンドンの空港が、抜き取りドロボウで有名になつた時も、何度も出入りしたのに、

一度も盗られませんでした。というのも、預ける荷物には貴重品は勿論、取られて困るものは何も入れず、カバンには鍵も掛けなかったのです。無理にこじ開けられて、カバンを壊されるのが一番の被害ですから。この辺は、盗られるものもないくらい貧乏だったとも言えますね。

今回オランダへ来て。アムステルダム of 繁華街や、飾り窓の通り、港町の一角などを除いては、割と治安は良いところだと思います。車をリースしました。フォードのスコルピオという、日本ではあまりお目にかからない車ですが、大きくて強くて良い車です。一月の時乗っていて気に入ったので、今回も同じものを要求したら、同じ型の新車を貸してくれました。今回はステレオ付です。これが取り外し可能のカセット式になっています。こちらの人に、車を離れる時は必ず外して持って歩くんだよ、と注意されました。忠実に守っていたのですが、ある晩、ヘトヘトに疲れて帰って来てホテルの駐車場に車を入れ、ステレオを外すのを忘れて鍵を置いてきてしまったのです。翌日車を出そうとしたら、助手席のガラスが粉々に割られているではありませんか。ステレ

才は持つて行かれていました。ドロボウは他人事ではありませんでした。それにしても、一度のミスを見逃さないドロボウ氏のプロ振りには感心させられました。すぐに代車を頼んだら、仲良くなっていたリース会社のマネジャーが色々手を廻してくれて、翌日には代わりを持つて来てくれました。こちらでは普通、中々こう能率良くは行かないので有り難かったです。これがBMW五二〇という、もう一回り大きい車。おまけにマニユアル・シフトです。左ハンドルで、遠くに見える右の前端を心配しながら、不案内の道の右側を走り、右手でシフトレバーを操作している姿を想像して下さい。件のマネジャーに泣きを入れたら、急いで修理してくれて、五日ほどで元のスコルピオが戻って来ました。損害は保険で持つて貰えますが、自分の不注意料として、三〇〇ギルダーが実損でした。

三月二十八日の朝、ドーンと言う大きな音で目が覚めました。時計を見たら四時二十分。十五年前の三菱重工爆破の時と同じ種類のスパーンという歯切れの良い、気持の良い音だったので、若しかしたら爆弾ではなかったか、と、窓から外を見て見ましたが、

騒ぎもないのでそのまま寝てしまいました。朝、車を出そうとしたら、駐車場の周りはお巡りさんで一杯。大変な大回りをして、事務所に出かけるのに苦労しました。聞くと、ホテルの隣の法務省に爆弾が仕掛けられ、これが爆発したんだ、とのこと。こちらの過激派の仕業です。早暁でしたから、人の被害はなかったそうですが、後でガラスの片付けなんか大騒ぎしていました。これも怖いことの一つ。一寸間違ったら、爆風でホテルのガラス窓なんか吹き飛んでもおかしくないとこでした。

ヨーロツパには昔からパサージユと呼ばれるアーケード街があります。大抵、石造りの二階建てで、一階はお店で二階が住まい。アーケードの屋根は二階にありますから、天井が高くてユツタリして豪華なショッピング・センターなのです。私が見た中では、ミラノのパサージユが一番立派に思えました。ヨーロツパで一番古いのはブラッセルにあります。これも中々見事です。ここハーグにもパサージユがあります。ホテルのすぐ近くの商店街の一角で、私の散歩のコースだったのです。ハウステンボスの中に、ハーグのパサージユも作るうということになっていて、先日来、大勢来ていた出張者達も

入れ替わり立ち代り、見に行っていました。それがある晩、火事で半焼。きれいなアーケードが無残な焼け焦げになっていました。前の日に歩いてあんなに平和だったのに翌日は廢墟。ものの哀れみたいなものを感じさせられました。

国立博物館にレンブラントの「夜警」を見に行ったら、二日前に酸を掛けられて修理中とか。物騒なことはそこら中にあるものです。

(平成二年四月二十九日)

ゲームと賭け事

子供の頃からゲームが好きでした。戦後間もなく何もないときは、古い葉書を切り抜いて、相撲取りの形を作り、お菓子の箱の裏に土俵を描いて、二つの力士を組み合わせ、箸でトントン叩いて相撲を取らせました。当時は羽黒山とか照国なんかガスターで、決まり手まで書いた星取表を作ったものでした。

六角形の鉛筆に刻み目を入れてサイコロを作り、野球ゲームを作りました。ストライク、ボールの判定から打つ。打球の飛ぶ方向、フライかゴロか、取ったか抜けたかまで

細かくルールを作り、一人でも遊んだし、友達を連れて来て長い時間を掛けてゲームを終らせたものです。当時は青バットの天下のいた東急フライヤーズのファンでしたが、打順を決め、スコアブックのつけ方まで勉強して綿密に記録も取りました。

麻雀を覚えたのは小学校高学年の頃でした。祖父、祖母が麻雀好きで、戦時中もやっていました。空襲で電気が消えると、ローソクを点けて真ん中に立てて、手元に白い紙を持って光を反射させながらやっていたのを覚えています。家の家系がゲーム好きなのかも知れません。中々仲間に入れてもらえませんでした。祖父が亡くなってメンバーが足りなくなると、ボチボチ仲間に入れてもらい、中学生の頃は大分やっていました。流石に高校に入ってからはやらなくなりましたが、それ以降も家庭麻雀が主。祖母の相手が一番多かったのではないかと思います。祖母は九十才を過ぎても麻雀を楽しみ、私が帰省するのを楽しみにして勝負を挑んできたものです。

当時は雑誌の付録と言うと大抵こうしたゲーム。紙で作った安物のゲームですが、これが中々工夫してあって結構面白かったです。毎月楽しみにして大事に作って遊んだ

ものでした。コリントゲームも見よう見まねでベニヤ板を曲げ、釘を打って作って、ビ―玉を転がして遊びました。

中学の頃、一番熱中したのがキャロムと言うゲーム。友達のところにあつた玉突きの原理のゲームで頭とテクニックが必要です。本当に面白くて、その友達の家に行くときはこれが目的でした。当時まだ若かつたその友達の親父さんが強くて、勤めから帰って来られるのを待つて、遊んで貰つたりしました。大学に入って東京に出たら、デパートにこれが売っているではありませんか。大型のは高くて、学生の分際では手が出なかつたので、小型のものにし、最初の東京土産にして持つて帰り、妹や弟たちと遊びました。自分で稼ぐようになってから、早速大きい本格的なものを買いました。弟達が相手でしたが、息子が大きくなってからは息子が一番の好敵手になっています。

トランプもずい分やりました。本格的なコントラクト・ブリッジなんかを教わつていれば、後で役にも立つたのでしようが、叔母達が相手なので、せいぜいツ―・テン・ジヤックが一番高級な方でした。従姉に教えて貰つたマリッジという二人トランプが好き

になって、親父やお袋を追い掛け回して遊んで貰ったものでした。トランプは高校生になつてからもやっていました。期末試験の前になると、試験勉強と称して仲間五人が家に集まるのですが、一時頃まで試験の準備をすると、後はトランプ。お気に入りのナポレオンと言うゲームを明け方までやり、四時か五時頃、流石に疲れて一寝入りして、皆で一緒に家から試験に出かけたりしました。

ゲームは好きでしたが、これが賭け事になると好きになれませんでした。麻雀にしても、学生時代、雀荘には足を踏み入れませんでした。ですから、今になつても、お客の相手は出来るけれど強くない。真剣な賭け事ではなくて遊びで育っていますから、勝負に厳しさがなくて甘いのです。必然的に負けるから面白くない。その上お金まで取られるので、麻雀の付き合いは出来るだけ避けて来ています。賭け麻雀を始めると、賭けなると面白くないし、賭け金も大きくしないと刺激がなくて面白くなくなる、と言われませんが、私は麻雀はゲームとして十分面白いと思うし、賭けなくても楽しめます。

ロンドンにいる頃、日本では禁じられているカジノがあつて、何度か行きました。こ

れも本当の付き合い。博打の好きな客が来たときにご案内する程度でした。商社の連中には好きなのが多くて、生活に差し支えるほどやっているのがいました。赴任早々の若い人を唆して夢中にさせてしまい、その人はベンツでも買おうと思ってお金を持つて来たのに、ルーレットで負けて、トウトウ中古車を買う羽目になった、なんて本当の話がありました。私の場合は、カジノのルーレットも遊びと思っていきますから、これだけ負けたら止しにしようと思つて行きます。ですから被害は少ないのです。間違つて勝つても、その辺ですぐに止めますから、結局得をすることが多かつたようです。二一スに遊びに行つてやつたら、始めてすぐにトーンと大当たりが来たのでそこで止め、一緒に行つた友達も止めさせて、ナイトクラブを奢つて上げたことが二度もありました。

ここハーグにも、近くのスヘーベンゲンというリゾート地にカジノがあります。ワイフが行つたことがない、と言つので三度行きました。遊びの積りですから、二〇〇ギルダーでチップを買つてチビチビやっていたら、最初ドンドン負けたのに、一回トンと大当たりが来て元に戻したのでそこで止めて被害なし。二度目の時は二〇〇ギルダーが

五〇〇ギルダーになったところで止めたので、これは儲け。早速その金で欲しかった靴を買いました。三回目は二〇〇ギルダーで始めたら、ギリ貧に負けて資金がなくなったので、もう一〇〇ギルダー足してやっていたら、元金まで戻したのでそこで止めてこれも被害なし。一時間ほど只で楽しんだ、ということでした。欲がないのが良いようです。

先日、社長と一緒に建築設計業会の大物が来られて、この方が大変なルーレット好き。社長も好きなので、一緒にずい分付き合いました。こちらは元々好きでないのですが、自分がやらなくてもお付き合いは出来ます。この方のやり方は技術者らしく、完全に確率主義。絶対に負けない方法を編み出したとかで、実際強いのです。ですからルーレットは知的ゲームと言われます。遊びは他の動物にもあるけれど博打をやるのは人間だけだそうで（確かに猿が、丁か半か、なんてやっている話は聞いたことがあります。ルーレットは人間のアイデンティティだ、なんて勝手な理論を持っていられます。「ルーレットに絶対負けない、なんて理論があるとしたらカジノがこんなに長いこと存在する筈はない。本でも書いて世の中のカジノを全部潰してしまったらどうですか」、なんて

からかっていたのですが、ある晩この理論が外れて、大負けに負け、五〇〇〇ギルダー（四〇万円）位すつて早々に引き上げられたことがあります。それでは「私が甲い合戦をやってみましょう」と言つ訳で、一〇〇ギルダー一枚を元手に、その理論を少し変えたやり方で始めたら、不思議なことにドンドン勝つのです。三〇〇〇ギルダーにもなり、もういいや、と、お仕舞いにしました。毎晩カジノに通つて、半分プロみたいなことを言っている先生達からは、イザリに蹴られたも同然、と言つ訳で、ヤツカミ半分散々当り散らされ、これにはニコニコ笑つて黙っている他はないと言つ、誠に良い気分を味わいました。

（平成二年五月二十七日）

・まだオランダにいます。後任の支社長が外からのリクルートで決まったのだけけど、入社が六月半ば。研修半月、引継ぎを一ヶ月とすれば、帰国は七月末。下手をすると八月に掛かりそう。ワイフの帰国を出発前日に取り消し、アパートを借りることにしました。これまでは何時帰るか見当が付かなかったので、止む無くホテル暮らしをし

ていたのですが、最低何時までいる、ということが判ったので、短期間でも家具付のアパートを探すことにしたものです。決まったその日の夕方から三軒見て回り、良いところがあつたので直ぐに移りました。きれいで広くて住み心地は悪くありません。

美術二題

一・ クリステイズ

クリステイズというのは、その道の人には良く知られた美術品のオークション場です。ロンドンに本拠があるようですが、オランダにもアムステルダムにあります。サザビーズという、これも有名なオークション場がありますが、クリステイズの方が世界一と言うことになっているそうです。先日、日本の製紙会社の会長が、五日間の間にゴッホを一二五億円で、ルノアールを一八九億円で落札して話題になったようですが、これもクリステイズとサザビーズの話。但し、これはいずれもニューヨーク。芸術もお金によって動くものらしく、オークションもアメリカの方が派手になって来ているよ

うですね。長崎オランダ村も博物館に飾るものを集めるため、これらの競り市で良いものを探しています。こうした信用のあるところに出されるものは間違いないものとされています。万一、まがい物を扱ったことが判ったら、後で本物と取り替えてくれるのだそうです。何でも週に一回競りをやっているそうで、その度に立派なカタログが発売され、これで予習した客が事前に下見をして狙いを定めます。カタログには予想落札値まで書いてあります。これも仕事の一部分なので、興味半分で様子を見に行つて来ました。勿論、競りの方は専門家に任せて、こちらは見学のみ。

古いレンガ建ての、大きくはないけれどドッシリした風格のある建物です。別に入場の制限はなくて、誰でも自由に入れるのです。競りに参加する人は入口で、しゃもじの親方みたいな形の板の大きな番号札を貰います。三階の競り場に入ると、何の変哲もない部屋に、折りたたみ式の椅子が並んでいます。一〇〇個も並んでいるでしょうか。正面の中央に小さな演台があります。筒状の小さな木の台ですが、いかにも磨き込まれた感じの古くて貫禄のある台。正面に突き出した「CHRISTIE'S」と言う金文字がいか

も歴史と信用を示しています。競り師が三段ほどの梯子を上がってここに立つと、どういふ訳かこの梯子は外されてしまい、競り師はこのままこの台の上で立つたまま何時間も競りを勤めるのです。

まず、若い男が美術品を抱えて奥から出て来て客に見せます。競り師がカタログ番号何番は　ギルダーから始めます、と言つと競りが始まるのです。興味のある客が合図をすると、競り師が数字を口にする。別の客が合図をすると数字をもう一段上げます。

一〇〇ギルダーまでは一〇ギルダー刻み、一〇〇〇ギルダーからは一〇〇ギルダー刻み、一万からは一〇〇〇刻み、一〇万を越えると一万刻み、と約束が出来ているようですが、臨機に数字を飛ばしながら金額を吊り上げて行くのが競り師の腕のようです。いずれにしても一〇万ギルダーを越えると、一寸頷くと一万ギルダーということになります。競りに参加する意志を示す時は手を上げたり、自分の番号札を揺らしたり、割とハッキリした合図をしますが、その後の意志の示し方は余程気を付けていないと判りません。首で頷くのが一番多いのですが、ホンの僅かな動きで継続の意志を示します。指を立てて

これを一寸動かす人もいるし、鉛筆を立てて、その先を僅かに動かしている人もいます。競り師も余程注意力がないと勤まりません。こちらの人はあまり顔に手をやることはありません。むしろ行儀が悪いとされているのかも知れませんが、私はどうも耳が痒くなったり、鼻が痒くなったり、頭を搔きたくなくなったりするのです。高金額の競りがクライマックスになったところで汗が出て来て、気が付いたら、あろうことが赤いハンカチで（この日に限って何故か赤いハンカチなのです）顔を拭いている。これを競り参加の合図に取られては大変。何十万ギルダの品物を落札したことにされてはたまりません。慌てて競り師から目を逸らして下を向いて見えないようにしたり、見物も大変です。大抵の場合、二人が競って行きます。ルールに従って一つの合図をする毎に競り師が金額を口にして相手の方を向きます。相手が継続の意思を伝えると値段を一段上げて、また元に戻る、というやり方。一方が、これ以上継続の意志のないことを示すと、その時点の金額を何度か言って、他に買いたい人はいないかを確かめます。次の人が出てくると、またその金額からドンドン上げて行く、と言う訳です。最後は、他にありませんね、と

いう意味で数字を三回口にし、誰もいないことが確認されると、競り師が持っている小さな金槌で机をトンと叩いて競りの成立と言う訳。このトンと言う音がいかにも「もうこれで決定ですよ。今更何を言っても遅いですよ」と言っているようで面白いなと思いました。小さくても自分の好きなものを狙って来る人、如何にもこんな場に慣れたお金持ち風の人、明らかに商売人で買い漁っている人など見ているだけでも面白い。これ以上出せないと諦める時の残念そうな顔、明らかに意地で競っていたら、相手にポンと降りられてアツケに取られている人の顔、勿論、してやったり、と満足気な顔もあります。この日はエッシャーの絵が沢山出されていましたが、大変な人気。ずい分高いのもあって、会場に驚きの声が上がることがありました。予想額の二倍・三倍になり、記録的だ、との声も聞こえていました。

二・ゴッホ展

今年のオランダはゴッホ一色です。ゴッホ没後百年と言うことで、生れた日の三月

三十日から、亡くなった日の七月二十九日まで特別展覧会を大々的にやっているのです。オランダの画家と言えば、やはり何と言ってもレンブラント。これは神様級とでもいうのでしょうか、「夜警」のある国立博物館はレンブラントがご主人様です。あとフェルメールとかモンドリアンとかがいますが、ゴッホはどちらかと言えば庶民派なのでないでしょうか。皆に親しまれているという感じがします。不思議なのはルーベンスの名前が全く出てこないこと。これがベルギーへ行くと、ルーベンス、ルーベンスで正に画聖で大変です。ルーベンスが出たフランドル地方と言えば、元はオランダだった筈ですから、ここでルーベンスの名前が全然出て来ないのは不自然な気すらします。何か歴史的な理由でもあるのでしょうか。

このゴッホ百年祭のために、世界中に散らばっているゴッホの作品を借り集めてきて、二つの会場で特別展をやっていると云う訳です。お蔭で、シーズンになった最近では、出張者用のホテルを取るのが困難なほどです。

国立博物館の近くにゴッホ美術館があります。壮大なレンブラントの大博物館の横に、

ゴジンマリしたゴッホの美術館があるのが如何にも庶民派のゴッホに相応しい気がします。ゴッホ展は勿論ここが中心ですが、オッテルローという田舎でもやっているということを知っていました。面白いのは、ある銀行が入場券全部を取り扱っていて、ここに行かないと買えないのです。オープンして間もない頃の週末、何も知らないで主会場に行ったら、切符は売っていなくて、銀行に行け、と言われ、裏にあった銀行の仮設の売り場に行ったら、昼過ぎだったのに五時の切符しかないというのです。それなら又にしよう、と止しにしたのが敗因で、その後は週末の当日券なんて全く手に入らなくなりました。その銀行に行くと、発券状況を示す表が出ています。二時間刻みに入場できる切符になっているのですが、これがどこも満員。週末は終わりまで駄目、ウィークデーも五時とか七時入場の券が残っているだけ、という具合なのです。昼休みに長いこと並んで、ウィークデーの五時から七時までの間に入場できる、という券を手に入れました。普通、博物館は五時になると閉まってしまつのに、このお祭りの間は十時ごろまでやっている。入場料は二〇ギルダー。日本だと一七〇〇円の入場券なんて驚きませんが、

こちらの博物館の入場料は高くても五ギルダー位ですから、大変に高い部類に入ります。それでも中々手に入らないのですから、人気の程が判ります。

この日は仕事を早めに切り上げて、四時前には出ようと思っていたのに、片付かず、ヤツと出たのが六時でした。ハーグからアムステルダムまでは五〇キロはあります。帰宅ラッシュに巻き込まれ、一時は諦めかけたのですが、何とか七時一寸前に会場に辿り着きました。駐車場を探したら、奇跡的に美術館の真ん前に空きがあったので、この車をついで込んで駆け込んだのが七時五分前、という滑りこみセーフでした。ゴッホと言えば、自分の耳を切って売春婦に与えた話を思い出し、燃えるようなヒマラヤ杉や黄色い太陽、ヒマワリなんかが印象的ですが、跳ね橋の可愛い絵とか、薄桃色のきれいな花の木の絵とか、これがゴッホの絵かしらと思うほどのものもあります。日本の浮世絵をバツクにした人物像も面白かった。

日曜日に、昼頃仕事が片付いたので、クレーラー・ミューラー美術館に行ってみようか、と言うことにしました。車で一〇〇キロほど飛ばして近づいていくと、道端にやた

らとファン・ゴッホの看板があります。これに沿って行くと「駐車場はこちら」と書いてあります。駐車場のオニイチャンに聞いたら、これがもう一つの会場のオッテルローでした。聞いたら、今日は直ぐに入れると言つのです。車は遠いところに止めてバスで会場まで。入場料の二〇ギルダーは同じでしたが、これはラッキーでした。こちらは初期の素描が主。農婦や坑夫の後姿のシツカリと言つか、ドツシリしたデッサンが印象的でした。

(平成二年六月二十八日)

床屋と歯医者

今日はオランダの床屋と歯医者の話をします。昔、何故だか知らないけど、欧州では床屋が歯医者兼ねていた時代があつたと聞きますから、一緒にしても良いでしょう。

一・床屋の話

こちらへ来て初めて床屋に行きました。忙しかった所為もあるけど、海外での床屋に

ついでには苦しい出があるので、あまり行きたくなかったのも理由の一つです。

もう二〇年以上も前の話、初めて香港に駐在していた時のこと。ごく軽い気持で床屋へ行ったのです。椅子に座ったら、大きな電気バリカンとこれも大きな櫛を出して来たので、何をするのかな、と黙っていたら、いきなりこれをモミアゲのところにあてがったと思うと、一気に頭のテッペン近くまでザーッと刈り上げてしまったではありませんか。アツと言った時はもう遅かったのです。片方を刈り上げられてしまったのでは、もう片方も同じようにせねばならず、ついにツルンツルンの丸坊主みたいな頭にされてしまったのです。そう言えば、中国人達はこんな丸っこい髪型をしていました。泣く泣く当時の中国人のスポンサーのところへ告げ口に行ったら、大笑いされた後で、日本人は「少しにしてくれ」と言わなきゃ駄目だ、と言って、広東語を教えてくださいました。涼しくて悪くはなかったけれど、少し髪が伸びるまで落ち着かない日を送ったのを覚えています。

今年に入って床屋に行ったのは、一旦帰国した二月の末。ゴルフ場の環境問題でテレ

ビに出演した翌日のことでした。テレビに出ると判っていたら、前の日にでも頭をきれいにしておくのだったのに、と思いましたが、髪が長い方がインテリっぽくて良かった、と言う人もいたのでこれは善し悪し。

それからこつち、そのままだったので、髪は伸び放題。頂上は淋しいけれど、下の方は押さえつけるのに苦労するほどでした。先日、パリまで行ったとき、少し時間があつたので、シャンゼリゼーに出ていた街頭の絵描きに漫画風の似顔絵を描いて貰ったら、いかにも東洋人風に汚らしく、いやらしく描かれてしまつてショック。自分ではもう少しマシな積りでいたのに……。これはまず床屋に行かねば、と思つたのです。

こちらの床屋は予約制。中々合理的です。まずコーヒーマンのサービスがあります。待っている間は勿論のこと、鏡の前にも持つてきてくれます。日本では一寸考えられない。日本では五月蠅い、下らないお役所の規則で禁じられているのではないのでしょうか。時々コーヒーマンに手を出している間に、ポール・ニューマンに似た小父さんが、小さな缺でシャカシャカ、シャカシャカやってくれて、三十分足らずで、まずまずの頭が出来上

がりました。襟足やもみ上げに剃刀を入れる時、シャボンを使わず、ジャリジャリやるのが変わっていて面白かった。

と言うことで、今回は思想も落ちもない、こんなことがありました、というだけのお話。

二・ 歯医者の話

こちらへ来てどうも歯の具合が悪いのです。二度目に三月に来た時、体調維持のため自彊術（じきょうじゆつ）という体操の本を買って来て、毎朝、十五分位、一ヶ月近くやっていたのですが、身体が温まって来ると、歯が疼いて来るのでやめました。日本でも歯の治療なんてめったにやらないのに、外国で大きな身体の歯医者に太い指で大切な歯を乱暴にされては敵わない、ということもありましたが、歯医者に慣れない私としては、歯医者に行くのが怖かったんだと思います。とにかくこちらにいる間は騙し騙しソツとしておいて、何とか日本まで持たせて、帰ったら田舎の歯医者でも良いから行

って、徹底的に診て貰おう、と思っていました。それでもイザと言うときの用意に、近くの歯医者は紹介して貰っておきました。こうしたことは、知っていると言っただけで安心して平和な生活が送れるものですから・・・こんな気持でいるなんて誰にも判らないから、出張期間はドンドン長くなります。ワイフが来るとき、念のためにと行って、日本の痛み止めを持って来て貰いました。名前だけ聞いたことのある今治水なんか。痛み止めは一種の麻薬ですから、ウツカリこちらの馬みたいな人達に向けて作られた強い薬を飲んで、華奢な私に変なことになっては堪りませんから・・・原因が歯槽膿漏が進んで来たんだ、と思っっていますから、毎朝毎晩の歯磨きはセッセとしました。痛い方の右側は出来るだけ使わないようにし、熱いものや冷たいものは口にせず、甘いものや辛いものは特に右には行かないように注意してこれでズツと持たせて来たのです。体調を崩して、熱が出たりすると疼いたり、ウツカリこうした注意を忘れていると、食事中にズキーンと来たりしましたが、痛み止めを飲むほどのことはなかったのです。

それが七月に入って間もないある晩、夜中に目が覚めました。どうやら歯の痛みで目

が覚めたらしい。その時はそのまま寝てしまったのですが、朝からどうも調子がおかしい。段々痛みが増してくるのです。日中は我慢して来ましたが、夕方になってどうにも治まりそうにないので、予め準備の歯医者に連絡したら、今日はもう駄目とのことで、翌朝のアポイントをくれました。その晩がつかかった。痛み止めを飲んでも、今治水を塗っても、氷で冷やしても駄目。殆んど一睡も出来ない状態で出社して打合せを一つ済ませ、歯医者に飛び込みました。辞書持参。ダツテ歯槽膿漏なんて、英語で何て言うのか、疼くなんてどう表現したら判るのか、差し込むような痛み、ズキンズキンするなんて、なんて……。例により寝椅子に横になり、口を開けたら、どの歯が痛いのかと言うけど、どれが痛いのか判らない。虫歯ではないのですから、外からでは判らないらしいのです。ガリガリ引っ掻いたり、叩いたりした結果、どうも判らない、と言います。歯石は溜まっている。四ヶ月に一度位は歯医者に通って掃除しないと、歯が全部なくなるよ、なんて注意してくれるけど、こちらはそんな遠い将来のことを問題にしているのではありません。今の痛みを何とかしてくれと言っているのです。レントゲンを撮って見

せてくれたけど、素人目にもきれいで、悪いところはなさそうです。医者が尤もらしい顔をして言うのです。今日はこのまま帰りなさい。二つの可能性がある。これ以上痛くなる可能性が一つ。このまま良くなる可能性が一つ。(当たり前じゃないか、からかわないで何とかしてくれー)良くなったら来なくても良いけど、悪くなったらいらっしやい。「I hope to see you again.」なんてレントゲン代五〇ギルダー取られて握手。こちらは「I don't to want to see you again.」としか返事のしようがありません。痛み止めの処方を書いて貰って、街の薬局で買って来て飲みました。流石に医者の方方する薬は効いて、痛みは止まるのですが、効果時間の三時間を過ぎると、また正確に痛み出す。

また一晩、そんな目に遭って翌日電話したら、何と「Very good.」という返事。直ぐにアポイントをくれました。横になったら、小さな紙のよだれかけみたいなものを首の周りにかけてくれます。口を開けたら、「Listen to me carefully.」と来た。何かと思っ
て「Now, I will take off your wisdom tooth.」と聞くと「おはじませんか。Wisdom tooth」と言っのは「親知らず」のことだったな、とは思ったけど、歯を抜かれるなんて

想像もしていなかったので、ビックリ仰天。「身体髪膚これを父母に受く、敢えて毀傷せざるは孝の始めなり」何て言葉がチラチラする。悪いことにその直前に、ロシヤのピョートル大帝が若い頃、欧州に留学して技術の勉強をした時、特に歯医者に興味を持って、帰国してから、周りの貴族の連中の歯をヤットコで片っ端から抜いて、痛い目に遭わせた、何て話を読んだりしていたので、尚更歯を抜くのは怖いことだ、痛いんだ、という意識が強かったのでしょう。震え上がったけれど、目を開けるともうそこには麻酔の注射針が来ています。考える間もなく、歯茎にブスリ。三本目を打つ時、「これは一寸痛いよ」と言ってくれましたが、これがチクリとしただけ。五分ほど待とう。と言うことで、麻酔が効いて来るのを待つ間に聞いてみると、昨日既にこれではないか、と言う確信はあったと言うのです。念のために一日様子を見た、と言います。こう言う医者には信頼しても良いな、と思いました。痛いだろうか、とおそろおそろ聞いたたら、全く大丈夫、と言う。そんな上手いことを言っ、と思いつつ覚悟して口を開けたら、小さな金棒を持って、隣の歯を梃子にして何かやっているな、と思うと、三十秒くらいでポン

と取ってしまった、歯をゴミ箱にポイと捨てて、よだれかけを外すと、椅子を元に戻すではありませんか。薬をつけるでなし、消毒するでなし、口を漱げと言うでなし、これで終わり。冗談かと思つて、本当にこれで終わりなのか、薬はくれないのか、注意事項はないのか、なんて聞いたのですが、何もなし。これで大丈夫とのこと。丁度、金曜日だったので、週末に痛くなったらここへ電話しろ、と自宅の電話番号を教えてくださいました。

半信半疑で帰つて来て、事務所の皆や午後の客には笑い話みたいにして喋っているけど、内心は、麻酔が切れたら痛くなるんじゃないか、出血があるんじゃないか、熱でも出てくるんじゃないか、とビクビクしていました。熱が出るわけなし、痛みも、取つた跡が少しピリピリする程度でスッキリ。幸い名医に当つたのか、歯を抜くなんて初めてのことで怖がつたけれど、元々大したことではなかったのか。でも、私にとっては抜歯の経験を外国にする羽目になり、一寸した騒動でした。

と言うことで、私の歯は一本、オランダに置いて行かれることになりました。というお話。

(平成二年七月)

国外出張

一・ベルギー

ここにいる間、国外への出張は隣のベルギーへ一度、パリに一度とロンドンでした。ベルギーはブラッセルまででも二五〇キロ程度ですから、車で三時間ほど。高速道路が繋がっていますから、ひたすら走っているとベルギーに入ります。以前は高速道路に税関があつて、止められた覚えがありますが、今はフリー・パス。一九九二年のEC統合を目指して、色んな面で国境をなくして行こう、という動きが感じられます。国境の標識も目立たないものですから、どこで国が変わつたのか、気を付けていないと分からないほどですが、明らかに違つのが三つ。

オランダ人も車を飛ばしますが、ベルギー人はこれを上回るみたい。私もこちらへ来て、ずい分スピードには慣らされました。決してスピード狂ではありませんし、運転が好きな方でも、運転に自信がある方でもありません。便利だから仕方なく車を動かしているけれど、誰か他の人が運転してくれるのなら、隣に座っている方が好きです（安心

して任せられる人に限りますけど・・・)。こちらの高速道路の最高速度は一二〇キロ、一部に一〇〇キロ区間があります。これを一二〇キロで走っていると、凄い勢いで追い抜いて行く人がいる。一五〇以上は出しているでしょう。こちらもどうかすると、

一四〇位は出すことがあります。一二〇位で走っていれば快適だし、不満はありません。スピードに慣れると、一〇〇ではずい分遅いな、なんて感じたりして、日本に帰ったらどうなるのかな、なんて心配しています。ところが、ベルギーに入ると、一二〇なんかで走っていると迷惑みたい。ブンブン追い抜かれます。この違いが第一点。

第二点は、道路標識の不親切なこと。いつだったか千葉県道路標識の不親切さを書いたことがあります。ベルギーも酷い。知らない人は街を歩くな、車を運転するな、と言われていたみたい。そこへ行くと英国やオランダの標識は、本当に分かりやすく親切です。慣れもあるのでしょうかね。不思議なことに、見当で走ると、行きたい方向と必ず逆に走っているのです。ブラッセルで街の中心に出る積りが、逆に走ってしまつて、偶然、郊外のワートルローに出してしまい、思いがけずモナポレオン時代の古戦場

を見物するなんてラッキーもありました。散々酷い目に遭って、帰ってからオランダ人に聞いたら、やはりオランダ人にとっても、ベルギーの道は判り難いと言っていましたから、私だけのせいではなさそうです。もっともオランダ人には、ベルギー人の悪口を言っていれば幸せ、と言ったところがありますから、本当に信じて良いのかどうか、分からない面もあります。

第三点はフランス語。ベルギーにはフレミッシュと呼ばれるベルギー語がありますが、北の方はオランダ語圏と言われ、ブラッセル辺りまで行くとフランス語圏に入ります。大分昔に、フランスの悪口を書いた覚えがありますが、私はどうやらフランス・コンプレックス。ベルギーはフランス料理が美味しいと聞かされたので、案内書なんかでレストランを選んで、予約して、苦労して探して辿り着いたのに、英語版のメニューがないのは仕方がないとして、英語で注文しても、答えがフランス語で返ってくる。馬鹿にされているとしか思えません。美味しい料理も気分が不味くなります。これもこちらがフランス語ペラペラなら良いのでしょうから、人の所為ばかりには出来ませんけど。

もう一度、遊びでブリュージュまで行きました。これは文句なくきれいな街。観光を大事にしていると言っただけあって、古い建物や街並みが美しく残されていて、歩いているだけで楽しい。良い思い出が生まれました。

パリは、重工から来てくれた人と夕食を食べるのが目的でしたから、夕方着いて翌朝帰る、という本当のトンぼ返りでした。目的を二つ作りました。まず、ルーブル博物館に出来たというガラスのピラミッドを見ること。これは私が行っていた頃にはなかったもので、二・三年前に出来たと聞いていました。古い重厚な石の建物と現代的なガラスの構造物が、どう調和できるのか、一度見てみたいと思っていたのです。シャルル・ド・ゴール空港に着いてそのままバスと地下鉄を乗り継いでルーブルに直行し、着いたのが四時半頃。重くて古い博物館の建物の中庭に、キラキラ光るガラスのピラミッドが出来ていて、これが入口になっています。周りに池が配置されて噴水もありました。調和については、建物の方が改修中で、殆んど全面に工事用の足場が組まれていて、何とも分かりませんでした。こんな時間なのに、流石にルーブルです。まだ人が並んでいたので、

中を覗くのは諦めて、オペラ通りを戻り、第二の目的の財布探し。偶の買い物だから、とグッチを選んで、古いボロボロの財布は、シャンゼリゼーのゴミ箱に捨てました。

二・ロンドン

ロンドンは用事が土曜日だったので、こちらへ来て初めて日曜日に休みを取ることにし、ワイフを連れて行きました。古い仲間からゴルフの誘いがあつて、危うく傾きかけたのですが、初めてロンドンに行くワイフを放って置いて遊びに出たのではどうにも格好がつかないので、観光案内に徹することにし、足が痛くなる程歩きました。ここも目的は二つ。一つは何かミュージカルを観ること。オランダでは流石にミュージカルは無理。ウエストサイド・ストーリーと羅生門を見ましたが、オランダ語ではサツパリ分からないし、ムードが違います。オランダ語と言つのは音楽に向いていないのではないかと思います。本場ロンドンのミュージカルを観たい。土曜の夕方になって、発券の代理店に相談に行きました。良いのをやってはいるけど、二時間後に始まるショーの切符を

くれ、と言うのが土台無理な話です。レ・ミゼラブルをやっているのですが、今年一杯は売り切れと言います。一寸危なっかしいアンチャンに相談したら、一〇〇ポンド出せば手配する、と言いますが、二万五千円ではとても、と諦め、劇場前でキャンセル待ちを並ぶことにしました。直前ですから、長い列が来ています。一時間ほど並んでいたら、遠くの方から合図するオジサンがいるので、行ってみるとこれがダフ屋で、三〇ポンドであるといつのです。並んでいても手に入る保証はないし、疲れてビールを飲みたくなっているし、危険を冒してみることにしました。幸い切符は偽物ではなく、入場出来たのは良いけれど、最上階のその一番上の席。天井から見ているような感じでしたが、音楽はバツチリで、感動して満足しました。東京で、娘と東宝の日本語版を観て感激したのでしたが、ストーリーの組み立ては全く同じ。当然のことながら音楽も同じで、また泣かされてきました。(その後、デン・ハーグにニューヨークから、もうクラシックの仲間入りをしている「ヘアー」が来たので、これを逃してなるものか、と観に行きました。これも良かった。汚いスラングのやり取りですから、英語でも言っていることは

殆んどと言ってよいほど判らないけど、ミュージカルはやはり英語の響きが一番ピッタリしているようです。(二つ目の目的は買い物。先々号でご報告した博打で儲けた悪銭をサツパリと大きな買い物に使うおうと思ったのですが、買いたいものがオランダにはないので、チャンスを狙っていたのです。アクアスキュータムのコートにダックスのブレザー、ワイフにバーバリのバッグ。それにボンチャイナのセールで瀬戸物一式。これで大体悪銭の予算を若干オーバーしたところで使い切りました。瀬戸物は船便で送りましたが、この日は、農協のお上りさんに徹し、大きな荷物を抱えて歩きました。

(平成二年八月九日)

・やっと帰ってきました。一月に出かけたときは、ホンの一ヶ月程の積り。二度目に三月にでた時は、せいぜい二ヶ月程度の積りでしたが、結局七ヶ月足らずと言つ長期間のオランダ暮らしになりました。最初に行った頃は、昼間が短くて、暗くて寒い冬でしたが、その内にチューリップの春になり、緑のきれいな日の長い初夏になり、仕事

は別にしてオランダを楽しみました。半分くらいの期間はワイフも一緒で、こちらはもっと楽しんでいたようでした。

・どこかで緊張していたのでしょうか。首筋から背中、腰から足にかけて、身体の後ろ半分がバリンバリンに凝って、マッサージに行きたかった。日本に帰ったら行ってやるうと思っていました。機中で良いことを思いつきました。八月三日朝八時、成田着後、大きな荷物を全部託送便にして送ってしまい、バスで東京駅八重洲口。そのまま昔の東京温泉へ直行しました。今は、クア・トウキョウと名前を変え、昔の銭湯から、きれいなサウナに様変わりしています。垢すりやマッサージのコースを頼んで、二時間ほどユックリ。上手い人のマッサージは良いですね。二人やって貰ったけど、下手なのは痛いばかりで少しも気持ち良くありません。着替えてサッパリして、不要の荷物を駅のロッカーに預け、身軽になって上野池之端の藪そばへ。外国で日本料理は別に食べたいとは思わなかったけど、ここの蕎麦だけは食べたかった。せいろ二枚に酒一本で満足し、親会社の重工に出かけたのでした。夕食後、一寸銀座。マッサージの

所為か、銀座の一杯の所為か、最初の晩から時差を感じないでよく眠れました。

ヤンヤンの日々 夢の実現

引退したら、欧州のどこかに暫く滞在し、自由に歩き回ることを夢見ていたが、機会が作れてデン・ハーグに一ヶ月滞在して、夢が実現できたのは幸せだった。

ヤン・デ・フリースと言うオランダ人がいます。現在大阪でオランダ総領事をやっています。二十年近く前、長崎オランダ村の創成期の頃、オランダ大使館で下役をやっている、オランダ村とオランダ本国との橋渡しの役をやってくれた人で、オランダ村・ハウステンボスの大の理解者です。オランダ外務省ではキャリアーと言うことではなくて、日本に来て日本語が上手になって、多分現地採用として外務省入りした人らしいのです。

今は日本の総領事と言うことです。ですから大したものですが、若い頃は出世も順調ではないし、自分に能力があると思っただけに処遇に不満を持っている、こうした立場の人に有り勝ちの一寸ひねくれた感じの人でした。私はこちらへ来て間もなく会う機会があったのですが、人を下から睨め上げるような感じの人で、あまり良い印象は持ちませんでした。日本語は上手く、通訳もこれは本職の方ですから正確で大したものでした。物事を自分が信じる方向に進めるためには手段を選ばない、と言うところがあつて、オランダ村に対しても本国のご威光を笠に着て強引に自分の意見を通す、と言つた動きをすることがあつたりして、ありがたい存在ではあるのだけれど、五月蠅い存在、時には困つた存在になつていたようです。私がこちらへ来て間もなくオランダに長期に出張することになつた頃は、ヤンさんは本国に戻つて外務省の外郭団体勤めになっていました。会社としてはこの人を窓口にする他なかつたのですが、出かける時から「気をつけて付き合え」と言われていました。色々と過去の行状を聞かされて心配しながら出かけたのでした。

ところが向こうへ行つて本気で付き合いしてみると、案ずるより生むが易し、とはこのこと、中々親切で良い人なのです。外国人との付き合いに慣れない田舎の人たちにとっては、文化が違い過ぎて付き合い難い人だったに違いありませんが、外国人の一人として付き合いえば、何てこともないことが判りました。デン・ハーグ入りして、まずやったことは事務所の設営だったのですが、外務省の別館の一郭に無料で部屋を提供してくれ、役所のどこかに余っていた立派な家具を手に入れて来て、これも無料で貸してくれました。日本の会社が出先の事務所を開設すると言うことは、デン・ハーグ市にとっては企業誘致と言う事になるので、何か援助をしてくれる、とのことでしたが、その橋渡しをしてくれる。勿論、外務省や経済省の要人に紹介してくれる、等等。昔からのオランダ村応援団を糾合して顧問団を作る時も、これはヤンさんにとってはむしろ得意分野ですから、良い手伝いをしてくれました。社長の要請状を持って往時のオランダ大使とか、大学の学長とか、博物館の館長とか、一人ずつ訪問して趣旨を説明し、お願いして廻ったのですが、これらの段取りをやってくれました。ヤンさんにも顧問団の一員になって

貰いました。レンガの買い付けなどの商売に入ってから、自分は商売は不得意だ、公務員と言う立場上、商売上の協力は出来ない、なんて言いながら、色んな情報を入れてくれるなど、渋々と言う顔をしながら、やれる範囲のことをやってくれたと思います。私も「ヤンさん、ヤンさん」と頼りにしましたし、向こうも評価をして付き合ってくれたと思っています。

オランダの出先として独立法人の会社を作ろう、と言う事になりました。外国で会社を作るなんて初めての経験でしたが、弁護士に会ったり会計事務所に足を運んだりして、手探りで何とか会社を立ち上げ、私が初代社長と言う事になりました。事務所には若いオランダ人を一人雇い入れ、その男と一緒に金髪の秘書を一人雇って事務所の形態を整えたのですが、ヤンさんにもデスクを置いて貰って、相談役の形で気持ち良く仕事をしました。お宅へも伺うようになり、日本人の陽気な奥さんとも仲良しになりました。家内が来てからは奥さんに随分世話になったと思います。と言う経過を経て、ヤンさん一家が来日すると、一夜は我が家に招んで一緒に食事するのが通例になりました。男の子

が二人いるのですが、最初の頃は小さくて暴れ廻るものですから、狭い社宅のふすまを破ったりして閉口したものでした。

頑固で人の言うことを聞かない、と聞かされていましたが、そうでもありませんでした。比較的若い頃から頭髪が薄く、往時の中曽根さんみたいに横の毛を長く伸ばしてバードコードみたいに上部を覆っているので「そんなことをしたら、世の中に対して、自分は嘘つきだ、と言う事を言うて廻っているみたいなものだ。私は嫌いだ。」と言ってやることがありました。それがどう効いたのか判りませんが、間もなく毛を短く切って坊主狩りみたいにして来たので、私は「その方がスッキリしていてズツと良いよ」と言っただけでした。最近では髭を伸ばしてはいますが、頭はそのままで。意外に素直なところがあると思いました。

お蔭で私の在任期間中は、ヤンさんの取り持ちのお蔭もあって、オランダの関係者との間も誠に気持が良く、良い関係が維持できたと思っています。私が引き継いだ後任の現地社長は日商岩井卒業の人でしたが、ヤンさんはこの人とは折り合いが悪く、気持の

良かった事務所は大変住み難いところになったようでした。後任の社長は、能力はあるけれど一癖も二癖もある人で、現地採用の男とも金髪の秘書とも仲が悪くなりましたから、この人の方にも大きな原因があったのでしようが、ヤンさんという人は敵に回すと誠に厄介な人。仲介者や後見人になって貰わなければならない人が周辺に向かって悪口を言い始めたのでしよう、事務所とオランダ政府や顧問団との関係も急激に悪化したようです。ハウステンボスの開業後間もなく、私が作った現地法人のこの出先事務所は閉鎖になりました。所期の目的はある程度達成した、と言うこともあったのでしようが、ヤンさんとこの人との関係、オランダの関係者とのこの事務所の関係が思わしいものではなくなったことが一番の原因だったと思っっています。

ヤンさん一家とは、その後もお付き合いを続けています。一昨年末一家でこちらに来て、ハウステンボスに滞在している時に例によって家に招んで一緒に食事をしました。小さかった坊やたちも大きくなって、ふすまの心配をする必要はありませんでした。その折、ヤンさんが（正確に言えば、奥さんが）デン・ハーグにフラットを一つ持ってい

ることを聞きました。二人の坊やたちは英国で寄宿舎に入って学校に行っている由で、時々奥さんがオランダまで出かけて行って坊や達の面倒を見るためにこのフラットを置いてあると言います。普段は空けてあるとのことでした。

私は、前々から自分の時間が出来たら、少し時間を掛けて外国を旅してみたいと言う夢を持っていました。外国に永住する気はありませんが、少し長期に滞在して、ユックリ旅してみたい。行くとしたらどうしても欧州。もう一度住んで見たいのはやはり英国なのだけど、オランダでも良い。オランダなら言葉の心配をすることもないし、土地感もあります。オランダを起点にして欧州の各地を歩くことが出来るのではないか。その話をしたところ、そのフラットが空いている時に使ったらどうですか、という話になりました。願ってもない話です。一旦は早速、昨年行くことを考えたのですが、その後、日本に来ていたオランダ大使が交代になり、次の任地が決まるまでここを使わせて貰いたい、とのことで部屋に空気が出来なかつたので、今年決行することになりました。と言うことで、六月中旬から一ヶ月デン・ハーグに滞在します。ここを起点にして、出来れ

ばレンタカーでも借りて各地を歩いてみたいと思っています。前に行った所を思い出訪問することもあるでしょうし、私の古戦場跡で昔を偲ぶこともあるでしょう。英国にも渡る積もりです。センチメンタル・ジャーニーになるのでしょうか。家内を案内して歩くところもあるでしょう。年来の夢が思いがけない形で実現できることになって喜んでいきます。

(平成十四年六月十日)

夢の実現(二) プロローグとエピローグ

今回、私がこの計画を実施するに至った経緯は、前号でご紹介の通りですが、本当の気持は、永住とまでは行かなくても、少なくとも半年や一年は欧州で過ごししてみたい、というものでした。そのためには僅かな蓄えを少しずつ削って行っても良い。若しかしたら、外国で暮らす方が安く付くかも知れない、と思っていました。経済力の問題を始めとして、色んな制約がありますが、やはり一番考えねばならなかったのは年寄りの問題でした。幸か不幸か、なんて言ったら不謹慎ですが、私の方はそちらの心配は全くあ

りません。家内の実家に両親と身体の不自由な妹がいるのですが、こちらは皆元気で心配の必要はなさそうです。一番の引っかけりが吉祥寺に住んでいた九十六歳の年寄りのことでした。この人は先妻の伯母に当たる人で、複雑な事情があつて自分に子供がいなかつたせい、先妻を子供の頃から我が子同様に可愛がつてくれていた人。その連れ合といふことで私もつい分大事にして貰いましたし、娘や息子はそれこそ実の孫同様と言つよりそれ以上。晩年は、曾孫の顔を見るのが一番の楽しみ、と言つ人でした。今の家内も親身になつて可愛がつてくれました。我が子同様に可愛がつていた娘を早くに死なせた夫（私のこと）は愚か、その後添いまで可愛がつてくれる、と言つのは考えてみれば中々出来ないこと。心の広い人だつたんだと思います。その伯母が私を大變に頼りにしてくれていたものですから、上京の機会があれば必ずご機嫌伺いに参上するし、手紙や電話での連絡は欠かさないようにしていました。流石に近年は弱つてきて、万一の後のことの相談も受け、ことがあつたら後のことは面倒を見てくれ、と言つ約束になっていたのです。この約束が引っかけられていたのですが、この三月に大往生され、約束

を果たし終えて、当面引つかかるものがなくなった、と言う事になりました。遺言状のことを大変に心配して、銀行に預託するのに時間が掛かっていましたが、ようやく手続きを済ませ、預託が完了した一週間後に亡くなったのでした。心残りがなくなって、ホツとして気が抜けたと言うことだったのかも知れませんが。亡くなった伯母には申し訳ないけど、これは神様が私に「さア、行って来なさい」と言つて与えてくれた機会ではないか、と思つたのです。

航空券は最近ずい分安くなって、一人往復十四万円と言うのを搜しました。一番お金のかかる住居については、ヤンさん夫人に、一ヶ月一〇万円お礼を払うことで話がついたので、全く心配ありません。でも、一ヶ月丸々デン・ハーグに居ても仕様がない。各地への移動用として滞在中、レンタカーを借りることにしました。インターネットでアムステルダムのレストラン屋と価格を相談しながら決めたのが、オペルのコルサと言う一二〇〇CCの小型車。空港で受け取ったら、オランダは右側通行ですから左ハンドルなのは仕方がないとして、フロア・シフトのマニユアル車なのです。この慣れない車で

いきなり右側通行のハイウェイを走るなんて乱暴なことをしましたが、最初のガソリンスタンドで満タンにし、地図を買い、少しくラッチとギア・シフトの練習をして人心地がつかしました。久し振りにエンストなるものを何度か経験しました。どうしてもクラッチを切り忘れるのです。道については十二年前の記憶は全く当てにならず、地図を頼りにアチコチ移動しましたが、ハーグの市内は家内の方が頼りになるのです。当時、私の市内の移動はホテルやアパートから事務所への往復のみで、車の運転はもっぱら郊外でのレンガ工場探しなどでしたので、市内の地図はあまり判らなかつたのですが、家内の方は昼間暇に任せて自分の足で歩き回っていたものですから、道には詳しくなっていて、今回は買い物に出かけるときなんて逆に大分教えられました。二十八日間のオランダ滞在の内、十一日間はベルギーと英国にドライブ旅行に出かけました。オランダの右側通行によつやく慣れたところで、英国は日本と同じ左側通行に戻りましたが、左ハンドルの車で完走しました。英国内の一五〇〇キロを含め、二三〇〇キロのドライブ旅行でした。

ホテルの予約や劇場の予約、知人との連絡にインターネットを使っていた関係上、メールがないと不便でしたので、パソコンを持参しました。実は会社を引き上げる時にこのことあるを慮って、デスクトップからラップトップのパソコンに買い換えてあったのです。着いてすぐ接続しましたが、接続には勇気が要りました。大丈夫との確認は十分してあったのですが、電圧の異なる電源に繋ぐのですから、怖かった。繋いだトタンにパソコンからポツと煙が上がって機械がお釈迦になる、なんてことにならないか、祈る気持で電源を入れたら無事繋がって一安心。早速、電話線からインターネットに接続し、活躍を開始しました。会員のメル友、茂木兄と馬場ファミリーとは何度か交信し、出発直前に求めたデジカメで撮った写真を実験の相手先として送らせて頂きました（失礼！）。お蔭でいつもは大量に書く絵葉書の枚数も激減しました。かなり重くて大変でしたが、持って行って良かった。着いてから、デン・ハーグを根城にしての各地への旅行の手配をしたのですが、劇場の予約とか、フェリーの予約などインターネットは大活躍しました。便利な時代になったものです。

機中での読み物として持参したのが、司馬遼太郎の「オランダ紀行」。確か今回四度目の読み返しですが、何度読んでも新しい発見があつて面白い。オランダに興味のある方には是非お勧めの一書です。司馬さんの案内役を勤めたのが後藤猛さんと言つ人で、この本の最初に紹介されていますが、大変に評価が高く、オランダ博士なんて名称を奉られています。この本は、司馬さん自身の調査や見聞記に加えて、この後藤さんの知識を借りた部分がかんりの比率を占めると思います。勿論、筆の調子は司馬流で、面白くて印象的な読み物になっています。後藤さんは、オランダ村時代の最初の頃から関わりが深く、私も仲良くさせて貰っています。今回もお目にかかつて、一緒に旧知のユトレヒト州の前副知事を訪問し、副知事のボートでボート遊びをして、豪華な夕食をご馳走になりました。

で、パリ二泊三日、ベルギー・英国ドライブ十一泊十二日を含めて、丁度一ヶ月のオランダ滞在を終えて、七月十六日帰国しました。細かくご報告して行くとキリがないのですが、英国行きの件、芸術観賞の件など、二・三回でご報告しようと思つていますの

で、付き合ってください。

(平成十四年七月十八日)

夢の実現(四) 色々な出来事

一・新通貨ユーロのことなど

十二年前に住んでいた頃と一番変わったと思うのは新しい通貨ユーロの普及です。田舎に行くとは値段の表示が、まだユーロとギルダの併記になっていたり、主婦の話を聞くと「まだ新しい通貨に慣れることが出来ず、ギルダに換算している」とか、「ユーロの紙幣のデザインは美しくない、元の方が良い」なんて声も聞きましたが、街中の値段表示は見事にユーロ一色で、完全に通貨の入れ替えが行われたことを物語っています。我々旅行者にとってありがたいのは、ベルギーに行ってもフランスに行っても同じ通貨が使えること。値段の比較も容易です。英国はまだこの通貨圏に参加しておらず、ポンドのままです。参加に反対する運動も盛んみたいで、テレビにビーフ・イーター(ロンドン塔を警護する退役軍人達のこと)、赤と黒の綺麗なコートがユニフォームです。同

名のジンのキャラクターとして有名です）の格好をしたおじさんが出て来て、ユーロなんか要らない、と言ってユーロの紙幣を粉々に破り捨てるなんて大胆なアピールをしていました。英国は通貨のみならず、EUへの参加度合いも遅れていて、大陸はどこへ行ってもパスポート不要、税関のチェックもないのに、英国への入出国に際しては、いずれもまだ煩い検査があります。左側通行にしてもサマータイムの採用にしても、大陸とは異なっていて、英国の独自性を頑なに守ろうとする姿勢が窺えます。独自性を守るといふ姿勢は、王室を守ろうとする姿勢にも見られますが、このところチャールズ皇太子の評判が芳しくないようです。国民のダイアナ妃への思慕はまだ高いようで、ダイアナ妃の交通事故死後六年にもなるのに、王室が正式な周年忌をやるうとしない姿勢に不満を持っているようです。矢面に立っているのが皇太子で、妃の生前からのカミラさんとの交際にも批判的だし、王室が強引に二人を正式に結婚させようとしていることに対しても不満の声があるようです。カソリックには離婚が認められておらず、カミラさんは前の夫と法律上は離婚していないのですが、王室はこの法律を変えてでも離婚を成立さ

せ、チャールズ皇太子との結婚を正式なものにさせようとしているとのことで、これに対する反発が強いようなのです。新聞でも割と大きく報道されているし、常識人と思われる私の友人も同じ意見でした。先日亡くなった皇太后は百歳を越えるご長命だったので、エリザベス女王も長命で後二十年くらいは王位にあるだろう。その頃はチャールズも良い年になっていくから、王位継承をパスして、人気のあるウイリアム王子に王位を継承させたらどうだ、と言う意見もあるようです。離婚暦のあるシン普森夫人との結婚を選んで、王位を捨てたエドワード八世の故事に見習え、ということでしょうか。

二・ルーブル博物館とオルセー美術館

十二・三年前に、ルーブル博物館のコの字型の中庭の真ん中に、ピラミッド型のガラスの建造物が出来たと聞いて、オランダにいた時、出張に引つ掛けてこれだけを見に行ったことがあります。重厚な石造りの建物と軽いガラスの建造物がどう調和するのかに興味があったのです。その時は、ガラスのピラミッドは出来ていたものの、建物の方が

改装工事中、建物全体が足場に覆われていて美しさの判定は出来ませんでした。今回は改装工事もなく、重厚な建物、三角錐のガラスの建物、それに噴水が見事な調和を醸し出していて、流石にフランス人のやることだ、と感心しました。ピラミッドは博物館への入り口になっていて、三つのウイングへの行き来も容易になり、難しかった博物館見物もずい分楽になっていました。ロンドンにいた頃、出張者やお客を案内してルーブルに行く機会が何度かあったので、それらの人の時間の都合に合わせて、「一時間コース」「三時間コース」「半日コース」なんて三通り位、廻るルートを作っていた程でしたが、それでもあそこは何度行っても迷う羽目になります。そう言えば、ロンドンの大英博物館でも、自分なりにこんなコースを作っていましたっけ。

ルーブルの一番人気は、やはりダ・ビンチの「ラ・ジョコンダ(モナ・リザ)」でこの絵だけには特別の案内路の表示がついていました。私のお目当ては、ミロのビーナスやサモトラケのニケの像、ミケランジェロの瀕死の奴隷などの彫刻類、レオナルド・ダ・ビンチやラファエロなどのルネッサンス時代の絵でしたから、ラ・ジョコンダには一寸

ご挨拶した程度で、もっぱら他を歩きました。この博物館は少なくとも三日間くらいは掛けないと、満足に見物出来ません。ルーベンスがメチチ家の女帝の生涯を描いた大きな絵で埋まった大広間を発見しました。巨大な絵が一〇枚以上あったと思います。ルーベンスはこのシリーズで大儲けをしたんだろうな、と下種の勘繰りをしました。

オルセー美術館は初めてでしたが、駅舎を改装したと言うスッキリした美術館です。印象派を中心として十九世紀以降の絵はルーブルからこちらへ移された、と聞きました。以前、ルーブルで苦労して捜し当てたミレーの絵は、こちらに移されていて、今回は捜す苦労は全くありませんでした。絵に造詣の深くない私にとっては、ルノアールやモネ、マネ、ドガ、ゴッホ、ゴーガン、セザンヌなど、中学の美術で習った印象派の絵が一番親しく感じられます。ロートレックはムーラン・ルージュのポスターの絵ばかり描いていたのかと思っていました。普通の絵も沢山あって、とても良い雰囲気のを描く画家であることを発見しました。日本人の観光客も多く見られましたが、心なしかオルセーの方が多くのように感じられました。日本人は誰でも私と似たような感覚を持っている

のかも知れないな、と思いました。

三・パスポート盗難事件

自慢になる話ではありませんが、家内が自分で白状しているので、了解づくで顛末の報告をします。

パリの北駅でやられたことに気がついたときは、流石にドキッとなりました。二日後に英国行きの予定を組んでいて、フェリーもホテルもミュージカルもシエクスピア劇場も友人訪問も全部固めた後だったので、これが出来なくなったら困るな、というのが第一感でした。でも、その後の処置は我ながら中々見事でした。しよげ返る家内を「出来たことは仕方がない。後をどう処置するかが大切だ」と慰めておいて、パリの大使館が警察に連絡を取ろうとしましたが、夕方の六時を過ぎているし、電話を試みましたがフランス語の電話でどうにもなりません。帰りの汽車の発車時間は迫って来る、ということ、後の処置はオランダに帰ってからにしよう、と腹を括りました。帰りの汽車の中、

反省と心配でオチオチ座つていられない家内の前で、こちらはグツスリ寝てしまつて聲を買いました。翌朝、九時になるのを待つて大使館に電話をしたところ、法律上、盗難届がなければ再発行は出来ない、と言います。「パリで盗られたので、届を取るの難しい」と言いかけたら「そこはソレ、何とでもやりようはあるではありませんか」と言うヒントをくれました。アツそうか！と気がつき「野暮なことを聞いて、お役人に言い難いことを言わせてしまつて申し訳ありませんでした」と詫びておいて、すぐに飛び出してハーグ市の警察を探しに掛かりました。いくら何でも当の大使館に「ハーグの警察はどこにありますか」と聞くのは図々し過ぎると思つたのです。警察署探しに時間が掛かりましたが、何とか探し出し、「昨夜ハーグ市内の雑踏の中を歩いていて、気がついたらリュックの蓋が開いていて、パスポートだけが無くなつていた」と言うストーリーで盗難届を作つて貰いました。途中、アル中かヤク中の爺さんが入つてきて倒れる、なんて事件があつたりして時間が掛かりましたが、首尾よく届を受け取り、午前の勤務時間中に大使館に飛び込んで、再発行の手続きを済ませました。と言う顛末で、翌日午

後、再発行されたパスポートを受け取り、次の日には首尾よく英国に向けて出発するこ
とが出来ました。旅行代理店でもこう上手くは行かないところ、我ながら見事な手並み
だったな、と思いました。

四・ブルージュ

ハーグからロンドンに行くのには大陸側をフランスのカレーまで三〇〇キロ、船でド
ーバー海峡を渡って、ドーバーからロンドンまで一五〇キロほど走らねばなりません。
最初からこの長距離ドライブはしんどいので、途中ベルギーのブルージュで一休みして
行くことにしました。一泊の予定だったのですが、丁度、週末になり、週末は一泊では
駄目、連泊にしないとホテルが取れない、と言うので、ロンドン泊を一日犠牲にして二
泊することにしました。

ブルージュは九世紀頃から港町として栄えた街で、一時はハンザ同盟の一員になった
ほどでしたが、十五世紀になって河の堆積物によって港の機能が果たせなくなり、死都

と言われるほど衰えてしまった都市です。お蔭で昔の都市がそのままの形で残されているので、中世の町並みを楽しむことが出来て、今や絶好の観光都市になっています。実は十二年前、長期出張から帰国する直前に、娘を呼び寄せたとき、一度行ったことはあるのですが、今回、連泊を強要されたお蔭で、この街を一日ゆっくり見物することが出来ました。ブルージユ（橋のこと）の名前の通り、町中に張り巡らされている運河には石造りの古い橋が沢山懸かっています。石造りのせいぜい三階建ての、いかにも中世の建物と、擦り切れた石畳の道路。高い建物と言えば教会の塔くらいなものです。丁度、お祭の日に当たり、街の中央で仮設の舞台で演奏会をやっていたり、仮装行列が騒いでいたり、で賑わっていました。

中央の広場の屋外レストランで名物のムール貝のワイン蒸しとホワイト・アスパラガスのバター煮で食しました。アスパラガスの旬は六月初めとのことで、一週間ほど時期がずれていたの少し痩せたアスパラガスでしたが、中々のものでした。食事の後、家内が同じ広場のベルフォルト（鐘楼）と言う塔に登ると言うので、こちらは遠慮して

ワインを飲みながら見物していました。パリの凱旋門での五〇メートルの登りで懲りたのと、右膝の古傷が痛み出したので、英国旅行を前にして自製の意味もありました。

あまり期待もせず、ついでに立ち寄った積もりの街でしたが、思いがけず良い見物が出来て、ラッキーと言う感じでした。

(平成十四年九月十日)

五・マイ・フェア・レディ

今回の旅行を計画して、最初にやったのはレンタカーの手配でしたが、次にやったのがロンドンでのミュージカル観劇の手配でした。上演中のお出し物の情報を集めてみるとあるは、あるは。流石に本場です。「ライオン・キング」は丁度終わったとの事でしたが、「レ・ミゼラブル」「マンマ・ミーア」「シカゴ」、大長期公演中の「マウス・トラップ」。これから話題になりそうな「フル・モンティ」なんて面白そうなのもやっています。散々迷った挙句、クラシック中のクラシック、「マイ・フェア・レディ」にしました。折角ですのでフルコース・ディナーとの組み合わせと言うのを奮発しました。インター

ネットでの予約も上手く行き、当日、劇場のボックス・オフィスで首尾よく入場券を受け取って、近くのレストランで食事。これはあまり大したことがなく失敗の部類でした。

ドルリー・レーンと言うロンドンで一番古いと言われる国立劇場のストール席に座り、聞き慣れた「踊り明かそう」などをアレンジしたプロローグが始まった時は感動でジーンと来ました。ミュージカル自身に感動したと言うより、本場のロンドンでミュージカルを観ている、と言うことに酔って感動したのだと思います。言葉の遊びのミュージカルですから、分からない部分の方が多いのですが、知っている曲が沢山出て来るし、筋は知っているし、で十分楽しめました。オードリー・ヘップバーンの映画が有名ですが、舞台は迫力が違うな、と思いました。前半が、美しい英語を守ろうとするヒギンズ教授が、汚い英語しか喋れない下町の娘イライザを教育し成功する物語で、この部分の方が有名ですが、後半はこの娘と教授の恋物語と言うより、堅物で女性蔑視の教授が娘に教育されて行くウーマン・リブの話であることが判りました。

六・オランダの友人たち

オランダの友人たちも歓迎してくれました。いずれも「久しぶりに会いたい。一緒にコーヒーでも飲まないか」と言う呼び掛けをしたのですが、それぞれの方法で歓迎してくれました。

例のゆめ駅伝でも親身になって手伝ってくれたユトレヒト州の前副知事のオーステンさんご夫妻は、自慢の二〇メートル級のボートに招待してくれ、湖を周遊した後、湖畔の素敵なレストランで夕食をご馳走してくれました。このご夫妻との付き合いの始まりは、長崎オランダ村へ来て間もなく、ハウステンボスが出来る前のことでした。ご夫妻でオランダ村に来られたことがあったのですが、ジョークの好きなご主人とユーモアのセンスが一致する部分が多くて、すぐ仲良しになりました。親交を深めたきっかけが面白いのです。十二年前オランダに長期出張中、当時の池田会長と神近社長が出張で来られた時、このご夫妻にユトレヒトの近郊を案内して頂いた事がありました。私は会長と社長を自分の車に乗せて付いて走っていたのですが、あるところで鍵を車の中に入

れたままロックしてしまっ、と云う大失敗をしました。この時、オランダのJAF（向こうではWWと言いますが、JAFと提携していて、JAFの会員だと同じサービスが受けられるのです）を呼んだのですが、会長と社長にはご主人と一緒に先に行って貰い、奥さんが現場で長い時間付き合ってくれて、大助かりをしました。それ以来、私は「ミスター・キーマン」と云う大変重要な人になっています。

十三年前、事務所立ち上げに際し、一緒に仕事をしたウォルフくんは当時は三十台半ばで、まだ青年と言う感じでしたが、今や四十八歳の働き盛り。医療関係の会社を作つて、一人で頑張っています。その後、結婚して（実際は再婚）女の子二人の父親です。新婚旅行に日本に来た時、歓迎したことがあって、奥さんとも旧知。海辺のバンガローに招待してくれて、主人自らの手料理で歓迎して貰いました。私がいる間は、本当に楽しく気持ち良く仕事をしたのですが、私の交代で来た後任の社長が難しい人で、ソリが合わず喧嘩の連続だったそうです。それでも日本からの仕事の要請はウォルフくんに向けて来るものですから逃げられず、三年間この事務所で働いてハウステンボスがオー

ブンしてから辞めたものです。当時の辛かったことを話してくれ、「ナガシマさんがいたから我慢したけどそうでなかったらもつと早く辞めていましたよ」と言っていました。秘書役をやってくれていたシュリーくんも大喜びで歓迎してくれました。こちらは私と一緒に働いたのが三ヶ月。同じく後任社長と喧嘩して一年足らずで辞めています。当時から付き合っていたボーイフレンドと結婚し、これも二児の母親。母親業の傍ら、趣味で装飾品の小さな工場をやっていて、この工場を見せて貰った後、お家に伺って旧知の旦那さんと二人の女の子の歓迎を受けました。小さな庭でワインを飲んでいる間に、女の子を助手にして手際よく台所仕事を済ませ、本物のオランダの家庭料理をご馳走してくれました。見事な「仕事を持った主婦」振りでした。装飾品の工場を持ちたい、と言う夢を叶えるため、色んなところで働いた経験を持っていますが、「ハウステンボスの事務所で働いた三ヶ月が一番楽しかった。ミスター・ナガシマは一番良いボスだった」と言ってくれました。間違った仕事をしたのに、ボスの方に謝られたのは初めて最後だった、と言います。かなりのポリユームの仕事をやり終えて、私に提出したら、そ

れが間違っていて、叱られるかと思つたら、私が「自分の説明の仕方が悪くて無駄な作業をさせてしまった。悪かった」と言つて謝つたのだそうです。スツカリ忘れていましたが、確かに私は、コミュニケーションが上手く行かない時の原因の大半は、メッセージの送り手にある、と思つていますので、そんなことを言つたことがあつたかも知れません。妙なところで評価されるものだ、とオカシナ気になりました。

度々紹介している後藤さんとは何度か一緒しましたが、旅程の最後の頃に、お嬢さんが結婚するので披露パーティに出てくれないか、と言われて出席することにしました。アムステルダム郊外の会場で夜の八時半開宴、と言つので昼間アムステルダムの国立博物館に行き、後、函館の五稜郭の原型になつたナールデンという古い町で時間を潰して、地図も無い田舎の町を尋ね尋ねて会場に辿り着きました。ご馳走を期待して腹ぺこで行つたのに、ワインは出てくるけど、何時まで経つても食事は全く出て来ない。飲めや踊れだけのパーティだったのです。暫く付き合つて引き上げましたが、空腹で散々飲んだものですから、かなりの酔っ払い運転。無事に帰つたものの、夜中に残りもののパン

のかけらとインスタント・スूपで食事をする羽目になりました。

七・外貨換金のこと

私は昔から外貨への換金は相手国の空港に着いてから、その国で使うと予想される金額の総額を、少し多目に一度に空港の銀行で換えることにしています。日本で換える何だかずい分不利な換算レートを適用される気がします。田舎の銀行なんかでやるものなら言いたい放題のレートを押し付けられます。この辺の仕組みについては勉強したことがないので、何か誤解があるかも知れませんが確かなことは言えませんが・・・。今回も着いてすぐ、アムステルダム空港で割りと大きな金額を円からユーロに換金しましたが、これが大陸ではどこでも使えるのがありがたいことです。他の方法でも換金して見ましたが、同じ通貨なので比較が楽に出来ます。諸兄姉の今後のために、どんな方法が得か比較してみます。

一番つまらないのが、観光地の換金屋での換金。今回やむを得ずパリのシャンゼリゼ

ーの換金屋でやりましたが、相当酷いレートでした。こぎれいなシツカリした換金屋に見えたので、ここなら信用出来そうだ、と思つてやつてみたのですが、これは失敗、やはり観光客と見て足元を見るのだと思います。もっともこの換金はパスポート盗難事件の直前に、家内に預けてあつた円を換金したものですから、レートの問題よりも被害額を減らしたと言う意味で、結果的に得をしたということになりました。ロンドンでも観光地は大分損をします。英国も田舎の観光地の郵便局でやつたのがとても有利なレートだったので、観光地でも田舎はまだ素朴で正直なのかしら、と思ひました。郵便局と云う公共機関だつたからでしょうか。

日本で使っている銀行のキャッシュ・カードを外国でも使えるカードに変えることが出来る、と聞いて日本を出る前に、替えて行きました。「PLUS」の表示のあるキャッシュ・ディスプレイで、自動的に換金が出来ます。ルーブル美術館で発見したのでやつてみましたが、換金できる上限の金額があつて、その場凌ぎ程度の利用と云ふことかなと思ひました。尤もロンドン市内で何度か使いましたが、換金の上限が割と高かつ

たので、大いに利用価値がありました。レートは銀行のやることですから、変なレートを適用されることはないようです。額の高に関係なく一定の手数料を取られるので、出来るだけ回数を少なくして、一回の換金額を大きくする方が良いと思われます。

買い物にはクレジット・カードをインターナショナルにしてあるので、これまでも良く使っていました。これまでは通貨が異なるので比較が難しかったのですが、今回は楽に比較が出来ます。請求が来てから換算レートが判りますが、その時の実勢レートに近いものが適用されているようで、これが一番有利ではないかと思われれます。ただ、クレジット・カードは使い過ぎに走り勝ちで、後の支払いが恐ろしい。

銀行で換金すると、まず間違いなく実勢レートでやってくれますので、その日のレートを見て円高の有利な日に換金する、と言うメリットがあります。今回も初日の空港でのレートはかなり有利なレートでした。

(平成十四年十月二十二日)

八・マン島のソコ

マン島と言うのは、イギリス本島とアイルランド島との間に浮かんでいる小さな島で、南北五〇キロ、東西一八キロと言いますから、大村湾にスッポリ入る程度の島。人口が八万人足らずなのですが、独自の議会を持ち、独自の通貨を持つ独立した自治体です。尤も、通貨はデザインが違っただけで、レートは本国のポンドと同じでした。マン島の語源は、昔、マナナンと言う三本足の巨人が住んでいたことに発すると言います。ですから島のロゴ・マークは、足を三本組み合わせたグロテスクなもので、何度見ても好きになれませんでした。ローマ人の侵略を撥ね退けたことを誇りにしているようですが、その代わりバイキングの侵略は受けたとの事でした。税制面での優遇措置があるらしく、ここに名目上の本社を置く会社があるようです。この島にシエルの工務監督を卒業し、ここに作られていたシエルの子会社の社長をしていたマツカリオンさんが住み着いていて、いつかは来て下さい、と言われていました。

今年に入ってから、マツカリオンさんが会長をしている公営の電力会社がスポンサーになって本を作ったから、と言うことで一冊の綺麗な写真集が届きました。マン島の美

しさを空からの写真で紹介した「Air of Mann」と言ふ本。勿論、マン島の正式名称「Isle of Mann」に掛けてあります。私は単純に、奇麗なところだな、是非一度は行ってみたいな、と思ったのと、スポンサーのマツカリオンさんの顔写真が出ているな、と思った程度で机の上に置いておいたのですが、息子が来てこの本を発見して顔色を変えました。「どうしてパパがこんな本を持っているのか」と言うのです。マン島では年に一度、島を一周する二輪車のレースをやっていて、Tourist Trophy（略して、TTレース）という、世界中から名のあるレーサーが集まる有名なレースになっている、と言います。息子はひと頃二輪車に凝っていましたので、マン島は彼にとって一つの夢だったのでないでしょうか。お蔭で今回、マン島まで足を伸ばす大きなきっかけが出来ました。マツカリオンさんにもこの話をして半日自由時間を貰って、島を一周するTTコースを二輪車ならぬ四輪車で走ってみました。デジカメでメイン・スタンドの写真を撮って早速息子に電送したり、コースの途中にある山の頂上のTT博物館で一寸した記念品を買ったりしました。

九・フェルメールのこと

絵を見るのは好きな方ですが、オランダに長くいたせいか、好みはどうやらオランダの画家に傾いているようです。それも宗教画の十五・十六世紀やそれ以前のものではなくて一七世紀のもの。ルーベンス、レンブラント、フェルメールから少し下ってゴッホなど、どの国の美術館に行っても何となくこれらの画家の絵を捜しているようです。中でもこのところフェルメールと言う寡作の画家の絵が好きになっています。この画家は一生に三十六枚の絵しか残していない、と言われていますが、これらが全世界に散在しています。大変に珍重されていて（絵に対して、珍重、は不適切でしょうが、値が高いということですが）、数年前、デン・ハーグのマウリッツ王立博物館で全世界のフェルメールの絵を集めて大フェルメール展をやった時は、護衛に軍隊が出動したそうです。今回は、ヨーロッパにあるフェルメールの絵を出来るだけ沢山見たい、と思いました。オランダ本国にあるものは、国立博物館に四枚（小径、キッチン・メイド、手紙を読む女、ラブレター）、マウリッツハウス王立博物館に三枚（青いターバンの女、ダイアナと仲

間たち、デルフトの風景)で、これらは何度も見えていますので、復習です。パリのルーブル博物館で二枚(天文学者、レースを編む女)、ロンドンのナショナル・ギャラリーで二枚(ヴァージナルの前に立つ女、ヴァージナルの前に座る女)見て、今回見たのは合計十一枚でした。調べてみると、アメリカにある分が一番多くて十四枚。この内、ニューヨークのメトロポリタン美術館に四枚、ワシントンの国立美術館に四枚あることが判りましたので、機会があれば見てやろう、と思っています。後は、ドイツに六枚、ウーンに一枚、英国にはアイルランド、ケンウッド、ウインザー、スコットランドに一枚づつ合計四枚あるようですが、個人所有のものもあって、全部が全部公開されているものではないようなのが残念です。フェルメールを観て歩く旅、なんてのが出来ると素敵ですね。

十・フォートナム・メーソン

今、フォートナム・メーソンの紅茶と言えば、知らない人はなく、日本中どこでも売

つていると思いますが、三〇年前、私がロンドンに駐在していた頃は、知る人ぞ知ると言う感じで、知らない人の方が多かったのではないかと思います。日本で手に入れることは出来ませんでした。ロンドンに行つてすぐ、何となく好きになりました。別に、紅茶の味に惚れた、と言うほど高級なことではなく、何となく素敵、と言う感じではなかったでしょうか。お土産の選定に苦労している出張者にはこれを勧め、当時はハロツツの地下にある売り場が有名だったので、何度かハロツツまで連れて行つた覚えがあります。五年程前に出来た博多の三越にフォートナム・メーソンの軽食レストランがあります。ことを妹が教えてくれました。行つてみたら薄い緑とピンクの色調の可愛いレストランで中々雰囲気が良いので、博多でのお昼はここを利用することが多くなっています。やはり女性客が多いのですが……。

ロンドンでハロツツに行つたので、食品売り場の若い案内嬢に、昔、ここにフォートナム・メーソンのコーナーがあつたんだけど、と聞いてみましたが、知らない、とのこと。多分、この娘が生まれる前の話でしょうから、聞く方が無理だったのかも知れませ

ん。ロンドンでの最終日の夕方、食事目的でピカデリーに出ました。うる覚えで歩いていたら、フォートナム・メーソンの本店を発見。入ってみると、食料品だけでなく、衣料品や装飾品がフォートナム・メーソン・ブランドになって売っています。お土産用と自分用に紅茶を仕入れ、ここのレストランでロンドン最後の食事をすることにしました。こじんまりした、感じの良いレストランで、メニューの数は多くはありません。フォートナム・メーソン・オリジナル・ワインなるものを注文し、英国名物のドーバー・ソウルとロースト・ビーフを楽しんで来ました。

十一・車事情のこと

オランダも英国も昔に比べて車が多くなり、車事情が世知辛くなっているのに気がつきました。オランダでも英国でも駐車場の制限が厳しくなっていると聞いていました。ロンドンでは場末の中級ホテルに三泊したのですが、ホテルに駐車場がなく、町の駐車場だと一日六〜七千円取られると言うし、ロンドンでは車は使わないので、二〇キロほ

ど離れたところにある地下鉄の駅前駐車場を使うことにしました。往復には時間が掛かりましたが、これで二万円の駐車料金が一五〇〇円で済むことになりました。貧乏旅行者の辛いところです。街中には狭い道にも駐車できるようなスペースが作ってありますが、どこも満員。縦列駐車で押し込むのに苦労します。これらは路上の駐車スペースですが、有料なのです。ところどころに駐車料を払うボックスがあつて、そこにコインを入れて駐車券を求めてフロント・ガラスのところに表示しておくやり方。現地の人たちも神経質なくらい注意してコインの追加をしていました。私も真面目にやっていたのですが、或る日、コインの持ち合わせがないので、お釣を貰ってから払おう、と思つて立食のカレー屋に入ってカレーを注文し、食べ始める前に様子を見に行つたら、もう罰金の切符が貼ってありました。ホンの五分か一〇分くらいの間のこと。お巡りさんの背中が見えましたので、あいつらにやられたんだ、と思いましたが後の祭りです。五千円近くの罰金でした。この見回り人たちは、お巡りさんの格好はしているけれど本当の警官ではなくて、駐車違反の摘発を商売にしている人たちなんだそうです。これは別項の

パスポート盗難事件の後、再発行の手続きに成功し、新しいパスポートを受け取りに日本大使館に行く前、時間待ちのための軽食の間のことでしたので、パスポート盗難の二次災害とも言えそうです。パスポート再発行に掛かった費用は保険に求償しましたが、この罰金を求償することは出来ませんでした。

アムステルダムスキポール空港に降り立つてすぐ、レンタカーを引き取って、いきなり左ハンドルのマニュアル車で右側通行の道を走る、なんて無茶をしたのですが、運転には割りとすぐ慣れたものの道には苦勞しました。オランダも英国も大きな町に辿り着くまでは良いのですが、街なかが大変なのです。相変わらず一方通行が多いし、今回は特に道路工事が殊更多いように感じました。街に入ってもホテルを捜すのが大変。見当をつけても辿り着くまでに時間がかかりました。英国には立派な道路地図（全国版とロンドン版それぞれ厚さが三センチはあるものです）を持って行きましたが、これが三〇年前ロンドンにいた頃使っていた代物。それでも結構役に立ちました。ハーグで深夜、通りたい道が二ヶ所も工事中で、何度トライしても目的地に辿り着けず、夜中に地

図を睨んで、一方通行と工事の箇所を避けて行く、迷路の出口探しみたいなこともやりました。ハーグの市内は十二年前に自分の足で歩き回っていた家内の方がむしろ詳しいのですが、勘を頼りに覚えているので、地図を頼りにする運転者は難儀します。読んでいないので内容は知りませんが、「地図を読まない女」とか言う最近の小説は、この辺がテーマなのに違う、と思いました。

車に関連してもう一つ。一九七一年に初めてパリに行った時、凱旋門のロータリーを物凄いスピードで廻っている車の群れを見て、フランスでは絶対に運転しないぞ、と心に誓いました。フランス人やイタリー人の運転は、私には、乱暴だ、としか見えないのですが、実際に際どい運転なのです。感性が鋭くて、天才的な運転と言えるのかも知れません。車の運転は決して上手い方ではない、と自認している私にとっては、この種の運転にはとても耐えられない、と思っているのです。で、パリへはThalysと言つ特急電車を利用することにしました。片道三時間半、一等列車を張りこんで快適な旅をしました。現地では地下鉄をフルに活用し、地元の天才的運転者たちにご迷惑をかけないで済

みました。

結局、レンタカーの総走行距離は三三三二キロでした。この内、ベルギー経由英国ド
ライプが二三〇〇キロ、内英国々内が一五〇〇キロでした。駐車違反はありましたが、
事故と言ったら、どこかで後輪のホイールキャップを落として、二二ユーロ（約二五〇〇
円）程度の損料を払った程度でしたから、まずまず合格と言うことでしょう。（完）

（平成十四年十一月十日）

香港

香港に駐在していたのは昭和四十一年のことだが、この頃
は、まだ「珊瑚」が存在していなかったため、記録は残っ
ていない。その後、何度か出張で出かけたが、その際に書
いたものを一つだけ紹介する。

十二年ぶりの香港

久し振りに香港へ行つて来た。半年の駐在を終えて香港から帰つたのが四十一年の十一月のことだから、十一年半振りということになる。

十二年前、日本を発つたのはやはり四月で、美貴が生れて五ヶ月目。勿論、まだ歩けもせず、白い毛系の産着にくるまって、ウコン色のスーツを着たワイフに抱かれて空港のフィンガーで送つてくれたのを思い出す。這えば立て、立てば歩めの親心、というが、僕が香港へ行っている半年の間に、美貴は寝返りを打ち、ハイハイをし、掴まり立ちをするようになり、帰つて来たときはヨチヨチ歩きで迎えてくれたのだから、この大事な時期にいなかった、というわけ。その美貴はこの四月に中学入りし、朝出るときに達直と二人で、大きな荷物を車のトランクに積み込むのを手伝つてくれた。抱かれてお荷物になつているのと、荷物を運んでくれるのでは大変な違いである。

今回の出張が決まつた時は、未だ成田空港が三月三十日に開港される予定の頃で、遠くて不便だし、不慣れの混乱があるかも知れないし、厭だな、と思つていた。経験や実

験としては良いが、東京からホンコンまで四時間ほどで行けるのに、待ち時間を入れて出発まで五時間も見なければならぬなんて、およそバカらしい。誠に申し訳ないけれど、成田開港が延期になり、羽田発になって実はホツとした。

それにしてもあの過激派の連中のやること。あれは正に戦争だ。相手が、何でも破壊しろ、邪魔する奴は殺せ、と向かって来るとき、迎え撃つ機動隊の方が楯と警棒と放水位でしか対抗出来ないなんて、少しオカシイのではないかと思う。もっと対抗手段があっても良いのではないか。ガス弾の水平撃ち位やって何が悪いか、という気すらする。管制塔への侵入にしたって、あんなの、下からライフルで撃ち落す位の事はやれないのかしら。確かに経緯はある。反対する人たちの理由もあると思うが、やり方には限度があるのではないか。羽田が過密で危険な状態にあるのは事実。どこかに作らねばならないことも事実。場所の選び方、住民の納得のさせ方が下手だったかも知れないが、あそこまで作ったのだから、何か前向きの方に解決策を見出すことは出来ないのだろうか。もっとも今度の騒動の遠因は、美濃部東京都知事にあるという人がいる。羽田の拡

張計画が出たときに、美濃部知事が東京湾の埋め立てに反対したため、拡張が出来ず、成田に持って行かざるを得なかったのだ、と言う。

燃料の輸送にしたって、あのままでは何時どう言つことになるか判らない。列車妨害でもしようと思つたら、何時でも出来る。沿線を全部守るなんて出来る相談ではない。出来たとしてもこれにかける金と労力のバカらしいこと。開港しても何十万人という人が毎日出入りするようになったらどうするのだらう。何時どんな妨害が入るか判らない。外国の航空会社が成田離れをしているというが判るような気がする。

連中の考え方の根底には、やはり甘えがあると思う。いくらひどいことをしても、それだけの報復が返つて来ない。捕まれば殴られるかも知れないが、牢屋に入れられるだけ。又、いつか出て来られる、という安易な考えがあるのではないか。相手を殺そうとするのなら、こちらも命がけということにしなければアンフェアというものだ。

ハイジャックの連中にして然り。ハイジャックの現行犯はその場で射殺すべし。捕まえば、又、その連中を釈放しろ、と言ってハイジャックが起こる。一般の市民は迷

惑この上ない。

もつとも連中が考えていることが西独の赤軍派が考えていることと同じなら立派。西独の赤軍派は、こうした妨害行為やテロ行為をやることにより、官憲の締め付けを誘発し、全体主義体制を強くさせ、一般大衆の反発を呼び起こすことを目的にしていると言ふ。今度のことで小生にこんなことを書かせたり、政府を騒がして規制を厳しくさせれば思ふ壺なのかも知れないし、逆に官憲側が、態とスキを作つて酷いことをさせ、世論を引きつけて、破壊防止法、更には治安維持的なものの適用をし易くする作戦に出たのかも知れない。この辺になると、どちらの作戦が勝っているのか判らない。

成田空港で誰が見ても失敗なのはアクセス。電車にしる、バスにしる、どうにも不便。遠いのみならず、外国人なんか途方に暮れる人が出て来るのではないだろうか。専用の交通機関を早急に作る必要がある。

なんて、出発するまでに考えることが多かつたが、四月九日十一時四十分日航のDC八で発つた。羽田空港は計画を急に逆戻しした割には混乱も無く、出国手続きもスムー

スで機は十分ほどの遅れで離陸した。高度九五〇〇メートル、スピード毎時七七〇キロ、ホンコンまで四時間足らずの旅である。鹿児島の上を飛び、桜島が地図の通りに見えた。日本の国と言つのは、隅から隅まで人間の手の行き届いた国だと思つた。

十年ひと昔とは良く言つたものだと思う。時間は都市を変えるものである。変わったと聞いてはいたが、この十年の香港の変わりようには驚かされた。

十二年前の丁度今頃、初めて外国の土を踏んだのが台湾、次いで香港だつた。香港に着いての第一印象は、日本とチットも変わらないではないか、ということだつた。空港の雑踏、車の波、街を行く東洋人、日本より一寸ケバケバしくて汚いが、日本のどこにもありそうな街並。漢字の看板。商業地のビル街も当時の丸の内みたいな古いビルが多く、新しいものではヒルトン・ホテルとかマンダリン・ホテルが目立つ位だつた。

今回まず驚いたのは高層ビルのラッシュ。空港のある九竜地区にも二〇階建て、三〇階建て級のビルが林立し、飛行機はその間を縫うようにして降りて行く。これらのビルはアパートが主、国（香港政庁）が作った公団住宅も多い。昔は本当の田舎だつた九竜

半島の奥の方までこうしたビルが新築されている。島の側もビクトリア・ピークの裏側の方まで立派なアパートが林立し、こちらの方は高級住宅地の部類に入る。いわゆる高級マンションがある。

人口は当時の四百万人弱が四百五十万人ほどになった程度とのことだから大して変わりはない。昔、山肌に掘って立て小屋を建てて住んでいた人たち、公団のアパートの一軒分の部屋を四つにも五つにも区切って、狭くて暑くて暗いところに住んでいた人たちが少しずつ人間らしい生活が出来るようになって来たということのようだ。もっとも生活水準が特に上がったと言うことではなく、高級マンションに入れる人は限られた一握りの人たちと外国人とのことだった。

島と半島を結ぶ交通は、当時はフェリー・ボートが唯一の手段だった。渡る車が多いので、島側の事務所から半島側の空港へ行くために、船待ちや乗降の時間を入れると一時間以上見ていたものだったが、今は立派な海底トンネルが出来ている。途中の混雑は仕方がないが、通行料は片道五香港ドルで二・三分で海を渡れる。空港までの時間も三

十分足らずになった。僕が住んでいたのは、島側のコーズウェイ・ベイという地域だったが、半島側で一寸飲みすぎて最終フェリーに遅れると、ワラワラと称する小さな手漕ぎの木船を探すしか手がない。どついう訳か船頭は子供を背負ったオバサンが多く、ホテッタ頬を海風に当てて、ゆらゆらこ帰還ということになったものだが、今はそんな心配はない。それだけ情緒が薄れたと言うことになる。

商業地のビルも立派になった。僕のいた当時がビル・ラッシュのはじまりで、そこら中で工事をしていた。地盤が固く地震がないせいだろう、ずい分いい加減な建て方をしていた。鉄骨作りのビルなんてなく、一階から鉄筋入りのコンクリートを積んで行く。つなぎはヒョロヒョロした直径せいぜい一センチの針金。これで五階や六階建てのビルが出来て行く。ひと揺れ来たら倒れそうで怖いと思っていたのだが、今や三〇階、四〇階建て級のビルが林立している。一番高いのがコンノート・センターという奴で、四〇数階の丸い窓の近代的感覚のビルである。まさかこれが鉄筋だけの建物ではあるまいが、客を訪ねて入って行くのが少々気味が悪かった。ホテルにしてもフラマーなんて

凄いのがあるし、エクセルシオアなんて新しいのもあった。いずれも当時は蔭も形もなかったもの。日本からの観光客も相変わらず多いらしい。

街を一番変えたのは埋め立てだろう。空港からホテルへ向かう途中、当時からいる事務所の運転手に、こんな道、以前はなかったね。と聞くと、ここは海だった、と言う。埋立地が島の側からずっと張り出していて、そこにもうビルが建っている。コンノー・センター・ビルも埋立地の中。僕の住んでいたアパートの前も当時は海で、ワラワラの発着所だったが、今は緑の公園だった。

車の混雑は普通りだった。以前はタクシーが殆んどベンツとヒルマンのディゼル車（いずれも中古をどこかから持って来ていたらしい）だったが、今や殆んどがニッサン。これも古いディゼル車で新しい車は見かけなかった。ここにも日本の車の輸出の洪水が行っているのだな、と思った。

当時、三軒しかなかった日本料理屋も十五軒からあると言う。今の日本在留人が六〇〇〇人とか。世界各地を廻って、日本人四〇〇〇人から五〇〇〇人に一軒位の割で日本料理

屋がある、という僕の推論が、ここでも当たっていることを発見する。最近では日本式のナイトクラブがある。以前は夜出歩くところと言ったら、ボール・ルームというダンスホールで、ここでは酒は出ず、カボチャの種の干したのを齧りながら中国のお茶を飲んでダンスをする位。こちらのナイトクラブは同伴でないとならないから独り者には縁がなく、お客を案内する時位しか行かなかった。今や日本式にホステスがいて酒が飲めるいわゆるキャバレーがある。中国娘のホステスが酒の相手をする。次ぎに立ち寄ったシンガポールにもその式のクラブがあつてママが日本人、ホステスは中国人を中心とする現地人で彼女らがタドタドしい日本語で相手をし、カラオケに合わせて日本語の歌を歌う。見ると夫々のノートにローマ字で日本語の歌詞がビッシリ書いてある。あの勤めも楽ではない。それにしても世界各地に日本料理屋と日本式ナイトクラブ。クラブの方に外国人が来ているケースは少ない。日本人も世界中に出て行ったものだ、とも言えるし、外へ出て行つても日本人と言つのはどうしてもそうした場所でしか気が許せず、日本人同士集まつてゴソゴソやつているしかないのかしら、と一寸淋しい思いもする。

諸兄ご存知の三鷹の松本家のご長男、興一君（学生時代の大野木兄が家庭教師をしてきたから飯の種ということになるが、それより、順子夫人との結びの神といった方が良いだらう。我々が出入りしている頃は中学生だったと思うが）が三井軽金属の主席駐在員で頑張っている。夜十時半にホテルに来て貰い、会って話したが、まるで三鷹の辺りをヨタツて歩いているのと全く同じ感覚で、別に気張りもせず肩も張らず悠々と香港の町を歩いているのが何とも頼もしかった。大野木兄ご丹精の英語の実力を見せて貰う機会はなかったが、その代わりホテルのバーでひとしきり飲んだ後、件の日本式クラブに連れて行ってもらったら、その場にピッタリの英語混じりの広東語ですっかり楽しませてくれた。

香港と言う街。ご存知のように阿片戦争の結果、英国が中国から割譲を受けた街である。一〇〇〇平方キロある今の香港の中、香港島と半島の一部、合計九〇平方キロは永久割譲だが、半島側の残りの大部分は一八九八年から九十九年間借りた形になっていて、租借の期限は一九九七年までと言うから、あと二〇年足らずで中国に返さねばならない。

返す分が今の香港の九〇%を占めているし、空港や貯水池なんかも返す方の地域に入っているから、このまま返してしまつては香港の機能は全く失われてしまふ。なのにそんな不安定さは全く見せない繁栄であり盛んな投資である。埋立地、海底トンネル、建物。今は地下鉄を通そうと掘り返している。どうやら英国と中国の間に暗黙の約束があるらしい、という噂がある。このところ英国要人の中国訪問が続いているが、この中で、期限が来ても返還しないままにしておこう、という話し合いが出来上がっているのだ、と言う。たしかに今の型の香港は中国本土にとつても貴重な存在だと思う。香港を通じて本土に流れ込む外貨は馬鹿にならない筈。社会主義国でありながら出先を香港に作り、資本主義国への窓口にしてあまり無理なく付き合ひをしている。主義は異なつても中国人と言つのは天性の商売人。やり方も上手いと思う。今更あんな狭い土地を返して貰つても仕方がないだろう。不動産はそのまま手に入るだろうが、今の香港を支えている人たちは皆国外に逃げてしまふだろう。現に、今やこの階層の人たちの殆んどは、カナダや英国を中心に国外の落ち着き先を定め、財産を移し、身柄だけ香港に残して経済活動

を続けている。そうなれば残るのは貧民だけ。工場も残るが経営者のいない建物で何が出来るのか。そう考えれば、このままソツとしておく方が中国本土の人々にとつても得策と言うことになりそうだ。

会議の前後、一日半ほど時間をとつて客廻りをした。色んな理由で現在は仕事上の付き合いのない人たちもいるが、懐かしくて訪ねて行くと十年振りというのに温かく迎えてくれる。一晩空けてくれ、と言われる。夜が駄目なら昼でも、と言つ。この辺は全く東洋人のスタイルだと思う。仕事の関係は切れても人間同士の付き合いは変わらない。十二年振りの香港で、都市の外観は変わつても、変わらないのは人の心が、と思つたことだつた。

(昭和五十三年六月四日)

アメリカ

私の見たアメリカ

九月十日から十月五日までアメリカを一回りして来ました。シカゴからニューヨーク、フィラデルフィア、ウィルミントン、タルサ、セントルイス、ヒューストン、サンフランシスコと廻り、ロスアンゼルスを最後に帰って来ました。仕事探しにアガキ廻ったのですが、さしたる成果もなく、やたらと移動と会う人の多い疲れる旅行でした。で、つまらない仕事の話は抜きにして、初めてのアメリカの見たまま、感じたままを。

一・広い国

とにかく広いのです。空から見ても見渡す限り平野が広がっています。飛行場も街からかなり離れたところにあつて、何マイルも人家の見えない道を走り、ダウンタウンに着きます。これなら飛行機の騒音なんて心配することもないでしょう。ですから、空港

の敷地もゆつたり取つてあります。特にヒューストンの空港なんて、今のところはローカルの空港ですが、世界一の好きなテキサス人のことです。将来はここがアメリカの中心になるのだから、と拡張に備えて敷地はタツプリ。建物も今の三倍には出来るよ
うな計画がもう出来ているのだそうです。ですから飛行機なんてソコ、ココにパラパラ
とある感じ。ジャンボ機も小さく見えます。羽田空港も成田が出来て少しは空いて来て
います。飛行機同士が翼を寄せ合い、その間を色々な種類の車がコマネズミのように
走り回る日本の空港の雰囲気とは全く違つて何か悠々としています。

道の広いこと。街の中を走つていて高架のスピード・ウェイでも、大体片道四車線。
一寸郊外に出るとその外側に更に二車線ずつ加わつたりします。道路沿いには家なんて
なくて、側道に入つて遠くの方に見える位。これだけ土地が広ければこれくらい広い道
を作つたつて痛くも痒くもないのでしょう。一平方メートルの土地を買収するのに幾ら
かかつて、一メートルの道を作るのに何百万円かかる、なんて頭を痛めている日本の現
実とは比べものになりません。

オクラホマでレンタカーを借りて田舎町にある客先まで行ったのですが、四〇マイル以上、北に真っ直ぐの道を走りました。こんな道では車のスピードを六〇マイルにセツトしておけば、アクセルは踏む必要がなくハンドルだけ押さえれば良いのです。車の事故の原因は居眠りが多いと聞きましたが、これでは居眠りもしたくなるうというものです。それにしても見渡す限り地平線の彼方まで真っ直ぐに伸びている道は壮観でした。

どこへ行っても街自体が広いので、車がないと誠に不便です。客先を訪問するにも、一寸食事ということになっても、ハイウェイを何マイルも走ることにあります。それも密集した街並だけではなく、まるで隣の町にでも行くみたいに緑の中を走る感じになります。ですから、街自体が車の使い易いように出来ていて、街の中心にも駐車場が沢山あります。特に広いヒューストンやロスアンゼルスなんて、ビルの窓から見下ろすと、一寸大袈裟に言えば、町の半分以上が駐車場です。勿論、ビルの地下には駐車場がありますが、入り切れない車のために青天井の駐車場がタツプり取ってあるのです。これも

ヒューストンの話ですが、アストロ・ドームという屋根つきの大野球場（フットボールも出来るそうです）があります。収容人員は五万人とのことですが、この周りは全部広大な駐車場で五万台分あるのだそうです。人の集まるところへは車では行かないように、公共交通機関を使いましょう、なんて常識はないのです。

この国の人は、土地の広さなんて考えたことがないのではないかしら。国が狭いが故に何だかんだと制限を受け、セセコマしく生きている日本人が可哀想になります。

二・能率の良い国

空港の入国審査場はこの国でもそうですが、アメリカの場合も受付窓口がアメリカ市民用と外国人用に分かれています。どうしても自国民の検査の方が早いので、その窓口の列はすぐなくなってしまうのですが、外国人用の窓口に残っているのを見ると、済んだ窓口の係官が、さあ、誰でも良いからこちらへいらっしゃい、と言って、外国人も受け付けてくれます。シカゴで入国したのですが、こう言う風景を見て、つまらない

ことですが感心しました。欧州はずい分廻りましたが、ついぞこう言った経験はしなかったからです。特に英国の場合、窓口が英国人、英連邦人、アイルランド人、他国人と分かれています。自分の受け持ちの分が済むと、他の窓口にどんなに人が待っていてようとサツサと引っ込んでしまうのです。他国人の窓口には東洋人やアフリカ人と一緒に並ばせられたアメリカ人が小言を言っているのを良く聞いたものです。アメリカの場合は係官の一人一人に少しでも早く捌こうという精神が残っているのだからと思います。アメリカの国内便は分刻みで運航されている感じですが、到着後三十分以内で出発するところが多いのです。この間に乗降客を捌き、荷物の積み下ろしをやるのですが、この手際が実に鮮やかなのです。飛行機が止まると同時にボーディング・プラットフォームが動き出し、出口にピタリと付けられると人がドンドン降り、最後の人が出ると入れ替わりに待合室の人が乗り込んで行きます。荷物用の車が二・三台、一度に着いて作業にかかるとは、大きな如何にも強そうな人のやる仕事の早いこと。

食事も能率主体のようです。ハンバーガー・シヨップの多いこと。昼なんか立ち食い

に近い状態でパンを齧ってお終い、というケースが多いようです。私も少しあやかろつ、とニューヨークにいる間はホテルでの朝食を止めて一時間ほど早く出て、行きがけに牛乳とコーヒーとサンドイッチかドーナツを買って事務所に入り、朝食を食べながら前日のレポート作りをするのを常としていました。食事は実質主体のようで、楽しむと言えるほど美味しいものはないみたいです。コーヒー・ブレークなんてものはなく、コーヒーが飲みたければ自分で自動販売機で買って来て、仕事をしながら飲んでいきます。事務所ではタバコとコーヒーを禁じている会社もあるそうで、十時と三時になると小母さん方が車を引いて夫々のデスクのところへ来て紅茶とビスケットを配って廻るロンドンのスタイルとは大違いです。

ニューヨークでは大きな会社がニューヨーク離れをしています。税金の関係とのことです。ニューヨークを一寸出た郊外に広い敷地を取ってゆったりした事務所が作られています。メジャーオイルの一つテキサコもその一つですが、行ってみますと公園みたいな広いきれいな敷地に三階建ての建物です。中庭があり階段状になった屋上にも庭が

作られていて、全員個室の事務所の全ての窓から緑が見えるように設計されています。広すぎて不便かと思ったら、廊下を無人のカートが走っています。書類運搬用のカートだそうで、コンピューターで運転され、一日中走り回っているとのこと。届けたい先のボタンを押して書類を乗せるとその事務所の前まで行き、ピッピッと、スターウォーズのR2D2みたいな音を出して書類の到着を知らせる仕組みです。これなら病気もしなければ文句も言わず、コーヒー・ブレイクもなくて良いとの事でした。

いつだったか岡崎が、アメリカの秘書の有能さを感じていたことがありましたが、全くその通りだと思いました。少しでも生産性を上げようとするこつと言う精神が残っている限り、アメリカの経済はまだまだ大丈夫なのではないか、と思ったことでした。

三・可哀想な国

アメリカと言う国は実に種々雑多な人種の混じり合った国です。黒人は全国的ですが、東部だとプエルトリコ人、南部はメキシコ人インディアン、西岸は中国系、韓国系、日

系等々。そしてどうやらこの内、有色人種たちが社会の下層階級に位置していて、種々の犯罪の温床になっていているらしいのです。白人もアル中や麻薬中毒で身を持ち崩した人たちがこつした下層階級の仲間入りをするようです。

どんな小さな町へ行っても、あの地域には足を入れない方が良い、暗くなったら外歩きはしないこと、と注意されます。ニューヨークが危ないところ、ということは聞いていたので、こんな注意を受けても驚きませんでした。ある晩、ブロードウェイ・ミュージカルを見た後、危ないと言われる地区を抜けて一人で歩いて帰ってきましたが、大したことはありませんでした。欧州の場合は危ないと言っても、もっぱらスリ、カツパライ、置き引きの類ですから、注意さえしていれば良いのですが、アメリカの方はピストルやナイフで「命か、金か」と暴力で来るとのことですから、油断できません。ハーレムはバスで見て回りましたが、思ったほど汚くありませんでした。

ウィルミントンというデラウェア州の小さな田舎町で、まだ明るい夕方、町を歩いていたらお巡りさんに「そっちの方は行かない方が良いよ」「自分なら行かないよ」なん

て注意され、こんな静かな平和そうな町でもそんなのか、とビックリするとともに自分の町を自由に安全に歩けないなんて可哀想な国だと思いました。日本に来る外国人はこんなこと言われて怖い思いをすることはないでしょう。私の行く一寸前に「東京の警察の一日」という六〇分もののテレビ番組が放映されたそうで、日本人の警察に対する態度、警察の規律の良さ、犯罪率の低さには感心した、と多くの人が言っていました。

ケネディ大統領の頃から、こうした人種問題をなくすために同一化政策が取られていて、カーター政権になってこの政策が更に進められているとの事です。異なった人種でも子供の頃から一緒に育てれば大きくなっても人種偏見がなくなるだろう、ということでは白人も黒人も強制的に一緒にの学校で教育しよう、という動きがあります。今でも別に別々の学校に入ることになっているわけではないのですが、どうしても同一の人種は同一の地域に住むことになるので、自然と白人学校、黒人学校が出来るとのこと。これを混ぜこぜにしようとすると、スクールバスをあちらこちらに走らせて子供を拾い集めねばならないそうです。どんな人種も混ぜり合って仲良くせねばならない、ということは、

理屈では良く判つていても現実には中々そう理想どおりには行かないようです。こうして育てられ、人種的に全く抵抗のなくなつた白人の娘が、ある日、黒人の若者を連れてきて、この人と結婚する、と言つて来たときのことを考えると、白人の親としてはやはり離して育てたいのが人情というものでしょう。

人種差別をなくそう、少数民族にも機会を与えよう、ということとで企業の中にもある一定の割合のマイノリティを入れねばならない、ということとで不自然な形の採用がなされたり、管理者もその割合にせねばならない、ということとで職場に不平・不満が残つたり、単一民族の我々には中々理解でき難い悩みがあるようです。

四・愛すべき人達

アメリカ人と言うのは本当に「世界一」「アメリカ一」の好きな人たちだと思います。一寸した町のホテルにはその町の案内書が置いてありますが、その案内書には大抵、この州で世界一のもの、この町で世界一ものは、というリストが作られていて実につま

らないものまで数え上げて自慢の種にしています。橋があれば、古さや長さは勿論、この形では一番古い、とか、この材料を使った橋としては一番大きい、とか。「最初」「一番」に類するものがスラリと並べられています。

建物ではニューヨークのエンパイア・ステート・ビルが世界一高いのかと思つていましたが、それより少しずつ高いのが出来て行つて、今やもう四番目とのこと。でも流石に風格のある立派な建物です。今、一番高いビルはシカゴにあるシアーズ・ローバックスという会社のシアーズ・タワーです。今回はシカゴへも行きましたので、一〇三階という頂上まで登ってみました。本当は一〇階、四四三メートルというのが頂上だそうですが、外観はなんとなく暗い感じであまり良い印象はありません。二番目がニューヨークのワールド・トレード・センター。マンハッタン島の南の端に二本並んで立っています。何でも五本まで出来る計画とか。完成したらさぞ壮観でしょう。今でも自由の女神への行き帰りに海の側から見ると中々立派です。三番目はまたシカゴに戻つてジョン・ハンコック・ビル。ジョン・ハンコックというのはアメリカの独立宣言書に最初に署名

をした人の名前ですが、この人も世界一の好きな人だったらしく、何でも特大のサインをしたんだそうです。それ以来、大きく書いてくれ、というのを、ジョン・ハンコック流に願います、と言つと通じるとのこと。三菱商事をはじめ日本系の会社が沢山入っているビルですが、上が少し細くなっている変な形のビルで色もこげ茶か灰色。暗い雰囲気であり好きになれません。

ミズーリー州のセント・ルイスと言つ町へ行つたら「ゲート・ウェイ」という馬鹿でかい金属製のアーチがありました。高さ二〇〇メートル以上とか。西部開拓時代の西部への入り口と言つ意味で作られたとのことでしたが、よくもあんな役にも立たぬ馬鹿なものを作つたものだ、と思いました。これも世界一のアーチであることには間違いなく、大自慢の種になるでしょう。

デラウェアと言つ州はニューヨークに近い小さな州ですが、独立宣言に最初にサインしたのがご自慢です。宣言の地、フィラデルフィアに一番近かつたから一番乗りが出来たでしょうが、このため州の愛称がファースト・ステート。

一番の傑作はテキサス人で、テキサス人は世界一好きのアメリカ人の中でも、又特に世界一が好きなようです。テキサスは大きい、広いと言う自慢に始まって、色々笑い話みたいな自慢話があるのですが、とにかくテキサス人（テキサン）が、何でもかんでも世界一、ということにならないと気が済まないそうで、大体、アメリカのことをアメリカ合衆国（United States of America）なんて呼ぶこと自体間違いだ、という話があるほどなんだそうです。テキサス人に言わせると、これでは偉大なテキサス州と他の州とが同列に並んでしまうということでお気に召さず、*The Great Texas and Other States* という呼び名の方が正しいんだ、なんてことになります。そう言えば、中南部地方へ行くとテンガロンハットにテキサン・ブーツ姿のテキサス人（丁度、テレビに出てくる警部マックロードのスタイル）が肩をそびやかして歩いていて、それがいかにも田舎の人們が、オラが国サが世界一、と言っているスタイルに見え、何となく微笑ましく、愛すべき人たちだな、という気がします。

五・アマミューズメント

昔から映画化されたブロードウェイ・ミュージカルはずい分沢山観ています。「昼も夜も」「アーノ・ヤ銃を取れ」「オクラホマ」「ショウほど素敵な商売はない」「南太平洋」「ウエストサイド物語」「サウンド・オブ・ミュージック」等々。最近のは流石にあまり観ていません。「マイ・フェア・レディ」「ハロー・ドーリー」「キャバレー」等は上演当時に、観に行きたいな、と思いつつ行く機会のなかったものです。「マイ・フェア・レディ」と「ハロー・ドーリー」はつい最近テレビでやっていたので後半部分だけ観ました。ロンドンではロングランになっていた「ジーザスクライスト・スーパースター」の舞台を観ました。これもブロードウェイ・ミュージカルでした。今回は本場の舞台を観るチャンスを作ろうと思っていたのですが、一晩、付き合いを逃げられる日が出来ましたので、行き当たりバッタリで「ア・コーラスライン」というミュージカルを観てきました。「ウィズ」「オズの魔法使い」の現代版もやっていますが、これは観られませんでした。台詞が多くて筋が複雑なのは残念ながらついていくのが困難なのです

が（大分前に「オー・カルカタ」を観たときは、スラングやら洒落やらが全く理解できず、大笑いしている人たちの真ん中で情けない思いをしました。有名な「マイ・フェア・レディ」も、あれは言葉の遊びのミュージカルですから余程難しかったそうです）、今度見た「ア・コーラスライン」はストーリーも簡単で、歌とダンスが主体。すっかり好きになり、楽しんできました。

ブロードウェイのレコード屋でミュージカルのレコードを少し仕入れて来ました。ついでに何時だったか書いたお気に入り「雨に唄えば」のサウンド・トラック版を探してみました。これはハリウッド・ミュージカルだったせいか、あまり古かったせいか見つかりませんでした。ところがロス・アンゼルスへ行つて、ハリウッド、ビバリーヒルズを案内して貰っているとき、車での通りすぎりに、運転手が、ここは世界で一番大きいレコード屋だ、と言つので車を止めて貰つて探してみたら、あった、あった。買つて来て、ご機嫌で聴いています。そう言えば、ハリウッドではアカデミー賞の授賞式が行われるシド・ゴーマン劇場にも連れて行つて貰いました。玄関前のコンクリートの広

場に有名な俳優や女優の手型、足型（靴型）がありますが、「雨に唄えば」のデビー・レイノルズの手型を見つけて写真を撮って来ました。

セント・ルイスでは空港から乗ったバスの運転手の爺さんが大変な野球気遣いで、今夜はどうしてもカージナルスのゲームを見ろ、と勧めてくれたので散々迷ったのですが、結局ミシシッピのショウ・ボートの方に行きました。セント・ルイスは西部への入り口と言われている街です。昔、こんな大陸の真ん中で、それこそ何もない荒地を開拓していた時代の人が、年に何度かミシシッピ河を登ってくるショウ・ボートをどんなに楽しみにしていたか、ああいうところへ実際に行ってみると、その気持が判るような気がします。今でも、昔の船がそのまま残っていて、その船の上で食事を出してショウを見せてくれるのです。決して派手ではない素朴なショウで当時の雰囲気浸れます。

ロス・アンゼルスでは上手く日曜日を挟むことが出来たので、デイズニーランドへ行きました。セドルですから一五〇〇円足らず払えば、入場券に十一種類の乗物券のついたセットが買えます。これでタッピー半日楽しめますから安いものです。大人も子供も

楽しめる、という宣伝文句は本当です。四時間近く歩いていて、全く飽きさせないのは流石でした。一人で行ったのが如何にも残念。その内、子供達を行かせてやりたい、と思いました。キッコーマンの洒落た広告を発見し、流石世界のキッコーマン、と感心させられたことでした。

心残りは結局本場の野球が見られなかったこと。何時でも行ける、と思っている内にととうチャンスが逸してしまいました。ニューヨークのヤンキー・スタジアム、セント・ルイスのカージナルス・スタジアム、ヒューストンのアストロ・ドーム等の野球場は、いずれも外観を見ただけで中身は次回廻し、と言うことになりました。

長くなりましたが、アメリカ見聞記を終わります。最初の訪米で駆け歩きだったので、表面をなでただけの感じ。杉山兄の中国のように深いところまでは書けませんでした。この辺は諸先輩方のご意見を賜りたいところです。

(昭和五十四年二月二十七日)

バクチの街ラス・ベガス

八月二十一日発、九月二日帰国で米西岸へ行って来ました。今回はエンジニアを一人連れて、やはり仕事探し、と言うより仕事を取りに出て行ったのです。

ロス・アンゼルスでの仕事が週末に一段落し、月曜日の客の結果待ち、と言うことになりました。(週末をフリーにするため、若干、仕組んだきらいはありましたが)週末が空いたので良い機会。デイズニールランドは何度か行っているので今回はラス・ベガスまで足を伸ばしてみよう、と思いました。日本人旅行者相手の旅行代理店に頼むと容易なのですが値段が高いので、今回は自分でやってみることにしました。新聞の広告を見て、手当たり次第に目ぼしいところに電話を掛けてみることにしました。土曜の朝発、日曜の夕方帰着、おまけにグランド・キャニオン行きがついていると言う、願ってもないのが見つかったのでこれにしました。ジャルパック辺りで募集しているのと比べると値段が約半額です。

日本人二世か三世かの、主としてオバサン達の団体が賭博旅行に行くのにクツツいて

行こう、と言う訳。ロス・アンゼルスからラス・ベガスまでは四五〇キロ程あり、飛行機も飛んでいます。今回は安目の直球ですからバス利用です。

アメリカ西岸も海に近い方は緑がきれいで、人口密度も高いのですが、少し内陸に入ると砂漠と言うか灌木の生えた土漠です。この中を真っ直ぐに伸びる道を、かなりボロガタのバスで一〇〇キロ以上のスピードで四時間半ほど走ると忽然と高いビル街が現れます。砂漠の真ん中にバクチだけの目的で出来た、と言われる街、ラス・ベガスに到着です。

往路はもっぱら寝ていたのですが、フと目を覚ますと砂漠のところどころに水溜りが見えました。塵気楼かしらん、とよく見るけどやはり水溜りなのです。不思議なこともあるものだと考えてみたら、少し前にネバダ州で異常に雨が降って大水が出た、と言うニュースがあつたのを思い出しました。ラス・ベガスも大分やられたらしいのです。とにかく雨なんかめつたに降らないところですから、水に対する備えが出来ていなくて、一寸した窪地に水が溜まるとこれがはけ切れない、ということらしいのです。

米国がいわゆる合衆国で、州によって色々法律が異なることは知られているところですが、ネバダ州が賭博を禁止していないところに目をつけ、この砂漠の真ん中に賭博目的の街を作ったと言う訳、そしてここに全米はおろか世界中から人が集まって来ることになったと言う訳です。

着いて直ぐ、日中はまずグランド・キャニオンです。博打組と別れ、日本人のみ六人が参加することになりました。若いアンチャンの運転するワゴンが迎えに来て空港に連れて行かれ、待っているとパイロットのオジサンが出て来て一人一人に体重を聞きます。どんな飛行機に乗せてくれるのか、と心配していたら一〇人乗り位の双発のセスナ機。単発だったら心細いな、と思っていたのでホッとしました。体重のバランスを取って、あなたはこちら、あなたはそちら、と席を指定されて、ベルトだけ締めたら、行くよつ、と言う調子でわけなく飛び立つのです。いとも軽々、という形容がピッタリ。私はこれだけ飛行機に乗っていないながら、未だに飛行機が飛ぶのが信じられません。ジャンボ・ジェット機なんてあんなに大きくて重いものが空を飛ぶなんて。特に最近、フィルムかな

んかのコマーシャルでデップリ肥った飛行機が小さな翼で飛んでいます。あんなのなんか全く理解が出来ません。ですから落ちて当たり前。自分が乗った飛行機が落ちる時は、アアこれが当たり前なんだ、と思うのではないか、と思っっている程です。ある意味で乗ったときから諦めていますから、乗るのが怖いと思っただことはありません。ところがこの小型機に乗ると、いわゆる飛んでいると言っ感覚が、身をもって判るのです。プロペラ機ですから翼も広いし、機内もこじんまりしていて、おまけに体重なんか量られて乗っていると言っ意識があるので、空気に浮いているという感じがシツクリ来るのでしよう。パイロットはまるで車を運転するような軽い調子。くわえタバコこそしませんが、それこそ鼻歌交じりで軽々楽々と機を操っていました。要所に来ると下が見易いように機を傾けてくれたりするのですが、これがスリルと言っより楽々で当たり前、と言っ感じで不安感はありません。天気が良かったせいもありますが、揺れも少なく同乗のご婦人たちも平気みたいでした。

飛び立つとすぐミード湖の上に出ます。これはフーバー大統領の時代にコロラド川を

塞き止めて作られたフーバー・ダムによって出来た人口湖です。洪水防止と電力用に作られたダムとのことですが、何せ周囲が八五〇キロと言いますから、やはりアメリカは大きな国です。上から見ても、これが人口湖だなんて信じられません。

ミード湖を過ぎると、機はグツと機首を下げ崖つ淵をスレスレにかすめて谷の間に入つて行きます。いよいよグランド・キャニオンです。グランド・キャニオン、いわゆる大峡谷、の描写は写真に任せることにしましょう。とにかくコロラド川が何千年もかけて作った自然の驚異。深いところで絶壁の高さが一六〇〇メートルあると言います。百聞は一見に如かず、としか言いようがありません。上の台地の方は木も少なくて土漠ですが、谷の下に緑があつてインディアンの住む部落があるのが面白いと思ひました。

一時間ほどの飛行で夕方までにラス・ベガスに戻りました。

夜は、愈々バクチです。よくぞこんな街が存在するな、というのが率直な感想。街の中心はホテルと賭博場がギッシリです。ホテルも一階は全部バクチ場。一寸街を外れるとホテルが点々としていますが、この地域をストリップと言います。これらのホテルも

一階は全部賭博場、奥か地下にショーを見せる劇場がついているのが普通の形です。これらのバクチ場が、又どこへ行つても満員なのが驚きです。スロットル・マシンが主なのですが、空いている台を探すのに苦労するほど。これが二十四時間、一年三六五日無休なのだそうです。私たちも午前三時近くまで遊んで、翌朝九時前に又降りて出てみましたが、人出は全く変わらないのです。どこからこれだけの人が出て来るのか。

ヨーロッパの賭博場と異なつて面白いと思つたのは、陽気で騒々しいこと。英国やモンテカルロ、ニースなんかで一吋したバクチ場に行くと、パスポートで身分をハッキリさせ、形だけでも会員にならないと入れてくれません。ネクタイに上着でチャンとした格好をしていないとダメ。又、雰囲気が誠に静かで、大声を出す人なんかいません。ルーレットとカードが主体ですが、ルーレットで大当たりしても、つまらなそうな顔をして指を一吋立てて、自分が当たつたということを静かに知らせるような、そんな態度をとるのが粹とされています。ですから、バクチ場全体がシーンとしていて、ルーレットの廻る音がカラカラと聞こえています。それに引き換え、ラス・ベガスの賑やかなこと。

まず、あのスロットル・マシンと言うのがやたらとうるさいのです。トランプやルーレット、バカラも勿論ありますが、主役はこのマシン。ガシャン・ガシャンと言うレバーを引き下ろす音が物凄いのです。力を入れれば大当たりが出る訳でもないのに、興が乗ってくると、このレバーを力任せに引き下ろしますから、台が壊れんばかり。やたらとうるさくなります。大当たりするとリーンという大きなベルの音。コインの落ちるガチャガチャと言う音。加えて、当たったオバチャン達が喜んでギャーギャー騒ぎますから、その騒々しさと言ったらありません。ルーレットにしたって、大当たりすると大喜びで大騒ぎ、と言うことになります。勿論、服装なんて目茶苦茶。シヨート・パントにタンク・トップなんてヘッチャラです。どうかするとゴムぞうりなんてスタイルでワイワイ陽気にやっています。いかにもアメリカ的だと思います。

ここは又、シヨアの街。夫々のホテルにはナイトクラブがあつて、毎晩シヨアがあります。私はバクチは強くないし、左程好きでもないのに、シヨアを主体にすることにしました。「雨に唄えば」の女優、デビィ・レイノルズのシヨアもやっていました。三十

年前、二十才そこそこだったデビイも、もう五十過ぎ、スター・ウォーズのレイア姫役のキャリー・フィッツシャーのお母さんだそうです。大分、迷ったのですが、近々日本に来るブロードウェイ・ミュージカルの「ソフィステイケートド・レイディース」をやっているのを発見し、これにしました。別に筋はなくて、デユク・エリントンのスタンダード・ナンバーを繋げたミュージカル・ショー。これなら別に言葉が判らなくても楽しめます。大分前から娘と約束して、切符を買ってあつたので、十一月に入ってから日本でやったのも観ました。本場のラス・ベガスで観たんだぞ、と少しばかり自尊心を満足させたことでした。

ショーが終つたのが一時過ぎ、外へ出ても全くの不夜城です。人通りと言い、車の流れと言い、日中と全く変わらないのに恐れ入ります。一旦ホテルに戻り、折角だから、と少しバクチをやることにしました。マシンは勝負が早くてもどうにも味気ありません。トランプのブラック・ジャックなら時間も掛かって楽しめます。二時間ほど遊んで、五〇〇ドル負けたでしょうか。翌朝発で帰るのですが、帰途ネバダ州とカリフォルニア

州の州境に、一軒賭博場があるのです。ここで一休みして最後のチャンスを楽しもうと言つ訳。ここでブラック・ジャックがついて、三〇ドルほど戻したので、あまり大きな被害に遭わずに帰つて来ました。

で、肝心の仕事の方は、翌月曜日の客の検討の結果が「吉」と出て受注に成功。アメリカ西岸の造船所で修理工事中に、その辺りの造船所が全部ストライキに入つてしまつて、どうにもならなくなつた船を日本まで持ってきて仕上げよう、という仕事。それでも五億円の仕事になるので、仕事不足の折柄、願つてもない仕事で、やや格好良く凱旋したことでした。

(昭和五十九年一月二日)

イタリア

イタリア紀行(ロンドン便り 三)

正月休みを利用してイタリアへ行つた。一週間ポツチの団体旅行で一国を云々するの

もおこがましいが、第一印象と言つか、偏見記と言つこと感じたことを書いてみたい。

一． 昔のイタリア人は偉かった

ポンペイへ行った。ポンペイは紀元前五〇〇年頃から栄えた街で、紀元七九年にベスビオ火山の噴火で、街全体が瞬時に七メートルの火山灰の下になってしまった街。すっかり忘れられていたが、二〇〇年程前に発見され、今その五分の三程掘り出されていると言う。街の運命もさることながら、掘り出されたものが二〇〇〇年前の純な姿で残っているのが貴重である。驚いたことにこの時代にガラスがある。青銅はふんだん。今でもそのまま使えそうな立派な装飾の施されたストーブがある。日用品でも銅製品が多い。鉄も馬車の轍に使われている。狭いけど歩道のついた碁盤目の道。大理石の柱に囲まれた大神殿等々。おまけに壁画が残されている。消えないような特殊な方法で描かれており、色もきれいに残っている。ルネッサンス時代に描かれたといってもおかしくないほどハッキリした現代的な絵である。風呂屋が凄い。蒸し風呂が中心だが水風呂、ぬる風

呂、熱風呂に分かれ、夫々一〇〇畳敷き位あろうか。これが男風呂と女風呂に分かれているから合計六室。驚いたのはボイラーからの蒸気を通すため壁が二重になっている。壁に細かい穴を空けて蒸気を吹き出したのだそうである。日本ならせいぜい弥生式土器とか言つて、土で作つた器を使い、裸で暮らしていた時代である。

ローマは歴史の街という。確かにどこを歩いても何かがある。ロンドンで二〇〇年、三〇〇年前の建物に驚いていたが、ここでは二〇〇〇年位前の建物が現に残っている。その一部を残してその上に新しい建物を継ぎ足したものがある。パンテオン、天井のドームの直径が四十四メートル。今でも世界一と言つ。これが完全に残っている。キリスト教徒迫害で有名なコロッセオ（コロシウム）は半分壊れているが、三階建てで五万人を収容したと言つから今の後楽園並ということになる。シーザーがいたのがやはり紀元前。あの頃からこれだけの都市に水道が完備している。自然の落差を利用した水道道があり、今でもこれを使つていふと言つ。スケールと言つるか考え方の長期性が違つと言つ感じがする。

クオ・バデイスで有名なアツピア街道を一寸出ると、キリスト教が禁じられていた頃の隠れキリシタンの巢窟、カタコンベがある。これは地下に作られた迷路と祭壇とお墓で、地下五層にもなるという。何年掛かって作ったかは判らぬが全長数百キロに及ぶと言う。これまた根気の良さとスケールの大きさに驚かされる。

ずっと下がってヴァチカンのセント・ピエトロ寺院。こちらは一五〇〇年ごろの話だから、さして古くはないが見事なもの。大きなドームの屋根の高さが一三〇メートルと言うから霞ヶ関ビル並。聖堂の長さが二〇〇メートル近く。院前の大広場が凄い。二五〇本程の、直径二メートル、高さ二〇メートルの柱に支えられた回廊に囲まれた石畳、一〇万人は入れると言う。とにかく計画の壮大なことに驚かされる。寺院の中の装飾も立派。レオナルド・ダ・ヴィンチ、ラファエロ、ミケランジェロを始めとする芸術家の彫刻、壁画で飾られている。

とにかく昔のイタリア人は偉かった、と言うことがつくづく判ります。もっとも歴史の割りに今のイタリアの建国は比較的新しく、一〇〇年程前に、バラバラになった都市

国家が統一されたばかりとのことです。昔のローマ人、フローレンス人やベネチア人が偉かったという方が正確なのでしょう。

二・秩序のない国

ナポリへ行く。下町風景ということで、アパート群のところへ連れて行ってくれる。アパートの窓から窓へ道を横切ってひもが張られ、洗濯物の満艦飾。この辺の道は洗濯物からしずくが落ちてくるので、天気の良い日でも傘がないと歩けないと言う。これも法律で禁止されているとのことだが、守ろうともしなければ守らせようともしないのだらう。

「ローマの休日」でオードリー・ヘップバーンがソフト・クリームを舐めながら現れるシーンで有名になったスペイン広場と言うところに長い階段があり、名所の一つになっているが、この階段が売り物屋で一杯になる。一寸した革製品、針金細工、食べ物等々、階段が歩けないほどだが、警官も何も言わずその間を縫って歩いている。

ローマにはそこら中に広場がある。大抵、真ん中にエジプト辺りから戦利品として持ち帰ったオベリスクカ立派な噴水があり、その周りが彫刻で飾られている。森鷗外が「即興詩人」の中で広小路と名付けたとか。この広場が車で一杯になる。違法駐車なのかどうか知らないが、その駐車方法が凄いと、言うより目茶苦茶。前に置いた人はどうやって出さんだろう、と思うくらい無秩序に並んでいる。

車の運転も物凄い。信号が割りと難しく見えたのは馴れのせいと思うが、信号のない交差点なんかで両方から車が全速で飛び込んでくる。キーツとブレーキを鳴らして止まった方が負け、間一髪のところですり抜けた方は意気揚々と走り去る。両方がストレスのところまで止まると睨み合いが始まる。睨み合いに負けた方はスゴスゴと引き下がり、勝った方はまだ相手を睨みつけながら走って行く、といった具合。そのせいかネズミみたいにチヨロチヨロと走っている車は殆んどどこかに傷があり、五体満足な車は少ない。ローマは泥棒の町といわれる。それも一寸した隙を狙うコソ泥的な奴が多いとのこと。物を落したり、忘れたりしたら絶対に出て来ないと考えた方が良くと言う。街を歩い

ていると旅行者風の人が道を聞いて来る。同病だ、と親しくなりスパゲティでも食べよう、とレストランに入るとこれがポン引きで、物凄い料金を請求されると言う。騙された方がそれでも気がつかず、信じ込ませる位のテクニクは持っているとのこと。それらしいのにアプローチされたが適当にあしらった。

請求書の計算違い、換算レートのゴマカシ等、油断していると何をされるかわからない。計算違い、と言うが決して自分の損するようには間違えないそうだからやはり意識的にやって、バテて元々、という感覚なのだろう。

釣銭のゴマカシ。こちらの人は引き算が下手なのか、足し算で釣銭を出す。例えば、五〇〇〇リラ出して三〇〇リラの買い物をする、まず二〇〇リラ出して、「五〇〇」と言い、次に五〇〇リラ出して「一〇〇〇」と言い、あと一〇〇〇リラ札を一枚つつ出して、「二〇〇〇、三〇〇〇、五〇〇〇」と言う釣銭の出し方をするが、旅行者で慣れていないと見るとトリックを使う。最初の二〇〇リラを出したところで暫く様子を見ている。客がそのままそれだけ持って行ってくれればしめたもので、四五〇〇リラの

丸儲けになる。催促すると全く悪びれず残りを出す。現にドライブインで、私の前に並んでいた日本人がこれをやられそうになったので、指摘してやった。

イタリアは革が良いと言っているので靴を買った。ポンドのトラベラス・チェックを出したら、店の若い女の子が平気な顔で物凄い換算レートを言う。新聞を持って来い、と言つて一緒に見て訂正させた。

どうも騙されたら騙された方が悪い、と言つ思想があり、人のものを盗んでもあまり罪の意識がないとのこと。旅行中、昼食のためバスを離れた時、窓が割られてカメラを盗まれた人がいたが、注意しないとやられるぞ、との先入観が強かつたせいか不思議なもの、周りの皆も、同情するより、置いて行つた方が悪い、という感じになった。

仕事の面でもイタリア人と商売する時は気を使う。放つて置くと何時までも金を払わない。催促されなければ払わなくても良い、と考えている節がある。仕事は出来るが事務処理はまずい、という人がいるが、一寸そんな感じのダラシのない国民性を持つているのではないかと思う。こんな一寸したことコスツカライばかりに泥棒の国呼ばわり

されるなんて損だと思っけど平気なのかしら。

三・ 食って歌って恋をしる

一寸悪口を書き過ぎた。現代のイタリア人の良いところを探してみよう。

器用と言うことで、カメオ細工、革製品、モザイク等は素晴らしいものがある。徒弟制度みたいなのが残っていて技術が受け継がれている。騙されなければ安い。もっともスリも世界一の技術を持っている、と言うから器用は良し悪しかも知れない。

建築や美術は今も良いようである。立派な高速道路があり、高速道路網はアメリカ、ドイツに次いで世界第三位とのこと。ローマの駅に行ってみたが中々立派だった。コンクリートだが曲線を上手く作り、広い空間に全く柱がない。もっともこれ位のものは作らないと二〇〇〇年前の古代ローマ人に笑われる。そう言えば車のデザイン等も中々良くて世界中の人がデザインを買いに来る、と聞いたことがある。

楽道家揃いのようである。今日の仕事を明日に延ばすな、というのが日本人のやり方

だが、ここでは、今日やらずとも良いことは出来るだけ後へ延ばそうとする。一度しかない人生を楽しむことを先にしよう、というこらしい。とにかく、マンジョーレ、カンターレ、アモーレ。つまり、食って歌って恋をすればこれで満足、というのが合言葉とのこと。貧しい人たちが多いとのことだが雰囲気は明るい。子供達も粗末な服を着ていても表情は陽気そのもの。香港で見た悲惨な雰囲気は全くない。

忘れ物の猫ババ、置いてあるもののカップライも、こんな有難いチャンスにありつけるのは神のご加護だ、と感謝して持つて行くのだそうだ。どうにも救いようがない気がするが、モノは考えよう、と言うことなのかも知れない。

ここが気に入って住み着いている日本人に聞くと、陽気でフランクで肩が張らないのが一番と言うが、普通の感覚の日本人には中々住み難いところではないか、と言うのが率直な感想だった。

日本と同様、政治も経済も目茶苦茶なようで、これは文芸春秋に連載されている。ムッソリーニでは困るが、シーザーみたいな偉い人が出て来てガツチリ纏めたら良い国に

なるのかもしれない、と思った。

(昭和五十年一月十二日)

・一九七五年の元旦は、イタリア・フローレンスで迎えました。昼夜毎食スパゲティに魚か肉の一皿のみ。少ないと言ってブーブー言う人もいましたが、又楽しからずや、でせつせと見て歩きました。新年はニューイヤーズ・ディナーの後、ディスコへ行き、エレキギターの大騒音の中で迎えました。紙ぶぶきが散り、クラッカーの鳴る大変な騒ぎの越年でした。

・観光旅行は連れと案内人にずい分左右されるものです。見て歩きながら、チビ共と一緒に緒だったら、こんなこと話してやるのに、とか、諸兄と歩いたら一緒に感動したり、歴史の知識を交換しながら歩けるのに、と思いました。案内人は日本人がついてくれましたが、通り一遍なのは駄目。あまり酷いのでピサではイタリア人によってもらいましたが、下手な英語でも、自分の説明せんとするものに誇りと愛情を持ち、一人でも多くの人に判って貰おう、と熱をこめて話してくれる姿に感動しました。言葉より

意志とか熱と言うものの大切さを感じました。

・イタリア紀行の中では、やはり美術に触れる必要があることを感じています。解説本片手にずい分歩きました。美術館もさることながら教会の壁画や彫刻、街角の大理石像等にも素晴らしいものがあります。でも、この点は僕の筆にするのは惜しい気がします。これは皆さんに自分の目で見ていただいた方が良さそうです。

イタリア人の天才性（ロンドン便り 八）

第七十八号の「イタリア紀行」ではイタリア人の悪口を書き過ぎたきらいがあるので、今日は少し罪滅ぼしをしようと思う。六月十三日から一週間、イタリアに出張し、いろんな人と話してみてもイタリア人の天才性というものについて感じるところがあった。自分の印象だけかと思ひ、イタリアに三年住んでいる人に聞いてみたが、さして間違った印象ではないようなので、これも第二偏見記ということで読んで頂きたい。

昔からイタリア人には天才と称せられる人が多い。ミケランジェロ、レオナルド・ダ・

ピンチなどは万人が認める天才。あまり知られていないが、少し前の時代のジオットなんて人も知る人の中では大変な天才だったとのこと。イタリア人種というのはこうした天才を生み出す素地を持っているのではないか。とにかく感覚は鋭い。シャープと言いかセンシティブというか、およそ鈍重には程遠い国民性を持っていると思う。これは昔から数多くの芸術家を生み出して来た素地であり、現在でもデザインの素晴らしさと手先の器用さで装飾品や革製品を作り出しているセンスだと思う。先般ご紹介した自動車の運転にしても、乱暴に見えるがやはり計算された乱暴であり、鋭いカンですり抜けるような運転だ、と言ったことが言えそうである。アリタリア航空の飛行機に乗ると、時に曲芸的な滑空や着陸をして驚かされることがある。レーサーなどに有名人が多いのもこの辺の感覚ではなかるうか。ホテルやレストランでのウェイターのサービスも良く気が行き届いて感心させられることが多い。

ところが感覚が鋭いあまり、限界のストレスを狙おうとするから、車の運転にしても、中にそのセンスに付いて行けない人が一人でもいると事故になるし、作るものも凝って

いてきれいではあるが華奢だし、使い方が悪いとどうにもならなくなる。今度イタリアに出張した第一の目的もこの辺にあったと言つても良いようである。イタリア出来の船があり、スピードも出るし燃料の消費も少ないし、荷物も沢山積めるし、すごく良い船なのだが、各機器が限界一杯の性能で動くように設計されているので余裕がなく、最初の内は良かったが段々に悪い箇所が出て来、細かいところで故障が続出して来た、と言う。一旦、故障が出ると余裕のない悲しさで、次々に他の箇所にもそれが波及する。小さな一ヶ所の故障が全体のシステムを目茶苦茶にし、またこれが何時どこで起こるか判らないので、とても安心して船を動かせない、と言う。この辺は使い方の方の悪さとも思われるが、とにかく金は掛かっても良いから、根本的に改装して信頼性のある船にして欲しい、と言つ事で特に日本の造船所に相談をかけてきたものである。技師と一緒に船に行つてみると、狭いエンジン・ルームにギツシリの機械。荷物を出来るだけ沢山積めるように、と機関室のスペースをギリギリまで狭くし、空間の有効活用を図つたものなのだろう。機器類も出来るだけ小さいものを選び、全ての機器を性能一杯に使つて全体のシ

ステムを動かすように考えてあるらしい。造った人と同じレベルの知識と鋭い感覚で使えばまことに素晴らしい性能が出せるのだらうが、通常のレベルの仁が動かすところな支障が出てくることになる。

ミラノで地下鉄に乗ってみる。比較的新しいが、見た目にはすぐきれい。車体も車内もスッキリしていてセンスが良い。改札口も完全自動化で大したものであるが、いかにもキャシャと言つ感じがする。これも最初の間は良いが、作った人の心を十分に汲み取れない大勢の人が何年も使つたらどう言う事になるか。十年、二十年後の状況が楽しみである。この辺は英国人とは大分違う。英国の地下鉄は少々格好が悪くても、あくまでガツチリ作られ、少しくらい乱暴に使おうが何年使おうが平気と言つ感じである。

政治・経済にしても同じようなことが言えるのではないか。戦後、何度となく訪れた経済危機もキワドイところで他国からの援助が入って救われているし、先般来の政治混乱とインフレだって、イタリア経済は破産だ、何て言われながら、別に何てことなくやっている。ギリギリのところでは危険を回避する天性があるから、余所者が心配するほど

当人は心配していないのかも知れない。

こうした天才性の弊害の一つは、どうしても個人技に走り団体生活が出来ぬことにあ
る。サッカーにして然り。イタリアのみならず、ラテン系のサッカーの特徴は華麗な個
人技にある。見た目には素晴らしいが、他のプレーヤーとの協力が欠け、成功すると誠
に見事だが、一旦失敗すると大変な穴が開き、取り返しのつかないことになる、と言う。

秩序のないように見える車の運転や駐車の様子もこの辺が原因だと思つ。規則と言
うものは人のために作ったものなのだから、人が便利に使えば良いものであり、規則に
縛られるなんて愚の骨頂と言うことなのだろう。規則のためには死んでも良い、という
感じのドイツ人とは大違いである。自分の運転能力に依じて、スピードを出そうが、無
理な追い越しや割り込みをやるうが、それで良いではないか、という考え方らしい。

イタリアの軍隊は世界一弱い、と言われる。元々都市国家の集まりで、生れ故郷や家
族は大事にするが国を大事にする気持がなく、国のために死ぬ程馬鹿らしいことはない
と考えているのだそうだから弱いのは当たり前だが、やはり規律の取れた団体生活が出

来難い、というのは軍隊を弱くする大きな一因だと思う。

イタリアの政治が多党の乱立で混乱していることは良く知られているところだが、このところ共産党の伸びがすごい。偶々小生滞伊中の六月十五日の地方選挙でも共産党は大変な伸びを示し、トップのキリスト教民主同盟と略々同数の三五%近い得票率だった。均一化とか、統制とかが嫌いで、個人の自由を重んじ、むしろ我侷なイタリア人にどうして統制を重んずる共産主義の受入れが可能なのか疑問に思うが、日本の場合と同じように非常にソフトに社会主義を標榜している共産党の政策に、若い人たちが、共産主義の何たるかも判らずに惹かれていて、という見方もあるし、イタリアにはイタリア的共産主義がある、と言う見方もあるとのこと。社会主義的色彩が強くなると、日本では日教組が言っているように、又イギリスでも労働党政権が推し進めているように、教育の平準化という思想が出て来るのではないか。教育は機会均等に与えねばならぬ、という標語のもとに、能力のある子供を伸ばす、という思想が薄れて来る。教育程度を誰もがついて行ける程度まで落とす、という悪平等の考え方が勝ってくるのではないだろうか。

イタリアの場合、この天才性の土壤の中から数少ない天才、又はそれに類する優秀な人が生れて来て、その人たちが多くの凡人大衆を引っ張っていると思われるだけに、将来どう言う事になるか興味深い。

(昭和五十年六月二十一日)

イタリア紀行

一・ システイナ礼拝堂

三十年程前ロンドンにいた頃、ロンドンからのツアーでローマへ行った時のこと、バチカンのサン・ピエトロ寺院に隣接したシステイナ礼拝堂に入って、もの凄く感動したことがあります。ミケランジェロが、旧約聖書の創世記の一週間からノアの箱舟までを描いた天井画に感動したのです。同じ種類の感動は江田島に行ったとき、教育参考館を見学した時に経験したことがあります。入っただけで顔からスーッと血が引くような、そこにいるだけで涙が出て来るような、そんな強烈な感動でした。その後、大袈裟に言えば、死ぬまでに一度で良いからシステイナ礼拝堂に行つて、再びあの感動に出会いた

い、と言うのが長年の夢でした。私にとって、今回の旅の目的は殆んど只一つ、システイナの天井画を見ること。イタリアにはロンドン時代を含めて十二回出入りし、各地に四十四泊していますが、仕事の関係が中心でしたからジェノアが主体でした。ベニスは初めてでしたが、システイナの他は家内の添乗員役の積りで出かけたのでした。

安い往復航空券と安全で清潔であれば良い、という条件のみの安いホテルだけを旅行会社に頼んだ貧乏旅行でしたが、こればかりは絶対に逃してはならない、とシステイナ見学が含まれていることを何度も確かめた上、「バチカン博物館見学ツアー」だけは最初に予約を固めました。早朝の見学だけど、遅くなって混んで来る前に見ようというものです。ローマの三日目、朝六時には起きて前日の朝食の時にくすねて置いたパンとバターと冷蔵庫のジュースで朝食を済ませ、七時の出迎えバスを待ちました。日本人ばかりの三十八人の大ツアーになっていましたが、案内人がベテランの女性でシツカリした説明してくれたのはラッキーでした。バチカン博物館を入ると、古代ローマの彫刻の間、タペストリーの間、ラファエロの間なんかを通過して礼拝堂に近づいて行きます。無

線の説明のシステムが上手く機能して説明が良く判ります。ラファエロなんて、優しい女性や天使の姿を描いた絵ばかり描いていたのではないかと思っていました。ラファエロの間には力強い壁画が何枚もあって、新しい発見をしました。礼拝堂に近付くにつれて何だか涙腺が緩んで来るような感じがしましたが、何とか大丈夫でした。礼拝堂でユックリするため、ツアーの一行とは別行動にさせて貰い、大変な人込みの中で一時間近く、あちこち歩き回ったり、壁際のベンチに腰をかけたりして夢の実現の感動に浸っていました。十年程前に日本テレビが請け負って和紙を使って清掃したということは聞いていましたが、三十年前に見た時よりズツとキレイになっていました。ミケランジェロが三十代の若さで四年をかけて描いた、長さ四十一メートル、幅十三メートルの天井画で、絵を描いた面積は側壁を入れると八〇〇平方メートルになるようですが、旧約聖書の創世記、光と闇の分離から太陽と月の創造、陸と海の分離、動・植物の創造、アダムの創造とイブの誕生、楽園追放からノアの箱舟までを描いた構想のスケールの大きさと力強い画に改めて感動しました。やはり中央の、神様が指でアダムに生命を与えてい

る有名な部分が一番のお気に入りです。

同じ礼拝堂に、これもミケランジェロが六十歳を過ぎてから描いた最後の審判の壁画があつて、こちらも素晴らしいけど、私はどうしても天井画の方が好きです。早起きして昼過ぎまで、最後はサン・ピエトロ寺院のやはりミケランジェロのピエタに再会し、大分疲れたけれど念願の夢を実現させて満足の一日でした。

二・腰痛

今回の旅行を計画するに当つて、心配のひとつは腰痛と膝痛でした。膝痛の方はゴルフ場のジムでの訓練のお蔭が大分良くなって、ひと頃は階段の下りがつらくて、一階でもエレベーターやエスカレーターを利用してはいたのに、最近では抵抗なく階段を利用出来るようになったし、ゴルフ場でも相当の下り坂でも気にならなくなっていました。ところが腰痛の方は残っていて、長い時間立っているのがつらいし、ゴルフも後半になると腰が痛重くなるのでカートを使わないと完走が困難です。これもジムと朝の腰痛体操

のお蔭で大分楽にはなりました。週に一度医者に通って牽引と電気でのマッサージとストレッチをやって貰っています。腰には歩くのが一番良いらしいのですが、逆に膝には歩くのは良くないとのことなので、裏山歩きも控えているのが良くないようです。

飛行機の狭いエコノミーの座席がまず心配でしたが、往きは満席の中で私どもの席の隣だけ一席空いていて全くラッキー。少しはユックリ出来たし、通路に出てストレッチ体操も出来て全く問題ありませんでした。見物に当っては流石に良く歩きました。日が経つにつれ腰が痛重くなる時間が早くなって来ましたが、翌朝には何とか直って無事完走できました。

でも、考えてみると仕事の都合やお年寄りの問題、ペットの心配など制約を持つ方が多い中で、腰痛ぐらいが障害になると言うのは、むしろ幸せと考えねばならないのかも知れません。懐の問題を除けば、何の心配もなく能天気遊び呆けていられるのは幸せ、と言うより申し訳ない気がしました。

三・最後の晚餐

この絵を最初に観たのも、ロンドンにいた三十年ほど前のことでした。ミラノのサンタルチア・デル・グラッチェと言う教会に隣接した食堂の建物と言ったことでしたが、路地の奥まったところにある、冴えない建物の小さな入り口を入って行くと、薄暗い部屋の左側の壁一杯に薄汚れた絵が描いてありました。大勢の人が入っているのを観るのが困難でしたが、これが有名なレオナルド・ダ・ヴィンチの「最後の晚餐」であることは何とか判別できました。世界的名画を観る環境としては勿体ないな、と思ったのを覚えてきます。

二度目に観たのはハウステンボスに来てからのこと。品物の買い付けに販売本部の若い人を連れて何度かミラノに行きましたが、その機会に若い人にも観せる機会を作り、私も現地の出先のクリビオ夫人と一緒に再訪したのでした。丁度、清掃中とのこと、絵は一面足場に覆われ、絵を鑑賞する雰囲気ではありませんでした。遠くから、足場板の間越しに観たのですが、一緒に行った若い人たちも、折角の名画とはこんなものな

のか、とガツカリしたのではないか、と気の毒な思いがしたものです。

で、今回が三度目。最初の訪問地がミラノなので調べてみると、「最後の晩餐」の観賞には予約が必要、と書いてあります。かなり高い予約料ですが、これを外す訳には行かないので、事前に準備しました。地下鉄を乗り継いで行ってみると入り口には立派なカウンターが出来ていて、予約を確認して切符を入手。どうやら入場者数を制限するのが目的のようです。日曜日だったせいもあって駆け込みで来た人もいましたが、今日は一日中予約で満員だから入場出来ません、と断られていたようで、遠くから来た人には気の毒でした。時間になって入場しましたが、入り口も変わっていて、シツカリした管理が出来上がっている様子が判ります。一度に二〇人程度しか入場させず、静かにユックリこの名画を楽しんで貰おう、というシステムが出来ていました。イヤホーンの解説を聞いていた所為で、一緒に入場した一般の人たちよりも長居をすることが出来、美しく修復された絵を心行くまで楽しみました。

この絵はご存知の通り、キリストが、裏切り者の密告によりローマの兵隊に逮捕され

る直前の最後の晩餐の様子を描いたものですが、この絵には二つの寓意がある、というのが私に刷り込まれた知識でした。一つは、西洋人は十三と言う数字を嫌いますが、それはキリスト教徒にとっては誠に縁起の悪い、この最後の晩餐に参加した使徒の数がキリストを含めて十三人だったから、ということ。もう一つは、西洋人はテーブルの上で塩のビンを倒すことを縁起が悪いと言って嫌いますが、これはこの晩餐の席でキリストが「この中に私を裏切った人がいる」と言った時、裏切ったユダが驚いて塩のビンを倒したからだ、ということでした。イヤホーンの解説を注意して聞きましたが、そのことには全く触れていなかったのです、私が間違っていて記憶していたのかも知れない、と思います、どこかで確認せねばならないな、と思っっています。

四・オペラ

オペラ好きの川口兄には申し訳ないけど私はこれまでオペラを観たことがありませんでした。テレビで観たり、映画の中の劇中劇として観たことがある程度なのですが、

どうもあまり親しめなくて高い金を払って劇場に行く気がしなかったのです。イタリアに行くとなると何と言ってもここはオペラの本場。一度位は観ないと話しにならない、と思いました。ミラノのスカラ座で何かやっていると思いましたが、聞いてみると夏場は公演がないとのことで、まずこれはダメ。どうやらスカラ座はこの間、日本で公演していたようでした。現地に行つて見たら劇場は夏休みを利用して大改装中で、これでは公演は出来ないのが良く判りました。それなら何でも良いからどこかで観たい、というこちらの要請に依じて代理店で探してくれた結果、唯一のチャンスがフィレンツェにひとつ。演目がヴェルディの「トロヴァトーレ」と言います。劇場と直接交渉しているわけではないので、警沢は言えません。何でも良いから取れる席を取ってくれ、と頼んだら一席三万円と言うのが取れました。大分プレミアムもついているのでしょう。方々への手数料もかかっていたようです。高いけれど仕方がない。フィレンツェはオペラの発祥の地と聞いているし、貧乏旅行の中の唯一の警沢と考えることにしました。「トラビアータ」は椿姫。「トランドット」や「トロヴァトーレ」も名前は聞いたことが

あるけど、どんな話だか全く判りません。長崎の本屋でオペラの解説本がないか探してみるけどやはり田舎、適当な本が見つからないのです。伝家の宝刀、インターネットのヤフーに頼ることにしました。粗筋を書いたものを引っ張り出したものの、これが大変な代物。解説者の日本語がお粗末な所為もありますが、何度読んでも何が何だか全く訳が判らない筋なのです。解説者も呆れたのか、最後には「これはハチャメチャの筋なので、筋には構わないで音楽だけを楽しんだ方が良い」なんて書いてあります。これはもうヴェルディの曲だけを聴きに行くことにしよう、と覚悟を固めて出かけました。

旅も半ばで疲れも出て来ているし、夕食にはどうしてもワインを飲むので居眠りだけが心配でした。フィレンツェで一番の劇場と言うコムナーレは流石に立派。席は四階までありますが、三万円の席は勿論一階正面の最上席でした。で、肝心の内容は、と言うと、筋はサツパリ判らず歌の意味もサツパリでしたが、本場の声は素晴らしい。それとイタリア語と言うのはオペラにピッタリだな、と言うのが印象でした。二人とも何とか居眠りはしませんでした。が、楽しんだ、というには少々おこがましく、良い経験をした、

と言う辺りが正直なところでした。八時半からタップリ三時間で、はねたら深夜。アルノ川の川風に吹かれ、大接近の日は過ぎてはいたものの、まだ大きな目の火星を見ながら、歩いてホテルに戻りました。

その後、オペラ好きの友人に聞いたたら、あれは誰も判らないよ、とのことで、変な自信をつけました。

五・イタリアの友人達

三菱重工時代、イタリアにはお客はいましたが、流石に友人と言える人はいませんでした。ハウステンボスに来て販売本部の責任者になってから、店作りや商品開発で一緒になって苦労してくれた人達がいます。販売の仕事を離れてからも、暫くはクリスマス・カード程度の付き合いはしていたのですが、今やハウステンボスとこの人たちとの契約も切れて、私もこの四・五年は音信不通の状態でした。イタリア行きを決めてから、やはり会いたい、と思つて昔の住所を引っ張り出して葉書を書きました。コーヒー

でも飲みながら昔話をしたいね、と言ってやり、Eメールで返事をくれないか、と言ってやりましたら夫々から返事が来ました。是非一夜、皆で食事を一緒にしたい、と言う提案です。一人はジェノア大学の学長で、パサージュの店の内装工事のデザインをやってくれたガローニ先生。三菱重工で初めて客船を造った時、客室のデザインをやってくれた人です。この人が態々ジェノアからミラノまで出て来てくれて会を取り仕切ってくれました。

まずはミラノの大富豪のクリビオさん宅で一杯。クリビオさんと言う人は船の代理店のオーナーですが、日本郵船のイタリアの代理店で、故岡本光生先輩も良く知っている人です。十二年程前、最初にお目にかかったとき、共通の友人として岡本さんの名前が出て来ましたが、岡本さんのことを非常に高く評価してくれていて、岡本さんが難しい病気だと言うことはこの人に聞いたのでした。岡本さんが亡くなったとき、茂木兄（だつたと思います）から第一報を貰って、すぐに航空券の手配をし、まずこのクリビオさんに一報を入れてから葬儀に参列のため上京したのでした。当時のことが話題になり、

惜しい人を亡くした、という話になりました。

この人の奥さんが、ハウステンボス立ち上げの当時、イタリアでハウステンボス・デザインを開発して商品化しよう、と言うアイデアに乗ってくれて、ミラノにハウステンボスの出先事務所を開いてくれました。助手をやってくれたのが英語に堪能で魅力的なポルタ夫人でした。ポルタさんも、もう二十才の娘さんを持つお母さんですが、相変わらず若くてセクシーでした。Eメールで連絡を取り合っていたのですが、日本を出る直前、ランデブーの時間と場所を決める段階になって交信が途絶えたので、どうしたのかと思っていました。丁度その二・三日前に、私がコンピューター・ウィールス防止用のソフトを入れたら、パソコンの調子が悪くなって困っていたので、そのせいかと思い、イタリアに着いてから電話で連絡を取り合って首尾よくランデブーを実現しましたが、聞いてみると、やはりポルタさんも丁度その頃ウィールスにやられて、パソコンがお釈迦になったとのこと。この話題は世界共通になっているようです。

一晩スツカリご馳走になり、ワインを飲んで昔話に花を咲かせましたが、この人たち

もハウステンボスのミラノ事務所を閉鎖してからは、お互いに全く没交渉になっていたとのことで、皆さん、日本からの旧友に会えたのも嬉しかったけれど、私が行ったお蔭でお互いのお付き合いが再開できた、良い絆を作ってくれた、と喜んでくれました。

六・添乗員失格

ミラノから三時間、ヴェネツィアに着いてヤレヤレと汽車を降り、駅前の棧橋に向かう途中、流石に南は陽射しが強い。家内に向かって「君も帽子をかぶったらどうだ」と言った途端、自分が列車の中に帽子を忘れて来たことに気がつきました。家内をそこに残してホームに駆け戻り、降りた列車に乗り込んで座席に辿り着きましたが、窓際の鉤に掛けあった帽子はありません。ヤレヤレ駄目だったか、やはりイタリアだな、と降りようとしたらドアが閉まっているではありませんか。開扉のボタンを押しても開きません。その内に列車が逆に動き出したのには驚きました。どうなることか、と車内を歩いていたら、お掃除のオバさん達が乗っているので話し掛けてみませんが、英語は全く駄目。

この人たちが乗っていると云うことはその内にヴェネツィア駅には戻るんだらう、とは思いましたが、どう言つ事になるのか判らない。暫くして止まったので、運転手のところに行つて見ることにしました。一番前の車両に行つたらそれらしい人がいて、私を見てビックリしているけど、これも英語は全く駄目。「ヴェネツィア、ヴェネツィア」と叫んだら、俺に付いて来い、というジェスチャーで一番後ろの車両まで連れて行つてくれて、ここで待っている、との身振り。駅前に残して来た家内が心配でしたが、どうしようもありません。何時かは戻してくれるんだらう、と腹を括つて、この顛末は皆さんに白状しなければ、と文章を作つていたら動き出して、三十分ほどで別のホームに着きました。この列車が元々このホームに戻る予定になつていたので、私がイタリア国鉄のダイヤを乱したのか判りませんが、とんだへまでした。知らない街の駅前に一時間近くも放り出された家内がどうしているか、と飛んで行つてみると意外に平気な顔。どうせ詰め込まれて次の駅まで行つたんだらうから一時間は掛かると思つていた、なんて肝つ玉の据わつた返事に驚きました。パスポートを盗られるなんて酷い経験をすると、外国

でも怖いもの知らずになるんだらうか、なんて妙な感心をしました。

件の帽子は、その日と翌日の二回、遺失物係に行ってみましたが、出て来ませんでした。この国は、人が目を離した荷物があると、これは日頃の信心のお蔭で神様が与えてくれたお恵みだ、と感謝して喜んで持って行ってしまってお国柄なのだそうです。列車の中の忘れ物なんて、それこそ盆と正月が一緒に来たような素晴らしいお恵みだった訳で、この日の神様は相当感謝されたことでしょう。安くないお気に入りの帽子でしたから。

七・ヴェネツィア

今回訪れたイタリアの街八ヶ所（ミラノ、ヴェネツィア、フィレンツェとピサ、ローマ、ナポリ、ポンペイとカプリ島）の内、初めてなのはヴェネツィアだけでした。ヴェネツィアと言う街は六世紀頃、北から攻めてきたフン族のアツチラ大王の侵略を避けて、街ごと海の上に逃げ出して出来た街。海の上でアツチラと戦ってこれを打ち負かし、侵略を諦めさせて、そのまま強大な海運国に育って行った経緯は、塩野七生が「海の都の

物語」に詳しく書いています。

聞いてはいましたが、確かに変わった街。主要道路が全部運河です。バスがヴァポレットと言う乗合船で、タクシーと称する小さなモーターボートも格好良く走っていますが、いかにも高ソールで乗る気になれません。このヴァポレットが終日ほぼ満員で運河を行き交っています。地理を少し頭に入れると実に楽に利用できるのです。サンタルチア駅に着いて、駅を出てすぐに七十二時間券を買いましたが、都合八回利用して丁度ペイした、と言う勘定になりました。一回毎に切符を買う手間が省けた、と言うことです。乗り場の改札口に切符切りはいませんが、船の中で時々怖い顔をしたおじさんが検札に来ます。こちらは検札が来ると嬉しくて、七十二時間券を見せびらかしていました。一人、切符を持っていない人が見つかって相当厳しく調書みたいなものを取られていました。割と大きな罰金になるようです。

ヴァポレットの運転にも興味がありました。船長と綱取りの共同作業が実に見事なのです。船着場に近付くと綱取り役が舷側で、手に持った短いロープを棧橋のボラードに

クルクルツと巻き付けます。これが船乗りがやるロープ・ハンドリングのルールに則った鮮やかで素早い作業なのです。船長はこの一本のロープの力を利用して船を棧橋に押し付けて停止させます。日本だと安全規則がうるさくて、綱を少なくとも二本ぐらい取り、渡り板でも渡さないと客の乗降はさせませんが、こちらは平気なものです。このまま客を乗り降りさせ、それが済むと船長は船を少しバックさせます。これで止めてあったもやい綱が緩むので、綱取り役が素早くもやいを解く、船はそのまま棧橋を離れる、と言う訳。一本の短いロープで船が操られている感じですよ。

大通りを船で行き、船から上がると殆んどが狭い路地です。人一人ヤツと通れるようなところや、建物の下のトンネルみたいな道もあります。所々に一寸した広場。大きな建物と空間があると思うと大抵が教会でした。通りの名前なんかついていませんし、地図にもありません。作ろうと思っても出来ないのではないのでしょうか。旅行者用には、広場に出ると名所や主要な目的地に向かうための矢印が出ています。ですから、どんな路地を歩いても怖くない。方向さえ間違えなければ目的地に着くことは出来るのです。と

ところが「あの広場の角に良い店があったから又行こう」なんて思ってもこれは中々難しい。我々も一つ店探しをやって苦労し、全く「運良く」、偶然みたいにして発見しました。

一番大きな広場が有名なサンマルコ広場。ナポレオンも驚かせたと言う、立派な建物に囲まれた大広間みたいな大空間です。映画「旅情」でキャサリン・ヘップバーンがロツサノ・プラッツィに出会ったのがこの広場のフロリアンと言うオープン・エアのカフェでした。最初の日、ここで飲んだカンパリ・ソーダがやけに美味しかったので、二日目も食事の前に行くことにしました。六・七人のバンドの演奏付きなので、席料を取られません。カンパリ・ソーダを頼んで音楽の始まるのを待っていたら、始まったのが「マイ・フェア・レディ」。上手にメドレーになって二〇分間タップリ聞かせてくれました。スタンディング・オベーションこそしませんでした。かなり熱烈な拍手を送ったら、どうやらバンドのリーダーの目に止まったらしいのです。一〇分ほど休んで次の回はシュトラウスのワルツから始まりましたが、次にやったのが何と「キャッツ」

の「メモリー」。これでカンパリ・ソーダー一杯では安い、と思つてまた大拍手をしたら、次は「オペラ座の怪人」でした。どうやら、ミュージカル好きの日本人がいる、と言うことが知れたらしいのです。ボーイが二十七ユーロの勘定を取りに来たので四十ユーロ渡し、「3 for you and 10 for them」と言つてチップを届けて貰ったら、バンドリーダーのバイオリンからアコーディオン、クラリネット、ピアノ、ベースと皆が夫々に、額に手をやってそれをこちらに向かつて投げる、きれいで優雅なサルトの挨拶をしてくれました。最後の曲の選曲に少し時間が掛かっていましたが、やり始めたのが「瀬戸の花嫁」でした。一〇ユーロと言えば約一三〇〇円ですから、一人当たり二〇〇円足らずのチップですが、こんなことをする人も少ないらしく、バンドの皆さんも嬉しかったのでしよう。名残惜しかったけれど食事の時間になつて立ち上がりましたが、バンドの皆が目で挨拶して送ってくれました。一寸したことで気持の良い、良い思い出が出来ました。

八・秩序のない国

大分昔、イタリアに初めて行ったとき、秩序のない国だと言っ第一印象を持ち、それをご紹介したことがあります。今回も方々で同じことを感じましたが、詰まるところ、イタリアと言っ国は、個々人が割りと人の迷惑を考えないで好きなことをやる社会、そしてこれが抵抗なく認められている社会なのではないか、と思ひます。お互い様ということなのでしよう。悪く言えば、自分本位と言っか、自分さえ良ければ良い、と言っ人たちが住むお国柄なのではないでしょうか。農耕民族で、周囲に気を使うことに慣らされている日本人から見ると、やり切れない思ひをさせられることが多い人たちみたいです。

ミラノの空港に着いてすぐ、最初の計画ではバスで街中へ出て、歩いてホテルに行く積りでしたが、飛行機が大分遅れて夜も遅いし、長旅で疲れてもいるし、最初だけタクシーをオゴルことにしました。荷物を引きずって出て来ると、ボス風のおじさんが「タクシーか？」と聞きます。コレコレのホテルだ、と言ったら「街までのタクシーは全部定額料金になっていて五十五ユーロだ」と言ひます。事前に仕入れていた情報とは大分

違うので、それじゃバスにするよ、と言ってそこを離れ、少し離れたところにあるタクシー乗り場で待っている運転手に、メーターで行くか、と聞いたら、行く、と言うので乗ることにしました。ああいうウソを言って大きな顔をしているおじさん達が我が物顔をして歩き回って勝手なことをしている、そしてそれを咎めようともしないで許している、これが自由奔放主義の国なのかな、と思いました。件のタクシーは十八ユーロでホテルに着いたので、チップ込みで気持ち良く二〇ユーロ渡し、それでも半分以下の値段で済みました。

ミラノの駅で切符を買おうと長い列を作つて並んでいました。ソロソロ三・四人目になつたところで突然、窓口の上にCHIUSSO(CLOSE)のサインが出るではありませんか。中では若い可愛い女の子が現金の整理なんかを始めています。丁度六時だったので、その子の終業時間だったのでしょう。どうやら「これ以上は並ぶな」と言うことだったらしく、私の所まではやつてくれました。日本だったら、行列の面前に「中止」のサインを出すより、交代要員が来ると思うのですが、これもお国柄か、と思いました。

オペラ劇場に行くのと流石に着飾った人たちがウロチョロしています。オペラ観劇となるとタキシード姿の印象が強くて、少し心配しながら、夏のジャケットにワイシャツ・ネクタイ姿で出かけたのですが、心配する程のことはありませんでした。それでもカジュアルとは言えキチンとした服装の人ばかりです。それが開演時間が近付いても、席は空席だらけで騒然としている。照明が段々に暗くなるにつれて席が埋まって来ます。日本だったら真ん中の席の人は気をつけて、早目に席に着こうとするだろうと思うのですが、一番真ん中の席の人が一番遅れて入って来る。手前の席の人は次々と立って通します。通って行く人も平気だし、立ち上がる人も左程迷惑そうな顔をしていません。おばちゃんやチャラチャラした女の子が多いのは日本でも同じかな、と思いました。最初だけなら席が判らないから仕方がないのかも知れないけど、休憩時間が終わって入って来るときも同じ現象が起こっていましたから、これはやはり気ままな自己中心主義・自由奔放主義の現れだと思っています。

ローマで地下鉄に乗りました。立派な自動販売機が並んでいて、出札の窓口はありま

せん。説明書きのところはイタリア・英国・フランス・スペインの旗のマークがあつてそれを押すと四ヶ国語夫々で説明が出て来る親切な仕組みになつています。それに従つてボタンを押して行くと切符が出て来る筈なのですが、肝心のコインを入れるところまで来ると何度やっても上手く行かない。隣で現地の人も何度も同じことをやつていましたが、上手く出て来ることもあるけど出て来ないことの方が多いのです。何度も何度もやっていたら、近くにいたオジサンが見兼ねて、キオスクで買ったほうが良いよ、と教えてくれました。見ていると、こちらの人は機械には目もくれず、最初からキオスクで切符を買っています。何のための立派で複雑な機械なんだろう。

そう言えばロンドンに駐在していた頃、イタリアの船主から、自分の船の調子が悪いから全面的に改装したいので相談に乗ってくれ、と言われて、何度もこのお客を訪問し、日本からもエンジニアを呼び寄せて打合せをしていたことがあります。船を見に行つて機関室に入つて行くと、狭い機関室に機械がビッシリ詰まっています。機関室を出来るだけ小さく納めて、その分荷物を沢山詰めるように造られた素晴らしい船なのです。こ

のお客はこの船をイタリアの設計者に設計させ、イタリアの造船所でシリーズで十隻ほど造ったのですが、皆故障続きでどうにもならなくなり、三菱重工に相談して来たのです。小型で高性能の機械を効率よく配置して機関室を小さくしたアイデアは、アイデアとしては素晴らしいのですが、使う人のことを考えていないものですから、一寸使い方を間違ったり、使い方が乱暴だったりするとすぐに壊れてしまうのです。日本から来たエンジニアと「フェラーリの繊細な構造のスポーツカーに、ダンプロトラックの運転手を乗せるからこんなことになるんだ」と笑い話をしたことでした。これとて同じこと。設計する人は自分のレベルで物を考え、自分で運転すると思うからこんな船を造ってしまう。これも他人のことを考えない、自分本位のお国柄の人が陥る失敗なのでしょう。地下鉄の自動販売機と格闘して、「汗の小一升もかきながら」こんなことを考えていました。

九・南イタリア

ミラノはイタリアのほぼ北端にある都市ですが、ミラノの人は、南イタリアの人たちは我々とは人種が違う、文明人ではない、と言います。どこまでが北なのか聞いてみたら、ミラノより南は全部南イタリアだ、とのこと。その時一緒に、ミラノの少し南のジエノアの人がいたせいか、ヴェネツィアからジエノアまでは北に入れても良いだろう、という話になりました。ちなみにローマはどうだ、と聞いたら「very south」とのこと。

古代ローマの時代、特にシーザーがガリア人（ケルト人）達を平定する以前は、勿論ローマが中心で、北イタリアはガリア人やゲルマン人の侵略を防ぐための辺境の地だった訳ですから、いつからどうしてこうなったのか判りませんが、イタリアも北と南では大分様子が違います。今回の旅は、北から南に下るルートでしたので何かその辺の比較が出来たような気がしました。他所の人を受け入れる心の余裕と言った面での違いを感じたのです。

ミラノの次の訪問地がヴェネツィアでしたが、ここには未だ、観光都市として生きて行こう、という気持が人々の態度の中に見られました。ホテルにしてもレストランにし

てもお店にしても、お客さんに喜んで貰おう、と言うサービスの心や温かい心が見えたような気がします。別項のサンマルコ広場での良い印象があつて殊更そう感じたのかも知れません。

次のフィレンツェは少し南に下りますが、見事なドウオモを中心に美術館がシツカリしており、世界中から人が集まる芸術の都・観光地としての誇りみたいなものを感じられました。オペラ座の近くで偶然入ったレストランは中々素敵で、翌日もまた行つたほどこでしたから、人をもてなす気持の余裕といったものが未だ十分に残つていけると言えるのでしよう。

ローマになると流石に、大分南に來たな、という感じがします。観光都市として世界中に名を知られ、多くの人を受け入れている筈なのに、受入れ態勢に難があるような気がしました。観光客や外国人に対する配慮に欠ける気がするのです。五〇年前の名画「ローマの休日」による宣伝は見事でした。グレゴリー・ペックの記者が、オードリー・ヘップバーンのお姫様を案内して回つたスペイン広場、トレビの泉、真実の口などは今で

も殆んどの観光客が目指す名所になっています。あの映画の最後のシーンで、記者が欧州の国々を一周して来たお姫様に向かって、どこが一番お気に召しましたか、と質問する場面があります。お姫さまは外交官として親善訪問をして回っている訳ですから、特別の国を鼻屑にする訳には行きません。お付きが作った原稿に従って「どこの国にも夫々の良いところが・・・」と外交辞令を言いかけるのですが、突然、たまらなくなつて自分の言葉で「ローマです。ローマが一番好きです」と言わせる辺りは中々素敵で見事な宣伝でした。ところが五〇年経った今、これに加えるものがないのです。暑い中を地図を片手に汗をかきながら歩いている観光客とおぼしき人たちの姿の多いこと。日中、街を歩いている人の半分以上は旅行者ではないかと思われましたが、旅行者に対する標識は誠に不親切。突然目に入って来る名所旧跡も、辿り着いて見たら、ああこれか、と言うのみで何の演出も感じられないのです。お土産屋と食べ物屋がドッサリあるのみで、むしろ三〇年前よりも荒れた感じすらしました。イタリアは国の経済の大きな部分を観光に頼っている国の筈。二〇〇〇年も三〇〇〇年も昔の、偉大なイタリア人のお蔭で今

の多くのイタリア人が飯を食っている、と言っても良いのではないかと思います、このままでは早晚、観光客の足も遠のくのではないかと、と気になりました。

ところがこれがナポリまで下つてくると、街の雰囲気からガラリと変わります。まず、ローマの駅にナポリまでの切符を買いに行ったら、出札口のオジサンが全く英語を解さないのです。筆談で何とか理解して貰って希望する列車を予約したものの、当日乗り込んでみると、これが二人並んだ席ではなくて離れた席。これはワザと意地悪をされたのでしょうか思えない、と腹を立てましたが、周りの席の予約状況も目茶苦茶で、お客が騒いでいましたから、意地悪以前の問題だったのかも知れません。乗客同志がお互いに相談して席を収めて、動き出したものの、車中で英語のアナウンスが全くないのです。駅に着いても次の駅の表示もないし、次かな、次かな、と心配するのみ。危うくナポリ駅で降り損なうところでした。何だか暗い、駅だか何だか判らないホームに降り立ったら、胡散臭い強そうなおじさんが近付いてきます。どうやら、ポーターをやらせろ、と言つことらしい。一度は断ったものの、エスカレーターが壊れて動かない暗いホームで、重い

荷物を持ち歩くのも大変だし、第一どこが出口だか見当もつかないので、任せることにしました。ホテルは駅の前、と聞いていたので、荷物を引つ張って歩いて行く積りでしたが、駅の前に出ても広い雑然とした広場があつて、どこがホテルだか判らないのです。ホテルの名前を言うと、この強そうなおじさんは、判つた、と頷くや自分のベルトを引き抜いて二つの重い荷物を振り分けにして担ぎ上げました。ホテルは駅と対角線の向こうの二〇〇メートルほど先にあつたのですが、そこへ向かつて、広場を斜めに横切つて車の流れの中をズンズン進んで行きます。車が来ようがそれが急ブレーキをかけようがお構いなし。我々は荷物にピッタリくっついて車をすり抜けて付いて行きました。が、若しこのおじさんがいなかったら、ホテルに辿り着けなかつたのではないか、と思つた程でした。三〇ユーロだ、と言うポーター代を二〇ユーロまで値切つたものの大分高いものにつきましたが、重い荷物から解放してくれた上に、暗い地下のホームから、壊れたエスカレーターの階段を登つて出口まで連れ出してくれ、判り難いホテルを探してくれ、決死的な広場の横断を敢行してくれて、全部を合わせればこれ位払つても良い

かな、と思ったことでした。

駅を降りて感じたのが、ここは他の土地とは違う、と言うことでした。人々の目つきが違うのです。さもしいというか、卑しいというか、隙あらば何かやってやろう、という感じの目つき。私はいろんな国を歩いています、初めて、怖い、という雰囲気を感じたのです。私は旅行中、財布はズボンのお尻のポケットに入れ、カメラや傘なんか大したことはないものを入れたショルダー・バッグを片方の肩にかけて歩くのが癖になっているのですが、駅を出た途端、自然とバッグをタスキ掛けにして前で抱える旅行者お決まりのスタイルになりました。財布は勿論、お尻のポケットから抜き出してバッグの中です。ポーターのオジサンからもバッグを突付かれて注意を受けたのですが、それでも自然とそのスタイルにさせられるような雰囲気でした。日本からのツアーによつては、ナポリでは、危ないから、と言ってバスから降ろしてくれないツアーがあるそうですから、やはり怖い街なのでしょう。

ナポリと言う街は天然の良港で、紀元前七世紀頃ギリシャの植民地として発展しまし

たが、その後古代ローマが力を持つている間はローマの支配下で軍港として栄えました。その後はビザンチン帝国の支配下に入ったり、ノルマンに征服されたり、フランスやスペインの領主が入って来たりで、外国の統治の下にあつた歴史が長かつたようです。こういう土地の人々には何か共通の特別のものがあるように思います。私が特に感じたのは、やはり植民地としての歴史の長いフィリピンと香港でした。人々の心に何か大らかなものがない。人の顔色を窺うような、それでいて自分が責任を取るようなことはしない、何かいじけたものが心の中にあるように思えるのです。植民地特有のずる賢さ、とでも言えば良いのでしょうか。ナポリでもまず、こんなものを感じました。これにイタリア人の特性、勝手気まま主義・自己本位主義が加わります。隙があれば人を騙して自分だけ甘い汁を吸いたい、と隙を狙う人。騙されまいと身構える人。常にそう言う姿勢で過ごすから、勢い人々の目が鋭くなる。泥棒や刑事と同じ種類の険しい目つきになるのではないのでしょうか。

ホテルに入って驚いたのは、レセプションの対応の悪さ。ベル・ボーイの態度、レス

トランのウェイターやバー・カウンターのバーテンダーの姿勢。サービス精神のかけらも見えないのです。街で買い物しても、売ってやる、という態度、グラーチエのひとつ言が中々聞けません。下町のマーケットみたいなどころを歩いて見ましたが、そこら中で怒鳴り合う声が聞こえます。売り買いをするのに、大声で自分の力を誇示し合っている様子です。

街の汚いこと。ゴミの投げ捨ては当たり前のことのようです。道を隔ててアパートの窓から窓へ洗濯物を干すスタイルはナポリの風物として有名になっていますが、こんなのは可愛いもの。街を美しく、なんて精神はどこにもないようです。それとどこからともなく現れる物乞い。

車の運転の乱暴なこと。人々の交通マナーの悪いこと。事故が起こらないのが不思議なくらい。良く言えば、自分の感性に従って、自分の責任で行動していると言つことなのかも知れませんが。イタリア人に自分本位の人が多いことは前にも書きましたが、この傾向は南へ行くほど強くなるのではないか、と思われました。ナポリと言う街は、他人

のことを考えず、自分勝手に勇敢に実行する人にとっては一番住みやすい街ではないだろうか。赤信号でも突進してくる車、その車をすり抜けて歩いている人たちを見て、そんなことを考えました。

折角来たのだから、と郊外のポンペイとカプリ島には、勇を鼓してローカル線の電車や乗合のハイドロフォイル船に乗って出かけました。駅のホームの電光掲示板に「スリに注意」の文字がピカピカ光っているなんてのも、ナポリならではの、です。観光地に行けばそれなりの対応はしてくれそうです。ポンペイの遺跡は一見の価値がありますし、カプリ島も評判通りの美しさでしたが、その玄関口のナポリの街の姿勢はとも観光客を受け入れる態勢ではありません。今はまだ、昔の名前で売っていますが、ナポリは自ら観光都市の名前を返上しつつあるな、と言うのが感想でした。

日本人がナポリに行くなら、やはり旅行会社のツアーに乗るか、ファイブスターの超高級ホテルに泊まり、金に糸目をつけないで旅行するべきではないだろうか。私どものように、スリースターの安ホテルに泊まって個人でピンボー旅行するのは少々無理な

ところ、と思われました。
(紀行文編 二 に続く)

(平成十六年二月五日)